

琵琶湖博物館 年報

9号

平成16(2004)年度



LAKE BIWA MUSEUM
琵琶湖博物館

ごあいさつ

2004年度は、琵琶湖博物館が開館して9年目にあたります。この間、多くの皆様のご協力とご支援を頂いたおかげで、さまざまな活動が続け、あるいは少しずつ新しい事業も進めてまいることができました。頂戴しました種々のご厚情に対し、心から感謝申し上げます。

この年の主な行事としては、まず、企画展示『のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき』の開催があげられます。この展示は、「動かない」植物が子孫を残し、繁栄するために行なっているさまざまな「工夫」を知り、身近にある植物を見直して貰おうというものでした。また、開館当初から取り上げ、その後も共同研究として行なってきました、いわゆる「ハンズ＝オン」と呼ばれる手法の効果を、検証してみようとのねらいもありました。おかげさまで5万人以上の方々が見て下さり、展示だけではなく、その間に行なったさまざまな行事をも通して、いろいろのかたちで興味を持たれたようです。

これに連動して、「植物のある暮らし」と題して生きた水生植物の展示を行ない、陸上ばかりでなく水中で生活する植物についても、関心を深めて頂きました。

時期を限った展示としては、このほかに、『糸を紡いで布を織る－民具の復元・再現・体験－』と『ミクロの世界を探検しよう－プランクトンの不思議－』の、2つのギャラリー展を開きました。これらもまた準備段階から、「はしかけ」グループや県内の教員・研究者などのご協力を得て、開催できたものです。この場合も期間中、展示室などでさまざまな体験活動を行ない、活気あるものにすることができました。

「はしかけ」の活動は、これ以外にも、さまざまなかたちで発展してきています。体験学習や調査の指導・手伝いなど、独自の活動も増えてきました。以前から活動しているフィールドレポーターとともに、琵琶湖博物館の活動に深く関わる方々が、ますますその幅や場を広げて下さっていることを、たいへん嬉しく有り難く思っております。

今年度はまた、博物館の活動をさらに広く知って貰うために、講座や講演を積極的行ないました。とくに、これまでは館内またはその周辺のみで行なってきた「研究発表会」を湖西地域でも開き、その地域の方々に博物館の活動を知って頂くようにと試みたものです。また、国際協力機構（JICA）との共催による「博物館集中コース」を実施し、海外からの研修生にも琵琶湖博物館の理念や活動を知って貰う機会を増やしました。

そのほか、博物館を利用して下さる方々にいっそう快適なようにと、施設利用の面でもいくつかの改善を始めています。今年度から「年間パスポート」の販売を始めたのもその一つです。もっと多くの方々に琵琶湖博物館を知って貰うため、広報活動をさらに充実・強化させようとさまざまな検討を始め、すでにその一部は試行しております。そのような結果もあってか、一般公開から8年5か月ほど経った2005年3月18日には、おかげさまで入館者数が延べ500万人に達しました。

2005年度は、琵琶湖博物館の開館10年目になります。そこで、これまでの活動をさらに見直すとともに、2002年度に策定しました『地域だれでも・どこでも博物館』なる琵琶湖博物館中長期目標の実現を目指して、「琵琶湖博物館中長期基本計画」と「展示交流空間の更新整備に関する計画」を策定しました。今後はこの計画の実現に向けて、さらなる発展のために努力していきたいと考えております。

個々の博物館活動はもとより、その全般に関しましても、厳しくかつ積極的なご意見・ご批判を頂きますよう、お願い申し上げます。

2005年11月23日

滋賀県立琵琶湖博物館

館長 川那部 浩哉

目 次

ごあいさつ	1
I 博物館活動の概要	4
1 研究・調査活動	4
(1) 総合研究	4
(2) 共同研究	4
(3) 専門研究	5
(4) 公表された主な研究業績	6
(5) 研究助成を受けた研究	6
(6) 琵琶湖博物館研究発表会	8
(7) 連続講座	10
(8) 特別研究セミナー	10
(9) 研究セミナー	10
(10) 特別研究員の受け入れ	12
(11) 海外交流活動	13
2 交流・サービス活動	14
1. 利用者主体の事業	14
(1) フィールドレポーター	14
(2) 「はしかけ」制度の実施状況	14
2. 一般利用者へのサービス事業	24
(1) 観察会・見学会等	24
(2) 博物館講座	25
(3) 体験教室	28
(4) 質問コーナー・フロアトーク	30
3. 学校連携事業および体験学習	31
(1) 教職員等研修	31
(2) 視察対応	31
(3) 学校団体向け体験学習	32
(4) 一般団体向け体験学習	33
(5) 「体験学習の日」の活動	33
(6) 職場体験実習	35
4. 展示交流事業	35
(1) 水族展示交流活動	35
(2) 展示交流員と話そう	37
5. 博物館実習	39
6. 来館者との交流会	40
7. 地域交流活動への支援事業	41
(1) 地域活動支援（博物館内）	41
(2) 地域活動支援（博物館外対応）	42
(3) 博物館ガイダンス	45
3 情報発信活動	48
(1) 通信網を利用した館外への情報提供	48
(2) 通信網を利用した双方向の情報交換サービス	50
(3) 情報システムの整備	51

4	資料整備活動	53
(1)	収蔵資料	53
(2)	寄贈者および提供者一覧	56
(3)	購入資料一覧	57
(4)	水族繁殖生物	57
(5)	資料の利用	58
(6)	資料の保管	64
(7)	燻蒸	65
(8)	資料評価委員	65
5	展示活動	66
(1)	常設展示の主な更新	66
(2)	第12回企画展示「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」	67
(3)	水族企画展示	72
(4)	ギャラリー展示	72
(5)	トピックス展示	76
6	国際交流活動	78
(1)	「JICA博物館集中コース」の実施	78
(2)	海外からの視察	79
7	印刷物	82
II	利用状況	83
1	平成16年度入館者数	83
(1)	総入館者数	83
(2)	学校等入館者数	84
(3)	月別・曜日別入館者数	85
2	来館者アンケート調査結果報告	86
3	新聞掲載記録	90
4	雑誌等掲載記録	100
5	テレビ放映・ラジオ放送記録	107
III	組織および運営	109
1	組織	109
2	滋賀県立琵琶湖博物館協議会	110
3	企画・計画	111
4	職員	112
5	予算	117
IV	平成16年度をふり返って	118
1	琵琶湖博物館中長期基本計画の策定	118
2	平成16年度博物館活動の総括	118
V	博物館利用のご案内	124
	平成17年度 職員紹介	126

*表紙の写真：企画展示「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」の展示風景

I 博物館活動の概要

1 研究・調査活動

琵琶湖博物館の事業は、研究事業、交流サービス事業、情報事業、資料整備事業、展示事業という五つを総合的に行ない、特にその中でも研究活動が全ての博物館活動の基礎となる。すなわち、研究の成果の発信として、交流、情報、資料、展示が行われ、研究の成果とその発信が魅力的であればあるほど、博物館の他の事業も魅力的なものとなる。

特に琵琶湖博物館の研究事業では、「生命文化複合体」としての琵琶湖の「価値」を明らかにすることを目標に、学際的な総合研究やテーマをしばった共同研究、ならびに個々の学芸員の資質を高める専門研究に取り組んできた。総合研究と共同研究については、研究審査委員会に対して研究計画書を提出し、その審査を受けて、2004年度は、以下の研究課題が審査を通過して実施された。なお、専門研究については、申請金額の多い研究は申請専門研究として、同じく研究審査会での審査を受けた。

(1) 総合研究

琵琶湖博物館の設立理念を実現することに直接結びつく研究として、総合研究を行った。総合研究のテーマは次の2件であった。

- ・東アジアの中の琵琶湖－コイ科魚類を展開の軸とした－環境史に関する研究

代表者：中島 経夫、研究期間：1996～2006年度

- ・博物館資料の収集・整理・保管と利用に関する研究－博物館資料の利活用の理論化－

代表者 八尋 克郎、研究期間：2001～2004年度

(2) 共同研究

琵琶湖博物館のテーマにしたがった研究として共同研究を以下のテーマで行った。

- ・滋賀県内の魚類分布調査および琵琶湖博物館収蔵魚類標本の充実

代表者：長田 智生、研究期間：2000～2005年度

- ・琵琶湖堆積盆地の後期鮮新世約250万年前前後の古環境変化と古植生変化

代表者：百原 新、研究期間2000～2004年度

- ・「カワウ問題」に向けての生態学的アプローチ

代表者：亀田佳代子、研究期間：2001～2004年度

- ・南湖の富栄養化過程に沈水植物が及ぼす影響の解明

代表者：松田 征也、研究期間：2004～2005年度

- ・琵琶湖水系に生息するイワナの地理的分布とその形成過程

代表者：桑原 雅之、研究期間：2002～2004年度

- ・東アジアにおける第三紀起源昆虫の分子進化学的研究

代表者：榊 永一 宏、研究期間：2002～2006年度

- ・珪藻電子図鑑の増補改良

代表者：大塚 泰介、研究期間：2003～2007年度

- ・ヘラブナの放流に伴う琵琶湖在来のフナ集団への遺伝的影響

代表者：大原 健一、研究期間：2003～2004年度

- ・水辺エコトーン創生のための在来魚復活・外来魚排除に関する研究

代表者：前畑 政善、研究期間：2003～2007年度

- ・滋賀県の蝶類分布および生態に関する研究

代表者：内田 明彦、研究期間：2003～2006年度

- ・古琵琶湖誕生期の古地理・古生物復元

代表者：高橋 啓一、研究期間：2004～2006年度

(3) 専門研究

各学芸職員が、自らの専門分野の研究を行った。専門研究は特別な経費を要求した申請専門研究と、通常の経費で研究をしたものとに区別している。

<申請専門研究>

- ・甲殻類ミジンコ亜綱およびアゴアシ亜綱の分類、個体発生、分布に関する研究

(マーク J.グライガー)

- ・東海層群下部と古琵琶湖層群の火山灰対比による広域層序の確立(里口保文)

<専門研究>

環境史研究領域

- ・鮮新-更新世の日本のシカ類の検討(高橋啓一)
- ・コイ科魚類の咽頭歯に関する研究(中島経夫)
- ・近江の歴史の固有性と普遍性に関する考古学的研究(用田政晴)
- ・琵琶湖歴史環境の世界史的評価に関する研究(牧野久実)
- ・新生代の大型植物化石の研究(山川千代美)
- ・中世における湖辺の環境復元と人間による自然環境対応の研究(橋本道範)
- ・双翅目アシナガバエ科昆虫の系統分類と生物地理(榊永一宏)

生態系研究領域

- ・水域-陸域間の相互作用における鳥類の役割に関する研究(亀田佳代子)
- ・滋賀県の農業に対する環境支払い制度について(杉谷博隆)
- ・日本産ナマズ類の繁殖生態に関する研究(前畑政善)
- ・多自然型川づくりに関する研究(武部 強)
- ・ケヤキ苗木生産に関する研究(金子修一)
- ・エリ網汚損原因糸状藻類の生理・生態について(孝橋賢一)
- ・植生と水質調節：一降雨流出時の水質変化の組成解析(草加伸吾)

- ・外来生物問題に関わる情報収集と普及啓発（中井克樹）
- ・河川改修後の貝類相復元に関する研究（松田征也）
- ・織毛虫の形態と餌捕獲効率について（楠岡 泰）
- ・琵琶湖水系におけるピワマスとアマゴの関係（桑原雅之）
- ・地域環境問題における意思決定（牧野厚史）
- ・琵琶湖南湖の沈水植物の繁殖状況（芳賀裕樹）
- ・琵琶湖及び内湖湖岸における水辺利用に関する研究（矢野晋吾）
- ・付着珪藻の群集構造に影響を及ぼす環境要因の実験的検証（大塚泰介）

博物館学研究領域

- ・博物館が提供できる「学び」のありかたについて（布谷知夫）
- ・オサムシ上科甲虫の系統分類学的研究および生態学的研究（八尋克郎）
- ・淡水魚類の音響行動について（秋山廣光）
- ・博物館事業における水理学分野の位置付けに関する研究（戸田 孝）
- ・イバラモのシュート群動態と雌雄異株性に関する研究（芦谷美奈子）
- ・生き物を出発点とした環境学習についての考察（西垣 亨）
- ・博物館と学校とのよりよい連携の在り方をさぐる（谷口雅之）
- ・博物館における民具資料の存在意義と利用価値の再発見（中藤容子）

琵琶湖博物館総合研究・共同研究審査委員会 委員

氏 名	現 職
鳥 越 皓 之	筑波大学大学院人文社会科学研究科 教授
原 田 英 司	京都大学名誉教授
藤 井 讓 治	京都大学大学院文学研究科長 教授
鷲 谷 いづみ	東京大学大学院農学生命科学研究科 教授
佐々木 亨	北海道大学大学院文学研究科 助教授
三田村 緒佐武	滋賀県立大学環境科学部 教授
篠 原 徹	国立歴史民俗博物館 教授
田 中 芳 秀	滋賀県総合教育センター 副主幹
川那部 浩 哉	滋賀県立琵琶湖博物館 館長
金 森 保 明	滋賀県立琵琶湖博物館 副館長

(4) 公表された主な研究業績

研究業績については、琵琶湖博物館研究業績に収録した。

(5) 研究助成を受けた研究

布谷知夫

- ・文部科学省科学研究費補助金（基盤C）「博物館が提供する『学び』の体系化と社会的役割の解明」

研究代表者（2004～2005年度）

中島 経夫

- ・奈良県田原本町教育委員会「奈良県田原本町唐古・鍵遺跡共同研究」共同研究者

嘉田由紀子

- ・カーネギー財団「環境政策における価値観：日米中印4カ国比較」研究代表者（2000～2005年度）
- ・地球環境研究総合推進費「景観の変化から探る世界の水辺景観の長期的トレンドに関する環境社会学的研究」研究代表者（2002～2004年度）
- ・文部科学省科学研究費補助金（基盤B）「環境保全における地域システムの役割－commons論・公共性論・生活環境主義の再検討を通して－」研究代表者（2002～2005年度）
- ・文部科学省科学研究費補助金（基盤B）「人類学的視点から見る環境保全」研究分担者（2000～2005年度）
- ・滋賀県湖西地域振興局「湖西の魅せ方フィールドワーク委託事業」研究代表者（2004～2005年度）
- ・河川環境管理財団助成事業「世界子ども水フォーラムフォローアップ事業」共同研究者（2004年度）
- ・地球環境基金助成事業「子どもと川のかかわりの再生」研究代表者（2003～2005年度）
- ・近畿地方整備局委託事業「三世代交流型河川調査」共同研究者（2003～2005年度）

牧野 久実

- ・文部科学省科学研究費補助金（基盤A）「イスラエル国ガリラヤ湖周辺の宗教文化についての総合研究」研究分担者（2001～2004年度）

大塚 泰介

- ・文部科学省科学研究費補助金（基盤B）「河床生態系における微生物ループと生食連鎖とのリンク」研究分担者（2004～2006年度）
- ・文部科学省科学研究費補助金（基盤B）「魚類の数値データを用いた同定ツール作成の研究」研究分担者（2004～2006年度）

榎 永一宏

- ・文部科学省科学研究費補助金（若手研究B）「大洋島における海洋性アシナガバエの種分化と起源」研究代表者（2002～2004年度）

矢野 晋吾

- ・文部科学省科学研究費補助金（基盤B）「commonsと公共性の環境社会学的研究」研究分担者（2003～2004年度）
- ・文部科学省科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「村落社会と『出稼ぎ』労働の社会学」研究代表者（2004年度）

牧野 厚史

- ・文部科学省科学研究費補助金（基盤B）「commonsと公共性の環境社会学的研究」研究分担者（2003～2004年度）
- ・文部科学省科学研究費補助金（萌芽研究）「commonsとしての森林に生じる鳥獣害問題についての環境社会学的研究」研究代表者（2004～2005年度）

- ・関西学院大学21世紀COEプログラム『『人類の幸福に資する社会調査』の研究』研究分担者（2003～2007年度）

亀田佳代子

- ・文部科学省科学研究費補助金（若手研究B）「カワウの物質輸送が森林昆虫相に与える影響の解明」研究代表者（2004～2005年度）
- ・文部科学省科学研究費補助金（萌芽研究）「コモンスとしての森林に生じる鳥獣害問題についての環境社会学的研究」研究分担者（2004～2005年度）
- ・河川環境管理財団助成事業「水域から陸域へのカワウの物質輸送が流域森林の昆虫相に与える影響」研究代表者（2004年度）

中井克樹

- ・2004年度WWFジャパン自然保護助成「魚のゆりかごマップ調査」研究分担者（2004年度）
- ・地球環境研究総合研推進費「侵入種生態リスク評価研究プロジェクト」参画研究（2004～2005年度）

宮本真二

- ・文部科学省科学研究費補助金（基盤C）「完新世における琵琶湖水位変動過程の復元」研究分担者（2003～2006年度）

マーク J. グライガー

- ・カールスバーグ財団（Carlsberg Foundation）（デンマーク）「Biologi og morfologi af “Y” larver: Et 100 ar gammelt mysterium」研究分担者（2003～2005年度）

前畑政善

- ・2004年度WWFジャパン自然保護助成「魚のゆりかごマップ調査」研究代表者（2004年度）

(6) 琵琶湖博物館研究発表会

○ 研究発表会

琵琶湖博物館では、博物館の研究活動を県民の方々にご理解いただくために、毎年、テーマを決めて研究発表会を開催している。2004年度研究発表会については、毎年行っている館内での発表のほか、初めて館外（湖西地域）でも実施した。これは滋賀県湖西地域振興局と共催で実施したもので、当地域で行われている「湖西・森と里と湖のミュージアム構想」を支援する意味合いがある。

1) 平成16年度研究発表会（館内）

- ・テーマ：「博物館は学びの場となりうるのか」
- ・開催日時：2004年12月18日（土）13:00～17:00
- ・会場：琵琶湖博物館ホール
- ・対象：中学生以上（事前申し込み不要）（参加者95名）
- ・参加費：無料
- ・開催趣旨：博物館を活用した学びの意味について話題になることが多くなった。しかし、その学びの内容についてはまだ曖昧さが残っている。博物館が提供できる学びとはどのようなことなの

か、博物館の資源を活用して、誰が、どのような学びを行うことができるのか、ということをつくつかの事例とともに考えてみることを目的とした。

【プログラム】

開会のあいさつ	川那部浩哉（琵琶湖博物館長）
第一セッション「博物館での学びとは」	
博物館が提供できる学びとは	布谷知夫（琵琶湖博物館）
博物館の入り口と出口	瀧端真理子（追手門学院大学）
コメント	高橋啓一（琵琶湖博物館）
第二セッション「展示室での学び」	
科学者の視点を共有する学び—ダイノソアファクトリーを事例に—	碓京子（林原自然科学博物館）
「心をひらく」から学びへ	磯野なつ子（琵琶湖博物館）
コメント	芳賀裕樹（琵琶湖博物館）
第三セッション「地域と学校」	
地域における博物館の役割	牧野厚史（琵琶湖博物館）
学校が行う地域での「博物館」づくり	西垣亨（琵琶湖博物館）
学社融合の視点にたった博物館の事業づくり	上月啓輔（人と自然の博物館）
コメント	嘉田由紀子（琵琶湖博物館・京都精華大学）
閉会のあいさつ	高橋啓一（琵琶湖博物館研究部長）

2) 研究発表会（湖西地域）

- ・テーマ：「水辺移行帯～生き物と人々の暮らし～」
- ・開催日時：2004年11月27日（土）13：00～17：00
- ・会場：新旭里山体験交流館「もりっこ」（新旭町）
- ・対象：中学生以上（定員200名；事前申し込み不要） 参加者45名
- ・参加費：無料

【プログラム】

開会あいさつ	野田藤雄（滋賀県湖西地域振興局副局長）
研究発表	
① 琵琶湖の水辺移行帯の変遷と人間活動—過去と現在をつなぐ視点—	宮本真二（琵琶湖博物館）
② 魚はなぜ水田に入ってくるのか？	前畑政善（琵琶湖博物館）
③ 水田の大型鰓脚類	マーク J. グライガー（琵琶湖博物館）
④ 水路の魚たち	中島経夫（琵琶湖博物館）
⑤ 人びとの暮らしと水	嘉田由紀子（琵琶湖博物館・京都精華大学）
閉会あいさつ	高橋啓一（琵琶湖博物館研究部長）

(7) 連続講座

本年度は博物館学研究領域学芸員が中心となり、中学生以上を対象として以下のテーマで全7回の連続講座を実施した。

- ・テーマ：「琵琶湖博物館の自己紹介―博物館の使い方・楽しみ方―」
- ・開催日時：2005年1月16日～2月27日の毎日曜日 14：00～16：00

(全7回：内容については下表参照)

- ・会場：琵琶湖博物館 セミナー室
- ・対象：中学生以上（定員60名；事前申し込み必要）参加者20名
- ・開催趣旨：本講座では、博物館における研究から情報の収集・発信、ならびに展示の作り方・楽しみ方にいたるまで、現在、博物館で行われている事業についていくつかの具体例を紹介しながら、全体としてみると博物館が何をしているのかがわかるようにした。

回	開催日	演 題	担 当 者
1	1月16日	世界に広がる研究の展開	マークJ. グライガー（琵琶湖博物館）
2	1月23日	博物館の民具を活かす ―近江はたおり探検隊の活動―	中 藤 容 子（琵琶湖博物館）
3	1月30日	博物館が映像を集める理由	秋 山 廣 光（琵琶湖博物館）
4	2月6日	役に立つ情報とは	戸 田 孝（琵琶湖博物館）
5	2月13日	「はしかけ」って楽しい！ ―体験学習の日グループの活動―	体験学習の日はしかけ
6	2月20日	学校から期待される博物館	谷 口 雅 之（琵琶湖博物館）
7	2月27日	展示の作り方・楽しみ方	布 谷 知 夫（琵琶湖博物館）

(8) 特別研究セミナー

第38回2005年1月27日(木) 13：30～16：00 琵琶湖博物館会議室

「なぜ！魚はエリに入るのか？―エリ周辺での湖水の流動環境と魚の行動について―」

講演者：山 根 猛（近畿大学農学部水産学科教授）

「エリの漁獲量変動と風（流れ）の関係についての一考察」

高 木 力（近畿大学農学部水産学科助教授）

「エリ周辺の流動環境と漁獲との関係―CFDによる流れ構造解析―」

光 永 靖（近畿大学農学部水産学科助手）

「超音波発信機によるエリ周辺での魚類の追跡―魚はいつ、どこからやってくるのか？―」

(9) 研究セミナー

毎月第3金曜日に、研究セミナーを開催した。

第1回（4月16日）

牧 野 厚 史 「環境再生における生き物の記憶」

芳賀裕樹 「魚群探知機で沈水植物をモニタリングする」

戸田 孝・西村泰彦・釈 慶樹・板倉 安正 「赤野井湾赤外線観測データの解析」

第2回（5月21日）

藤田裕子 「水田に生息する微細藻類の分布特性について」

牧野久実 「丸子船の双胴船の特徴について」

高橋啓一 「日本産マンモスゾウの生息年代－日本の動物相の形成過程を考察するために－」

第3回（6月18日）

中島経夫 「咽頭菌の研究の考古学への貢献 フナの縄文文化」

草加伸吾 「モンゴル北部（フブスグル湖集水域）における森林火災跡地の再生現況－なぜ再生が困難なのか」

前畑政善 「田んぼ研究のゆくえ」

第4回（7月16日）

八尋克郎 「滋賀県版レッドデータブック2005年改訂版－昆虫類－の編集状況」

里口保文 「三浦層群安野層の広域火山灰」

松田征也 「外国産シジミに関する研究と今後の展開」

第5回（8月20日）

大原健一 「DNA多型を用いたヨシノボリ類の遺伝学的研究」

亀田佳代子 「生態系エンジニアとしてのカワウ－カワウの繁殖による森林の物理的改変と化学的改変－」

布谷知夫 「博物館が提供できる学び」

第6回（9月17日）

宮本真二 「中世庭園成立期の景観復元」

楠岡 泰 「圃場整備が大型鯉脚類に与える影響について」

梶 永一宏 「アシナガバエ科昆虫の海外調査報告」

第7回（10月15日）

山川千代美 「古琵琶湖層群産植物化石の研究と課題」

用田政晴 「出現期前方後方墳の調査とその意義－『神郷亀塚古墳』の書評にかえて－」

中井克樹 「外来生物問題、最近の話題」

第8回（11月19日）

マーク J. グライガー 「琵琶湖と瀬田川水域産魚類に寄生する鉤頭虫類について」

嘉田由紀子 「資料提示型インタビューによる水害史調査－生活論としての水害論の構築にむけて－」

武部 強 「滋賀県下の河川の治水安全度」

第9回（12月17日）

杉谷博隆 「滋賀県における農業環境政策の試み－環境支払いを中心として－」

孝橋賢一 「漁場環境の視点からみた琵琶湖の変異現象－とくに北湖でみられるエリ網の汚損について」

橋本道範「日本中世の裁判について－鎌倉幕府裁判の研究史整理から－」

第10回（1月21日）

谷口雅之「琵琶湖博物館と学校とのよりよい連携の在り方をさぐるII」

中藤容子「地域博物館を核とした地域文化の探求・継承ネットワークの形成－琵琶湖博物館の
民具資料をめぐる実践と可能性－」

秋山廣光「博物館に於ける静止画資料の整理と利用III」

第11回（2月18日）

西垣 亨「生き物を出発点とした環境学習III－伯母川探検隊事業が地域にもたらしたもの－」

大塚泰介「干拓前の諫早干潟でみつかった珪藻数種」

第12回（3月18日）

桑原雅之・井口恵一朗・来見誠二「琵琶湖水系のイワナはどこから来たのか－琵琶湖水系に生
息するイワナの地理的分布とその形成過程－」

金子修一・杉本 茂・平田 明「低コスト育林システムの開発に関する調査」

野嶋宏二「日本列島中期更新統のコイ、フナ化石」

(10) 特別研究員の受け入れ

- ・高橋鉄美（日本学術振興会特別研究員）

2004年4月1日～2005年3月31日

テーマ：アフリカ東部の古代湖におけるカワスズメ科魚類の系統進化および尾鰭骨格を用いた琵琶
湖産魚類の比較解剖学的研究

- ・大原健一

2004年4月1日～2005年3月31日

テーマ：ヘラブナの放流に伴う琵琶湖在来のフナ集団への遺伝的影響

- ・藤田裕子

2004年4月1日～2005年3月31日

テーマ：水田に生息する微細藻類の生態学的研究

- ・野嶋宏二

2004年4月1日～2005年3月31日

テーマ：中部更新統コイ亜科の咽頭歯、鰓蓋骨化石（静岡県引佐郡谷下）と琵琶湖産コイ、ギンブ
ナ、ニゴロブナ、ゲンゴロウブナの形態比較

- ・黄 貞燕

2004年4月1日～2005年3月31日

テーマ：日本における地域に根ざした博物館の事例研究

(11) 海外交流活動

1) 研究に関する国際交流

・川那部浩哉

2004年7月18日～8月16日 フランス共和国パリ市フランス国立自然史博物館 博物館交流事業
(日仏合同企画展についての打合せ)、フィンランド共和国ラップランド地方 国際理論応用陸水学会出席

2005年1月19日～1月30日 フランス共和国パリ市フランス国立自然史博物館、フランス政府研究省 国際会議出席および博物館交流事業(日仏合同企画展についての協定書案の協議)

・中島経夫

2004年11月9日～11月18日 中華人民共和国湖北省武漢市中国科学院水生生物研究所、長江流域総合研究に関する魚類標本調査

・高橋啓一

2004年10月9日～10月11日 大韓民国済州島 第四紀における人類とその他の脊椎動物足跡化石国際シンポジウム出席

2005年3月3日～3月14日 中華人民共和国山西省、河北省、山東省 総合研究に伴う古脊椎動物調査

・マーク J. グライガー

2005年2月3日～2月24日 デンマーク王国コペンハーゲン市コペンハーゲン大学生物学研究所
「y-幼生の生態学と形態学：100年来のなぞ」研究調査参加

・草加伸吾

2004年10月19日～10月25日 大韓民国木浦市 東アジア生態学会連合国際シンポジウム出席

・梶永一宏

2004年6月15日～7月16日 スペイン国カナリア諸島、イベリア半島東岸およびモロッコ王国 科学研究費に伴う海洋性アシナガバエの種分化と分散のため研究調査

2004年8月13日～8月31日 中華人民共和国北京市貴州省 共同研究に伴う東アジアにおける第三紀起源昆虫の分子進化学的研究調査

・桑原雅之

2004年12月4日～12月12日 アメリカ合衆国カリフォルニア州モンレー市 世界水族館会議出席

2) 事業に関する国際用務

・中島経夫

2005年1月19日～1月23日 フランス共和国パリ市フランス国立自然史博物館 博物館交流事業
(日仏合同企画展についての協定書案の協議)

・八尋克郎

2004年7月18日～7月25日 フランス共和国パリ市フランス国立自然史博物館 博物館交流事業
(日仏合同企画展に向けての打合せ)

2 交流・サービス活動

博物館の研究や資料収集などの成果をできるだけ多くの利用者に伝え、博物館をうまく有効に利用してもらうことで、博物館と利用者との双方向の情報交換と交流を行う場をつくりあげていくため、観察会や各種講座あるいは学校教育との連携のための教育研修の受け入れなど様々な活動を実施した。また、平成15年度からは、学芸職員が実施した地域交流事業の一覧についても紹介している。

1. 利用者主体の事業

(1) フィールドレポーター

フィールドレポーターとは県内を中心に身近な生き物や生活に関する情報を定期的に報告してもらい、得られた情報を博物館の資料として保存し、展示や交流の中でいかしていくとともに、情報のやりとりを通して博物館とレポーター同士をつなぐ制度である。この制度は1997年からはじまり、2004年度は146名の登録があった。

活動としては、博物館とフィールドレポーターが相談してテーマを設定し、年数回行うアンケート型調査と、自由な内容で身近な情報を随時報告する自由回答調査の2種類を実施している。調査の結果は「フィールドレポーター便り」にまとめられ、フィールドレポーター交流会でも発表される。調査に先駆けての勉強会や観察会を適宜実施している。

2004年度は2003年3月から実施した「我が家の年中行事」、「夏のセミ調査」、「野生生物の予知能力調査-1」、「エドヒガン調査」の調査を行った。

そのほかの活動としては、フィールドレポーターのニュースレター「フィールドレポーター掲示板」を5回発行した。5月には日本科学未来館（東京都）で開かれた、「ボランティアメッセ2004：つながりあう未来の博物館」に出展し、事例報告の発表もした。10月には今津で活動を行っている「いまづ自然観察クラブ」との交流会および観察会を行った。

フィールドレポーターの調査内容等一覧

調査内容	実施月	報告数(件)
1) 我が家の年中行事	3～6	316
2) 夏のセミ調査	6～8	199
3) 野生生物の予知能力調査 — 1	1～2	76
4) エドヒガン	3～4	調査中
5) 自由形調査(フィールドレポーター掲示板)	通年	

(2) 「はしかけ」制度の実施状況

平成12(2000)年8月から運用が開始された「はしかけ制度」は、受け身的な博物館の利用ではあきたらなくなって、博物館にかかわりを持って何らかの活動を始めたいという人たちに対し、そのきっかけの場、さらには新しい活動を発想するための環境を提供しようとするものである。また、

その活動は博物館内とその周辺にとどまらず、地域へも広がっていくことにより、琵琶湖博物館の中長期基本計画に掲げられている「地域だれでも・どこでも博物館」の実現に向けて、博物館と地域あるいは地域に住む人たちとの「はしかけ」としての役割も期待されている。

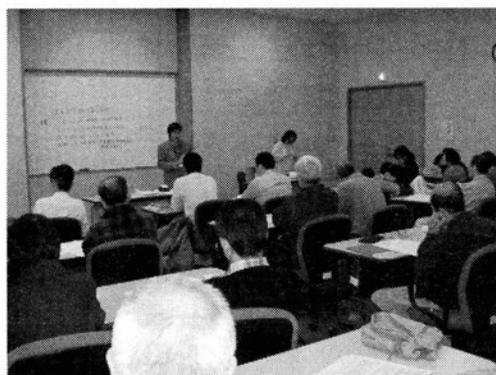
本制度は、今後、参加者側から多様な活動が提案され、博物館とともに活動を作り上げる形へと移行していくことが望まれる。また、はしかけグループや参加者が核になって、各地域に新たな活動が生まれ、すでに活動しているグループもまきこんで、博物館を基点とした活動のネットワークが県内全域に広がっていくような方向へと発展していくことが、はしかけ制度の将来的な目標であり、中長期基本計画で掲げている「地域だれでも・どこでも博物館」という構想を実現する一つの有効な手段となりうるものと考えられる。

平成16年度は、例年通り3回の「はしかけ登録講座」を実施するとともに、本年度で2回目となる「はしかけ活動発表会」を第3回登録講座同日の3月6日に当館アトリウムにて開催した。

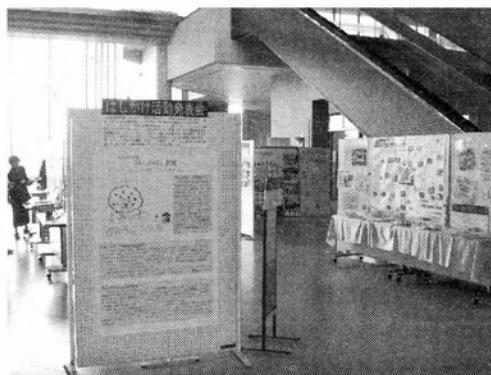
平成17年3月末現在の登録者数は294名で、11グループに分かれてそれぞれの活動を行った。

はしかけ登録講座

	開催日	参加者(名)	会場	講師
第1回	7月4日(日)	15	会議室(琵琶湖博物館)	草加・中島
第2回	11月7日(日)	49		草加
第3回	3月6日(日)	44		草加



第3回 はしかけ登録講座



第2回 はしかけ活動発表会(3月6日)

各グループの活動

○うおの会(会長:武田繁、担当:中島経夫、会員数 107名)

〔設立の趣旨〕 魚採りが好きな人が集って、魚採りを通じて、さまざまな人と交流したり、身近な環境を見つめなおすことを目的にしている。2000年より、活動を開始し、身近な環境に生息している魚たちの姿を21世紀初頭の記録として保存することを目指している。

〔活動の概要〕 発足当初から滋賀県内の魚類分布調査を実施してきた。この調査は、2002年の秋に終わり、その成果を琵琶湖博物館研究調査報告第23号「みんなで楽しんだうおの会—身近な環境の魚たち」にまとめた。その後、「うおの会」は調査をする会から調査を指導する会に変わり、

琵琶湖流域を対象に、各NPO、団体、機関、学校、企業や個人をつなぐ「琵琶湖お魚ネットワーク」の指導員として流域各地にでかけている。また、会員のスキルアップのための定例調査を月1回開催している。投網の打ち方、タモ網の使い方、魚の同定など調査をしながら勉強できる。魚つかみの好きな方なら、初心者から専門家まで誰でも参加できる楽しい集まりである。

「うおの会」の主な活動

活動月日	内 容
4月3日	水生生物観察会への協力
4月20日	News letter No.22の発行
4月25日	第23回定例調査
4月30日	News letter No.23の発行
5月15日	生き物文化誌学会でのポスター発表、公開シンポジウムへの参加
5月23日	第24回定例調査（和辻川見学会）、大楠中学校総合学習指導協力の打ち合わせ
5月28日	横須賀市立大楠中学校総合学習指導への協力
5月30日	琵琶湖を戻す会主催・第3回「琵琶湖外来魚駆除の日」への協力
6月9、18、19、24、29、30日	環境データ測定
6月27日	うおの会運営会議、白鳥川・八幡掘の見学会
6月28日	調査マニュアルの検討
6月29日	News letter No.24の発行
7月1、2、4-12、15、21、22、23、26、28-30日	環境データ測定
7月24日	地理情報システム学会での発表 ワークショップ「市民の為の環境GIS」、里山体験教室で魚つかみの指導
8月1、2、7、10-14、16、19日	環境データ測定
8月1日	知内川投網講習会と臨時総会
8月7日	生き物観察会への指導
8月21日	草津市立志津小学校伯母Q五郎の伯母川魚つかみの応援
8月22日	親子雑魚釣り大会・雑魚捕り体験教室
9月19日	うおの会運営会議
9月19日	第25回定例調査
9月25、26日	第13回全国ボランティアフェスティバルびわこへの参加
9月25日	「伯母川で魚とり」への魚調査の指導
10月5日	News letter no.25の発行
10月16日	「伯母川で魚とり」への魚調査の指導
10月24日	第26回定例調査
10月28日	「伯母川生き物調査」への魚調査の指導
10月30日	うおの会運営会議「お魚ネットワークについて」
11月21日	第27回定例調査、藤本勝行さんを囲む会
11月24日	法竜川調査の結果についての会議
12月4日	法竜川調査の結果についての会議、補足調査

12月6、9、16、24日	法竜川調査の結果についての会議および補足調査
12月19日	法竜川調査データについての会議およびGIS講座
1月9日	琵琶湖お魚ネットワーク交流会に向けての打合せ会議、法竜川補足調査と越冬地散策
1月13日	法竜川調査データについての会議、琵琶湖お魚ネットワークの交流会打合わせ
1月22日	ブリヂストン彦根工場付近にて自然観察会の指導
1月30日	第4回琵琶湖外来魚シンポジウム「完全駆除へのシナリオ」への協賛
2月2日	ブリヂストン彦根工場付近の水路で魚の採集の指導
2月4日	ブリヂストン彦根工場の水族展示での協力
2月12日	第5回総会と琵琶湖お魚ネットワークの交流会の打合せ
2月17日	お魚ネットワーク交流会に向けてのパネル作成
2月24日	法竜川補足調査とお魚ネットワーク交流会に向けての準備
2月26日	お魚ネットワーク交流会に向けての準備
2月27日	琵琶湖お魚ネットワーク交流会
3月6日	琵琶湖博物館「はしかけ活動発表会」参加

○咽頭歯倶楽部（会長：村上靖昭、担当：中島経夫、 会員数 8名）

〔設立の趣旨〕 うおの会のサブグループとして2003年1月末に発足した。その趣旨はコイ科魚類の咽頭歯に興味を持つ人が集い、互いに研鑽しながら魚やコイ科魚類に関する知識を深めることにある。

〔活動の概要〕 コイ科魚類の咽頭歯を見分ける能力を磨き、遺跡からの遺体や地層からの化石咽頭歯を同定する。そのことによって、コイ科魚類の進化の道筋や人の営みを探る。咽頭歯標本の製作、遺跡からの咽頭歯遺体の検出、化石の調査などを行っている。

「咽頭歯倶楽部」の主な活動

活動月日	内 容	場 所	参加者
4月8日	ゼニタナゴ咽頭歯のクリーニング作業	動物標本製作室 (琵琶湖博物館)	村上靖昭
4月15日	タカハヤ咽頭歯のクリーニング作業		
4月22日	カワバタモロコ咽頭歯のクリーニング作業		
5月6日	カワバタモロコ咽頭歯のクリーニング作業		
5月13日	タカハヤ咽頭歯のクリーニング作業		
5月20日	イチモンジタナゴ咽頭歯のクリーニング作業		
5月27日	ホンモロコ咽頭歯のクリーニング作業と大楠中学校の準備		
6月10日	ホンモロコ咽頭歯のクリーニング作業		
6月17日	アブラボテ咽頭歯のクリーニング作業		
6月24日	モツゴ咽頭歯のクリーニング作業		
9月16日	カワムツ咽頭歯のクリーニング作業		
9月26日	第13回全国ボランティアフェスティバルびわこへの参加：咽頭歯倶楽部の作業実演		

10月7日	ツチフキ咽頭歯のクリーニング作業	動物標本製作室 (琵琶湖博物館)	村上靖昭
10月14日	デメモロコ咽頭歯のクリーニング作業		
11月4日	デメモロコ咽頭歯のクリーニング作業		
11月18日	デメモロコ咽頭歯のクリーニング作業		
11月25日	スゴモロコ咽頭歯のクリーニング作業		

○湖(こ)をつなぐ会 (会長：中山法子、担当：嘉田由紀子、 会員数 27名)

〔設立の趣旨〕 2003年11月に県内在住の子ども達で組織する「琵琶湖の未来たち合唱団」とその保護者らによって活動を開始した。加藤登紀子さん作詞作曲の「生きている琵琶湖」を滋賀県内外に広める活動を行うとともに、子ども達が簡単に口ずさむことができ、琵琶湖の未来のことを考えるきっかけとなるような「うた」を作ることを考えている。「うた」を通じて、琵琶湖の文化的、社会的価値を再発見することが、「湖をつなぐ会」の目的である。

〔活動の概要〕 2004年度は琵琶湖博物館体験学習の日の参加者に「生きている琵琶湖」を聞いてもらい、「うた」を通じて琵琶湖を考えるきっかけをつくる試みをした。また、新しい試みとして水と文化研究会が主催した「菜の花と里山の水辺トーク&コンサート(新旭町)」や四国の吉野川、京都、琵琶湖で活動している子ども達が歌う「水」にまつわる歌をCDにまとめる活動に参加した。

「湖をつなぐ会」の主な活動

活動月日	内 容	場 所
4月18日	菜の花と里山の水辺トーク&コンサート	新旭町
11月7日	水と文化研究会の「水の歌」のCD作成に協力	大阪市
1月8、22日	琵琶湖博物館体験学習の日に参加	琵琶湖博物館
2月26日	草津市パワフル交流市民21参加	草津市
3月6日	琵琶湖博物館はしかけ活動発表会	琵琶湖博物館

○里山の会 (会長：吉井隆、担当：金子修一、 会員数 21名)

〔設立の趣旨〕 当館の交流事業「里山体験教室」の卒業生により、2001年から活動を行っている。活動フィールドである琵琶湖近郊(滋賀県日野町上駒月)の里山で、春の植物観察、山菜とり、夏の昆虫観察、秋のキノコ観察、そして冬の里山の暮らしなど、四季の変化を楽しみながら、琵琶湖博物館「里山体験教室」の事前準備、および教室当日の解説等を行う。

〔活動の概要〕 例年の活動である里山体験教室のサポート(4回/年)だけでなく、独自の活動として、「おうみ市民活動屋台村」(守山市)および「パワフル交流市民21」(草津市)へ参加した。特にはしかけ活動発表会(2005年3月6日)では、湖をつなぐ会と初競演し、来館者から大好評であった。

「里山の会」の主な活動

活動月日	内 容	場 所	参加者
4月17日	「里山体験教室Ⅰ」下見	日野町下駒月	会長他5名
4月25日	「里山体験教室Ⅰ里山の山菜」実施補助	日野町下駒月	会長他5名
7月17日	「里山体験教室Ⅱ」下見	日野町下駒月	会長他
7月24日	「里山体験教室Ⅱ里山の虫たち」実施補助	日野町下駒月	会長他4名
8月22日	ソバ植栽	日野町下駒月	会長他
9月26日	ボランティアフェスティバル参加	琵琶湖博物館	パネル展示
10月16日	「里山体験教室Ⅲ」下見	日野町下駒月	数名
10月23日	「里山体験教室Ⅲ 里山のキノコ」実施補助	日野町下駒月	4名
11月23日	「おうみ市民活動屋台村」出品準備	甲西町	会長他
11月27日	「おうみ市民活動屋台村」参加	守山市	会長他
12月2日	「里山体験教室Ⅳ」下見	日野町下駒月	数名
12月4日	「里山体験教室Ⅳ 里山の冬支度」	日野町下駒月	会長他5名
12月4日	今年度反省会および打ち上げ会	琵琶湖博物館	会長他
2月2日	総 会	琵琶湖博物館	会長他5名
2月26日	第5回パワフル交流市民21参加	草津市	パネル展示
2月26日	はしかけ発表会打ち合わせ（龍谷大学）	大津市	会長他
3月6日	琵琶湖博物館「はしかけ活動発表会」参加	琵琶湖博物館	会長他

○植物観察の会（担当：布谷知夫、 会員は特定せず）

〔設立の趣旨〕 植物観察研修会を通じて、はしかけさんの中に植物が好きな人を増やし、将来は独自に活動できる植物の愛好会ができることを目指す。いろいろな活動をしようとする時にすべての基礎になるのが植物の情報である。本会は、「はしかけ」の横断的な植物研修会として発足した。年4回の県内各地での観察会を行ない、はしかけの登録者ならだれでも参加することができる。

〔活動の概要〕 本グループは、特定のグループとしてではなく、「はしかけ」さんに対する研修会として発足し、現在も名簿は作らず、はしかけニュースで行事のお知らせを行って、はしかけさんであれば誰でも自由に参加いただいている。

平成16年度は、例年通りに四季にあわせた年4回の観察会を行った。特に、平成16年度は植物をテーマとした企画展示会を行ったために、種子や果実などの採集をお願いし、協力を得た。また、企画展示室のワークショップコーナーで活動していただくことを呼びかけ、土・日曜日などに来館者に対して植物の面白さをアピールしていただいた。

「植物観察の会」の主な活動

活動月日	内 容	場 所	参加者
5月2日	春の棚田の観察会	伊吹町小泉	11
8月8日	夏のスキー場の植物観察会	箱館山付近（今津町）	6
10月17日	秋の棚田の植物	伊吹町小泉	9
1月16日	冬の里山の観察会	安土町	5

○ 体験学習の日（担当：西垣亨・青木伸子・谷口雅之、 会員数 23名）

〔設立の趣旨〕 「体験学習の日」の事業を博物館職員と共に運営し、同事業が目指す「フィールドへの誘い」「展示室のより深い理解」を来館者に届ける。2005年度から名称を「びわたん」に改名する予定である。

〔活動の概要〕 「体験学習の日」事業は、毎月第2、4土曜日の午後行われている。この事業は、来館者に、滋賀県の人々の暮らしや身のまわりの自然に対する興味関心を深めてもらうことをねらいに行っている。本グループのメンバーは、本事業のプログラム開発や、参加者との交流など、積極的にかかわっている。また、それぞれの興味関心に応じて、地域の公民館や学校、博物館に出かけて体験学習や教員研修を行ったり、スキルアップのための自己研修も行っている。

「体験学習の日」の主な活動

活動月日	内 容	場 所
4月10日	丸子船のペーパークラフトをつくろう	琵琶湖博物館
4月24日	機織り体験をしよう	
5月8日	琵琶湖のプランクトンを観察しよう	
5月22日	琵琶湖のプランクトンを観察しよう	
6月12日	レインスティックをつくろう	
6月26日	レインスティックをつくろう	
9月11日	紙すきをしよう	
9月25日	紙すきをしよう	
10月9日	草木染をしよう	
10月23日	草木染をしよう	
11月13日	木の実で遊ぼう	
11月27日	木の実で遊ぼう	
12月11日	餅つきをしよう	
1月8日	博物館でスゴロクを楽しもう	
1月22日	博物館でスゴロクを楽しもう	
2月12日	縄文コースターをつくろう	
2月26日	縄文コースターをつくろう	
3月6日	琵琶湖博物館「はしかけ活動発表会」参加	
3月12日	化石のレプリカをつくろう	
3月26日	化石のレプリカをつくろう	

○たんさいぼうの会（会長：有田重彦、担当：大塚泰介、 会員数 10名）

〔設立の趣旨〕 珪藻類を中心に、微小生物のハイ・アマチュア研究者の育成を目指す。

〔活動の概要〕 2002年5月に「珪藻の会」として出発し、対象範囲の拡大をねらって「たんさいぼう(単細胞)の会」と改名した。発足以来、珪藻など微小生物の調査・観察・研究を行っている。現在のところ、付着珪藻の採集、観察、および各自が決めたテーマでの研究（自分のテーマが未設定の人はその補助）を行っている。活動によって得られた標本および成果物は、琵琶湖博物館

に提供されることになっている。また、総会を年に3回程度行い、活動方針の決定、各自の活動報告を行うとともに、会員の親睦を深めている。

2004年の4月と5月には「たんさいぼうの小さな旅」と題して、比良山系の小女郎ヶ池および八雲が原湿原でそれぞれ珪藻の採集調査を行った。また2004年12月には、会として初の学術論文「有田重彦・大塚泰介（2004）円弧構成モデルによる *Navicula* 殻外形の記述. *Diatom*, 20:191-198」を発表した。この論文で提唱した「円弧構成モデル」は、珪藻の外形を定量的に表現するための有効な手段として、内外の一部の研究者に注目されている。さらに、2004年12月から2005年4月まで行われたギャラリー展示「ミクロの世界を探検しようープランクトンの不思議ー」に、活動成果を紹介するポスター3枚を出品した。

「たんさいぼうの会」の主な活動

活動月日	内 容	場 所	参加者
4月17日	たんさいぼうの会第7回総会	琵琶湖博物館	担当：田邊純子 参加者8名
4月25日	たんさいぼうの小さな旅Ⅱ 小女郎ヶ池（珪藻の採集調査）	比良山系（小女郎ヶ池）	担当：大塚泰介 参加者6名
5月8日	たんさいぼうの小さな旅Ⅲ 八雲が原湿原（珪藻の採集調査）	比良山系（八雲が原）	担当：大塚泰介 参加者4名
5月15、16日	日本珪藻学会第25回大会で「 <i>Navicula</i> の殻外形は全て円弧で構成される」をポスター発表	産業総合研究所	発表者：有田重彦・大塚泰介
10月2日	たんさいぼうの会第8回総会	琵琶湖博物館	担当：大塚泰介 参加者7名
	論文「円弧構成モデルによる <i>Navicula</i> 殻外形の記述. <i>Diatom</i> , 20: 191-198」を発表		著者：有田重彦・大塚泰介
12月23日ー 4月10日	ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しようープランクトンの不思議ー」にて活動成果を発表	琵琶湖博物館	
1月15日	たんさいぼうの会第9回総会	琵琶湖博物館	担当：有田重彦 参加者7名
3月6日	琵琶湖博物館「はしかけ活動発表会」参加	琵琶湖博物館	

○田んぼの生き物調査グループ（担当：楠岡泰、マーク J. グライガー、 会員数 18名）

〔設立の趣旨〕 滋賀県に住む人にとって最も身近な水環境である水田に目を向けて、その生物の分布や生態を調査する。

〔活動の概要〕 当グループは、フィールドレポーター制度で行った田んぼの生き物調査に興味を持った有志で結成された。水田に生息する生物、特に大型鰓脚類（カブトエビやホウネンエビ、カイエビなど）の分布および生活史を明らかにすることが現在の研究テーマである。このため大型鰓脚類の出現状況を県内各地の水田で調べ、分布マップを作成するとともに、分布の違いを生み出す要因を明らかにするため水温や水質などのデータとの比較を行っている。

はしかけそれぞれが自分のペースで自宅近くの定点観察および広域分布調査を行う。また、場所を決めて、合同で調査も行う。2004年度の合同調査は、アジアカブトエビの分布に着目して、

京都市東部で行った。

「田んぼの生き物調査グループ」の主な活動

活動月日	内 容	場 所	備 考
4月10日	田んぼの生き物調査研修会	琵琶湖博物館	
6月5日	田んぼの生き物合同調査	京都市	
7月24日	田んぼの生き物同定会	琵琶湖博物館	
2月12日	総会および田んぼの生き物調査まとめ会	琵琶湖博物館	
3月6日	琵琶湖博物館「はしかけ活動発表会」参加	琵琶湖博物館	
通 年	田んぼの生き物調査	滋賀県周辺	それぞれが随時調査

○近江はたおり探検隊（隊長・担当：中藤容子、織姫の会主宰：立石文代、機織り用具製作隊長：
佐藤義信、記録・ホームページ担当：辻川智代、 会員数 15名）

〔設立の趣旨〕 地域に残された人とモノから近江のはたおり文化を探究し、現在失われてしまった近江の良さを再発見し、地域の人々とともにその良さを伝えていくことを目標に活動する。本グループは2004年7月に従来あった「中世のおんなたち」を再結成して設立されたものである。

〔活動の概要〕 博物館に収蔵される機織り用具の調査を通じ、伝統的な地域に残る機織りを再現することを目標とし、織姫の会、研究会、はたおり探検などの活動を行っている。さまざまな博物館や専門家、地域のお年寄り、機織りに興味のある若者子どもたちとの交流の中で、機織り用具の製作、近江上布の復元、綿・苧麻からの布・布づくり、藍からの藍染めなど活動の幅が広がりつつある。平成16年度の主な活動内容は以下のとおりである。

「近江はたおり探検隊」の主な活動

活動月日	タイトル	行事名	主催者名	場 所
4月24日	機織り体験をしよう	体験学習の日	琵琶湖博物館	琵琶湖博物館
4月28日～ 6月9日（12回）		地機織り体験講座	琵琶湖博物館	琵琶湖博物館
5月17日～2005年 2月12日（28回）		地機探検隊・見学会	琵琶湖博物館	県内外資料館、織物産地など
7月28日～2005年 3月10日（20回）		織姫の会	琵琶湖博物館	琵琶湖博物館など
7月21日～2005年 3月17日（9回）		近江はたおり研究会（第1回～第9回）	琵琶湖博物館	琵琶湖博物館、高島地域地場産業センター、守山市立中洲公民館など
9月25、26日	分科会「琵琶湖博物館のはしかけを体験しよう!!」	第13回全国ボランティアフェスティバルびわこ	第13回全国ボランティアフェスティバルびわこ実行委員会など	琵琶湖博物館

10月9、23日	草木染めをしよう	体験学習の日	琵琶湖博物館	琵琶湖博物館
10月19日	草木ぞめをしよう		若鮎保育園 (守山市)	若鮎保育園 (守山市)
12月11日	綿からの糸紡ぎ		金田公民館 (近江八幡市)	金田公民館 (近江八幡市)
2月6、19、24日	綿からの糸紡ぎ	綿からの糸紡ぎ フェア	中洲公民館 (守山市)	中洲公民館 (守山市)
2月26日	綿からの糸紡ぎ	草津市市民活動交流会「第5回パワフル交流市民21」	第5回パワフル交流市民21実行委員会	市立まちづくりセンター (草津市)
3月6日	近江はたおり探検隊の活動紹介	琵琶湖博物館「はしかけ活動発表会」参加	琵琶湖博物館	琵琶湖博物館

○ほねほねくらぶ(担当:高橋啓一、 会員数 11名)

〔設立の趣旨〕 現世あるいは化石の骨に関係した活動を通じて、琵琶湖博物館の研究や交流活動を行い、その楽しさを広く博物館外の人々に伝えることを目的としている。

〔活動の概要〕 「ほねほねくらぶ」は、7番目のはしかけとして2002年7月に発足。現生動物の骨格標本の製作や、骨の化石のクリーニングなどを行っている。これまで、ネコ、モルモット、タヌキ、ニワトリ、ウサギ、シカ、クマ、クジラ、ハクビシン、アザラシなどなどいろいろな動物を扱ってきた。現在は骨格標本づくりが主な活動である。今年度は、担当者と会員個々の事情で活動が途切れてしまい、後半は休止状態が続いた。

「ほねほねくらぶ」の主な活動

活動月日	内 容	場 所
4月18日	現生骨格標本の組み立て	琵琶湖博物館
5月16日	現生骨格標本の組み立て	琵琶湖博物館
6月19日	現生骨格標本の組み立て	琵琶湖博物館
7月18日	現生骨格標本の組み立て、ムササビの解剖	琵琶湖博物館

○丸子船探検隊(担当:牧野久実、 会員数 20名)

〔設立の趣旨〕 近世から戦前まで琵琶湖輸送の主役であった丸子船を中心とした伝統的木造船について、さまざまな角度から調査研究を行い、その謎を解きほぐしていくことを目指している。

〔活動の概要〕 2002年度より準備的な活動が始められ、2003年度より正式に発足した。10分の1サイズでの木造船模型の小物再現や丸子船のペーパークラフトなどを用いた地域交流、インターネットページ公開、丸子船に関するデータベースの作成を行ったり、丸子船など木造船の構造の発達史を研究している。2004年度は、昨年度に引き続き、琵琶湖の伝統的木造船の積み荷作成を行った。

成果は全国ボランティアフェスティバル等で紹介した。また、丸子船に関する冊子作成に向けて、体験学習の日グループとともに、幾度か話し合いの機会を設けた。年度前半は月1回程度の

活動を行っていたが、後半は担当者の都合により特定の活動日を設けず会員主導の活動となった。

2. 一般利用者へのサービス事業

(1) 観察会・見学会等

平成16年度は、博物館内や県内とその周辺で行う博物館観察会15件、博物館の舞台裏紹介などの博物館を見学する見学会1件の合計16件の事業を企画し、雨天にて止むを得ず中止した行事が1件あった。当該年度は昨年につき他団体との協働・連携事業を多くすることをめざし、実際に協働できた事業は7件と昨年より4件増加した。観察会・見学会に対する参加者の評判はおおむねよかったが、応募者が定員をかなり下回った事業が4件みられた。逆に応募者が定員を上回り、応募者を全員受け入れたり、抽選等で選んだ事業が8件見られた。なお、表のなかで○印の事業（7件）は平成16年度企画展「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」関連行事である。

観察会・見学会等一覧表

事業名	開催日	定員	参加者 (名)	共催	担当
○春いっぱい朽木で見つけてふれあおう	4月29日	25	26	朽木いきものふれあいの里	草加
○春の棚田の観察会	5月2日	30	17	小泉の集落	布谷
びわ湖を船で体験	8月5日	25	26	無	芳賀
水辺の貝を調べてみよう	8月1日	30	43	無	松田・中井
ミドリセンチコガネを探しにいこう	8月7日	30	21	無	八尋・榎永
○夏のスキー場の植物観察会	8月8日	30	24	無	布谷
化石観察会	10月3日	30	雨中止		山川・高橋
○秋の棚田の観察会	10月17日	30	10	小泉の集落	布谷
ビワマス採卵現場を見学してみませんか	11月7日	30	32	百瀬漁協、南郷水産センター	桑原・孝橋
○琵琶湖のヨシを観察してみよう	11月3日	30	12	ヨシ博物館	牧野(厚)・布谷
○秋の里山探検	11月13日	30	37	カワセミ自然の会	楠岡・布谷
下物の水鳥を観察してみようー野外観察と水鳥のお話ー	12月19日	30	52	日本野鳥の会滋賀ブロック	亀田
真冬の昆虫採集	12月5日	30	24	無	八尋・榎永
○冬の里山の観察会	1月16日	30	7	無	布谷
水族展示の舞台裏	3月6日	40	66	無	孝橋ほか
川虫探検	3月27日	30	51	無	榎永



ビワマスの産卵現場を見学してみませんか



水辺の貝を調べてみよう

(2) 博物館講座

当館が開催する講座は、当該年度に企画展示に関連した講座（企画展講座）、研究部が主体となって実施する連続講座、学芸員が専門テーマについて解説する講座、教員や地域のリーダーを対象とした講座の4つに分けられる。平成16年度の実績を以下に示した（連続講座については「1 研究・調査活動」を参照）。

1) 企画展示に関連した講座

平成16年度企画展示（第12回）「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」の主たるイベントの一つとして、中学生以上を対象として本企画展担当者が主体となって以下の2つの連続講座を開催した。特に下記の(1)の講座は当館がはじめて外部（草津市まちづくりセンター）に出ておこなった講座である。

① 植物の不思議・なんでやろう（全5回）

回	タイトル	開催日	定員	参加者(名)	場所	担当
1	花と実、そしてタネ	7月20日(火)	30	のべ30	草津市まちづくりセンター	布谷
2	太陽の光を受けて、のびる	7月27日(火)				
3	タネをつくるための昆虫と花の関係	8月3日(火)				
4	タネを広く分布するために	8月10日(火)				
5	企画展示からこぼれた話	8月24日(火)				

② のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき

回	タイトル	開催日	定員	参加者(名)	場所	担当
1	太陽の光を受けて、のびる	8月14日(土)	30	のべ29	琵琶湖博物館	布谷
2	タネをつくるための昆虫と花の関係	8月21日(土)				
3	タネを広く分布するために	8月28日(土)				

2) 専門分野の講座

平成16年度は、以下に示した8件の事業を企画したが、うち1件は応募者がなく中止となった。下表に、講座関係の総括表を示し、個々の講座の内容をその後に記しておく。

事業名	開催日	定員	参加者(名)	共催	担当
糸を紡いで布を織る体験講座	随時(4月23日～6月10日)	10	のべ98	はしかけ(中世の女たち)	中藤
入門講座「丸子船の不思議な世界(1日2回)」	5月15日	30	30	はしかけ	牧野(久)・(桑木)
アジア考古学研究機構・連続講座「アジア基層文化の探求」	6月5、19日、7月3、17日	30	のべ59	アジア考古学研究機構	用田
夏休み自由研究講座	7月25日	90	90	無	杉江・前畑
回転実験室で水槽実験を!	8月3日	15	11	無	戸田
生き物飼いか方講座(全2回)	8月3、5日	20	32	無	西垣・谷口
水生生物の撮影の実際(全2回)	9月11、18日	20	中止	無	秋山
淡水魚類学専門講座(全5回)	1月15、29日、2月12、26日、3月12日	20	のべ210	無	前畑・中島

※ () 内は外部講師

○糸を紡いで布を織る体験講座

復元製作した地機に糸をかけて実際に布を織る体験をする講座をギャラリー展示(「糸を紡いで布を織る一民具の復元・再現・体験」:2004年4月23日-6月10日)会期中、展示室内で週2回、合計12回開催した。この受講生にはしかけ「中世のおんなたち」を加え、ギャラリー展終了後「近江はたおり探検隊」を結成することとなった。

○入門講座「丸子船の不思議な世界」

当館はしかけグループ「丸子船探検隊」担当の牧野(久)と同じく探検隊メンバーで以前造船業界の第一線で活躍されていた桑木さんに博物館に来ていただいて連続講座を行なった。本講座では、丸子船の形態や構造の特徴(牧野)、造船史の概観および現代において丸子船を利用する可能性(桑木)について、それぞれが1時間ずつ連続して講演を行なった。およそ30名が参加し、活発な質疑応答が交わされた。

○アジア考古学研究機構・連続講座「アジア基層文化の探求」

アジアの視点から日本列島と琵琶湖を評価するために、これまでアジア考古学研究機構(AARI)が行ってきた調査研究の成果を4回にわたって連続講座として公表した。

回	開催日	内容	担当
1	6月5日(土)	アジアから日本列島の基層文化を探る —食と精神、そして第三の縄文文化論—	(植田文雄)

2	6月19日(土)	東アジアにおける都城－都城・山城・稜堡－	(中井 均)
3	7月3日(土)	アジア文化遺産の諸相	(山本一博)
4	7月17日(土)	アジアにおける考古学事情と湖沼文化	用田政晴

※ () 内は外部講師

○回転実験室で水槽実験を！

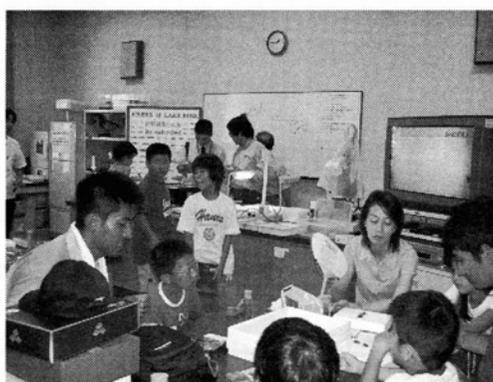
C展示室の回転実験室で、準備に時間を要するため日常の展示室運営では実施できない、水槽を使った実験を行った。具体的には、水槽中央の排水口にできる渦が必ず実験室の回転の向きになることを確かめる実験と、水槽に牛乳などを垂らすとカーテン状になる実験（テラー柱の実験）を行った。

3) 夏休み自由研究講座

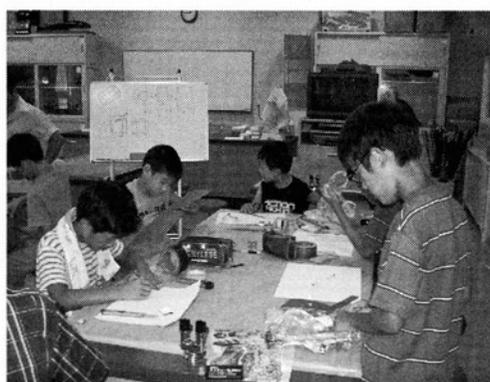
子どもたちを対象に、夏休みに入って間もない7月下旬に研究の方法について指導する「夏休み自由研究講座」を開催した。本年度は3回目である。昨年まで実施していた「夏休み相談室」については、本年度は開催しなかった。

開催日	コース名	応募者(名)	参加者(名)	会場	担当
7月25日(日) 10:00～15:00	昆虫	24	22	実習室Ⅰ	八尋、榊永、(山口)、 (武田)、(南)
	植物	20	19	生活実験工房	布谷
	地学・化石	47	49	実習室Ⅱ	高橋、里口、 (磯部)、(長澤)

※ () 内は外部講師



昆虫コース



植物コース

4) 教員や地域のリーダーを対象とした講座

○夏休み生き物飼い方講座

昨年に続いて本年度も幼稚園、保育園、小学校の教員を主な対象に、魚、ザリガニ、カエルなどについて、それぞれの生き物の特徴や飼い方、増やし方について、実物と資料を提示しながら学芸員が解説した。

開催日	内 容	場 所	参加者(名)	担 当
8月3日(火)	1) 魚の飼い方 2) ザリガニの飼い方 3) カエルの飼い方	実習室	のべ32	秋山 前畑 松田
8月5日(木)	1) カブトムシの飼い方 2) カメの飼い方 3) 水生昆虫の飼い方	実習室		八尋 桑原 榊永



ザリガニの飼い方

○淡水魚類学専門講座（全5回）

本講座では淡水魚のことを専門的に学びたいという方々（先生や地域のリーダー）、ならびに当館はしかけグループのひとつである「うおの会」会員を対象として20名募集したが、定員を大幅に上回る応募者（57名）があったが全員受け入れた。

回	開催日	内 容	担 当
1	1月15日(土)	脊椎動物学概論-魚とは何か-	前畑
2	1月29日(土)	生物多様性と希少種・外来種	中井
3	2月12日(土)	河川・ダム・ため池の環境特性と魚類	前畑
4	2月26日(土)	コイ科魚類の咽頭歯について	中島
5	3月12日(土)	咽頭歯から何がわかるか	中島

(3) 体験教室

本年度も例年どおり以下の2つの体験教室を開催した。

○田んぼ体験教室

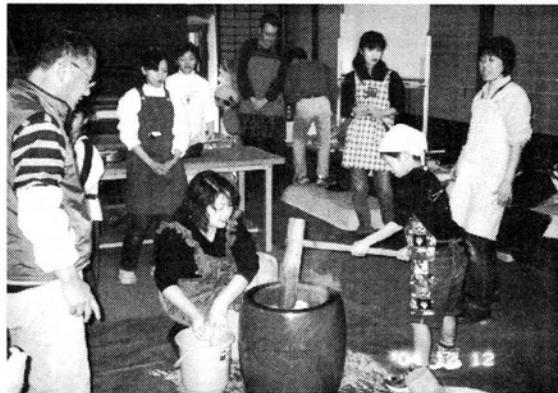
博物館の生活実験工房および隣接する水田を利用した、1年間（全10回）の田んぼ体験教室を開催した。農作業の体験ばかりでなく、周辺の自然観察、田んぼの多面的な機能、そして冬には農家の仕事や生活も体験できるようプログラムを組んだ。

田んぼ体験教室の開催日と内容（登録者27名：9家族）

回	開催日	内容	担当
1	5月9日(日)	全体説明と田植え	杉谷・北川
2	6月6日(日)	水田の生き物	杉谷・北川・布谷・楠岡
3	7月18日(日)	虫の話	杉谷・北川・榊永
4	8月15日(日)	かかし作り	杉谷・北川・亀田
5	9月26日(日)	稲刈り	杉谷・北川
6	10月17日(日)	脱こく	杉谷・北川
7	11月14日(日)	縄緬い	杉谷・北川
8	12月12日(日)	もちつき	杉谷・北川
9	1月16日(日)	わら細工	杉谷・北川・杉江
10	2月13日(日)	まとめ	杉谷・北川・杉江



かかし作り



もちつき

○里山体験教室

里山の重要性を見直すため、里山の手入れや暮らしを実際の活動を通じて体験する里山体験教室を下記により開催した。四季を通じて同じ里山で、計4回の手入れ作業とともに、山菜の試食会や昆虫、キノコの観察など五感を十分に使った体験活動を行った。なお、開催地は日野町大字上駒月の里山で、開催に際しては「里山の会」（はしかけ）と協力して実施した。

里山体験教室の開催日と内容（登録者31名）

回	開催日	内容	担当
1	4月25日(日)	春編 里山の山菜	楠岡
2	7月24日(土)	夏編 里山の虫たち	八尋、榊永、(山口)、前畑
3	10月23日(土)	秋編 里山のキノコ	楠岡
4	12月4日(土)	冬編 里山の冬じたく	楠岡

※（ ）内は外部講師



クワガタムシ、カブトムシ等を探す（7月24日）



ヒラタケの植菌（10月23日）

(4) 質問コーナー・フロアトーク

当館では、開館当初から“学芸員の顔が見える博物館”づくりをめざしている。その一環として情報利用室の一角に「質問コーナー」を設置している。開館日には、学芸職員が日替わりでここに常駐し、一般の方々からの質問に回答している。回答可能な質問には担当学芸職員がその場で答え、専門的な内容を含む質問については、それぞれの専門学芸員が回答することになっている。また、館長および副館長も、学芸職員にまじって月一回程度、質問コーナーを担当している。受け付けた質問の内訳は下表の通りである。

当コーナーでは、図書室入り口の壁に、質問コーナー担当学芸職員の予定を掲示している。来館者に担当学芸員の専門分野と氏名を示すことにより、できるかぎり専門分野の担当者がある日に質問に来てもらえるよう配慮したものである。この担当学芸職員の予定表は、ホームページにも掲載しており、インターネットで閲覧できるようになっている。

なお、その日の質問コーナー担当者は展示室で自分の専門分野などに関する「フロアトーク」を実施している。

質問コーナーにおける質問内容

質問総数	818 (件)		
質問内容	一般的な質問(総合案内で回答できるようなもの)	73	
	専門的な質問	745	
対応	その日の担当学芸職員が対応	646	
	専門の学芸職員（または外部）が対応	172	
質問の分野別内訳			
生物	動物	魚類	230
		プランクトン	18
		その他の水生動物	90
		その他の動物	89
	植物	陸上植物	30
		水生植物	22
地学	87		

図書	27
物理	1
琵琶湖	48
歴史民俗	54
環境	44
博物館	19
その他	59

3. 学校連携事業および体験学習

(1) 教職員等研修

平成16年度に行われた教職員等研修は、合計17件（参加者：318名）であった。研修では、博物館の基本理念や展示概要のほか、総合的な学習などにおける学校の博物館活用法についての解説を行った。また、実習室等で展示に関わる実習をしたり、学芸員から各分野の専門的な話を聞いたりした。

月 日	教 職 員 研 修	人 数 (名)
5月11日	エコ草津事前教員研修会	15
7月23日	神戸市立中学校教育研究会理科部会研修会	30
7月26日	滋賀のプランクトン研修会	20
7月26日	自然調査ゼミナール事前研修会	16
7月29日	平野小学校教員研修会	8
8月3日	生き物飼い方講座<琵琶湖博物館主催>	10
8月4日	自然調査ゼミナール（4日、5日）	24
8月5日	生き物飼い方講座<琵琶湖博物館主催>	16
8月5日	草津市新任教員研修会	13
8月17日	大阪府私立中学校高等学校理科教育研究会	20
8月19日	環境科学講座	20
8月25日	大阪教員研修会	52
8月26日	近畿小学校理科教育協議会理事会	13
8月27日	栗東市小学校生活部会研修会	9
8月27日	門真市教育研究会理科部会研修会	12
10月13日	近畿教育研究所連盟総会	30
2月17日	県高校理科教育研究会生物部会	10
	合 計 17件	318

(2) 視察対応

平成16年度に受け入れた、教育普及活動に関する視察は、合計9件32名であった。

月 日	視 察	人数 (名)
6月16日	サイエンスワールド岐阜	1
9月10日	栃木県議会文教委員会	19
12月8日	ひめゆり平和祈念資料館	4
12月21日	石川県ふれあい昆虫館	1
1月19日	鹿児島県立博物館	2
1月26日	なかがわ水遊園 (栃木県)	2
3月1日	熊本市動植物園	1
3月17日	佐賀市環境下水道部環境課	1
3月18日	北海道開拓記念館	1
	合 計 9件	32

(3) 学校団体向け体験学習

博物館と学校とが連携しながら活動を進めていくことができるよう、学校のカリキュラムに沿った社会見学への対応のほか、各種体験学習、エコ草津、フローティングスクール等の受け入れを行った。特に、体験学習として下記のような活動を実習室、セミナー室、生活実験工房等を利用して行った。

また、展示学習を支援する「サポートシート (19種類)」の利用を、教員研修や下見受付を通して、学校へ呼びかけた。

校 種	主 な 活 動 内 容
小 学 校	講義 (琵琶湖と環境、琵琶湖の魚、琵琶湖の生き物、博物館の展示について等)、ヨシ笛、化石のレプリカ、水質検査、プランクトン採集と観察、昔のくらし体験 (石臼、脱穀、手押しポンプ)、わら細工、魚の採集 (投網) と解剖、外来魚の調理、昆虫の観察、水生昆虫の観察、野外観察 (ヨシ群落)、野外植物観察、貝の観察、水草の観察、水鳥の観察、火山灰の観察、大地のつくり、質問対応
中 学 校	講義 (琵琶湖と環境、琵琶湖の魚、琵琶湖の生き物、博物館の展示について等)、ヨシ笛、水質検査、プランクトンの観察と採集、化石のレプリカ、魚の採集 (投網・釣り) と解剖、外来魚の調理、わら細工、野外植物観察、貝の観察、水の汚れの測定、水鳥の観察、水生昆虫の観察、草木染め、質問対応
高等学校	講義 (琵琶湖と環境、琵琶湖の魚類、丸子船の研究)、プランクトンの採集と観察、魚の採集と解剖、水質調査、珪藻化石の観察、生体観察池での陸水学基礎学習、湖岸調査 (地形、植生他) 展示利用学習、課題研究、質問対応、バックヤード見学

体験学習実施数

校 種	県 内		県 外		合 計	
	学校数	児童生徒数	学校数	児童生徒数	学校数	児童生徒数
小学校	49	4,437	18	1,523	67	5,960
中学校	20	3,027	27	2,596	47	5,623
高等学校	12	1,386	7	596	19	1,982
養聾盲学校	2	36	0	0	2	36
合 計	83	8,886	52	4,715	135	13,601

(4) 一般団体向け体験学習

子どもたちの自然や文化への興味関心を高めるとともに、地域連携のあり方を探るため、子ども会やボーイスカウトなどの一般団体に対して体験活動を行った。

実施数	内 容
団体32件 (1,285名)	講義（琵琶湖と環境、琵琶湖の生き物）、ヨシ笛、琵琶湖の魚に親しもう（外来魚調理）、プランクトンの採集と観察、魚の解剖、昔の暮らし体験、昔の生き物等



琵琶湖の魚に親しもう…魚をさばくの初めて！



昔の生き物…展示室で化石探しはじまるよ！

(5) 「体験学習の日」の活動

学校週5日制に対応する事業として、毎月第2、4の土曜日（午後1時半～3時）に当館を訪れる小・中学生を対象に、自然・環境・歴史・民俗への興味や関心を高めるため体験活動を行った。大変好評で、年間630名の参加者があった。平成17年度からは、事業名を「琵琶湖博物館わくわく探検隊」とし、受付方法も、体験の内容により、随時形式や事前申込み制を導入していく予定である。

「体験学習の日」の活動一覧表

回	月 日	テーマ	参加者(名)
1	4月10日	丸子船のペーパークラフトをつくろう	30
2	4月24日	機織り体験をしよう	31
3	5月8日	琵琶湖のプランクトンを観察しよう	29
4	5月22日	琵琶湖のプランクトンを観察しよう	37
5	6月12日	レインスティックをつくろう	25
6	6月26日	レインスティックをつくろう	29
7	9月11日	紙すきをしよう	31
8	9月25日	紙すきをしよう	33
9	10月9日	草木染をしよう	30
10	10月23日	草木染をしよう	35
11	11月13日	木の実で遊ぼう	22
12	11月27日	木の実で遊ぼう	34
13	12月11日	餅つきをしよう	65
14	1月8日	博物館でスゴロクを楽しもう	31
15	1月22日	博物館でスゴロクを楽しもう	30
16	2月12日	縄文コースターをつくろう	28
17	2月26日	縄文コースターをつくろう	24
18	3月12日	化石のレプリカをつくろう	40
19	3月26日	化石のレプリカをつくろう	46
合計			630



琵琶湖のプランクトンを観察しよう



草木染をしよう



化石のレプリカを作ろう



縄文コースターをつくろう



木の実で遊ぼう（参加者作品）

(6) 職場体験実習

琵琶湖博物館を校区に持つ草津市立新堂中学校2年生の職場体験実習を受け入れた。

月 日	受入人数	内 容
11月9、10、11日	6	展示交流員実習・企画展実習・学芸員研究体験・水族調餌給餌作業・体験学習等

4. 展示交流事業

(1) 水族展示交流活動

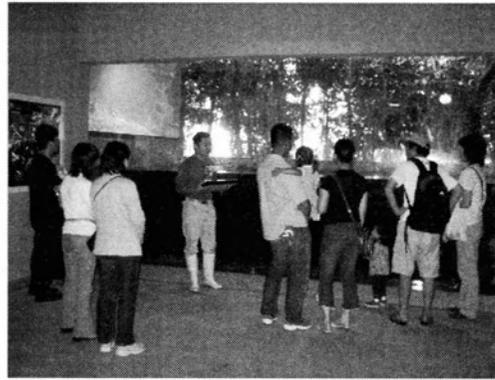
水族展示では、平成16年度も例年通り当日の来館者を対象として、当館最大の水槽であるトンネル水槽（沖合・岩場水槽）やチョウザメ類、ガーパイク類などの古代魚を展示している水槽（古代魚水槽）、およびカイツブリ水槽（水辺の鳥）において展示交流を行った。トンネル水槽では、水族飼育員が潜水し、展示交流員と水中マイクを使って会話しながら、魚の解説や風船などを使った簡単な実験を行った。古代魚の水槽では、チョウザメ類やガーパイク類に餌を与え、種類ごとの餌の違いやとり方の違いを解説した。また、カイツブリ水槽では、餌を与えてカイツブリが水中にもぐって餌を探したり、それを捕らえる様子を来館者に観察していただきながら、この鳥の体のしくみや生態についてわかり易く解説した。

「水族飼育員と話そう」の内容

開催日	内 容	参加者 (名)	担当 飼育員	補助飼育員〔展示交流員〕
4月10日	カイツブリへの給餌と解説	40	岡田(隆)	布施・柴山
4月16日	トンネル水槽潜水通話	25	丸尾	佐藤・布施・岡田(隆)・岡田(勇)・柴山・〔林〕
4月28日	古代魚への給餌と解説	30	柴山	右川
5月18日	古代魚への給餌と解説	10	右川	柴山・丸尾
5月20日	カイツブリへの給餌と解説	40	布施	岡田(隆)・柴山・丸尾
5月27日	トンネル水槽潜水通話	50	丸尾	布施・岡田(勇)・柴山・〔荒井〕
6月9日	古代魚への給餌と解説	100	柴山	右川
6月10日	カイツブリへの給餌と解説	20	岡田(隆)	布施・柴山
6月18日	トンネル水槽潜水通話	50	丸尾	柴山・岡田(隆)・岡田(勇)・〔芦田〕
6月22日	カイツブリへの給餌と解説	60	岡田(隆)	右川・柴山
7月16日	トンネル水槽潜水通話	45	丸尾	柴山・布施・岡田(勇)・〔松岡〕
7月26日	カイツブリへの給餌と解説	50	布施	岡田(隆)・柴山
7月28日	古代魚への給餌と解説	75	右川	柴山
8月2日	古代魚への給餌と解説	120	柴山	岡田
8月16日	カイツブリへの給餌と解説	90	布施	柴山
8月23日	トンネル水槽潜水通話	80	丸尾	柴山・布施・岡田(勇)・〔斉藤〕
8月30日	カイツブリへの給餌と解説	55	岡田(隆)	右川・布施・柴山
9月14日	古代魚への給餌と解説	70	右川	柴山
9月17日	カイツブリへの給餌と解説	30	布施	岡田(隆)・柴山
9月22日	トンネル水槽潜水通話	50	丸尾	布施・柴山・〔木村〕
10月15日	古代魚への給餌と解説	200	柴山	右川
10月21日	トンネル水槽潜水通話	40	丸尾	柴山・布施・〔吉岡〕
10月30日	カイツブリへの給餌と解説	35	岡田(隆)	布施・柴山
11月11日	古代魚への給餌と解説	70	右川	柴山
11月17日	カイツブリへの給餌と解説	35	布施	柴山・丸尾
12月10日	カイツブリへの給餌と解説	20	岡田(隆)	布施・柴山
12月14日	古代魚への給餌と解説	10	柴山	右川
12月18日	カイツブリへの給餌と解説	18	布施	岡田(隆)・柴山
12月19日	トンネル水槽潜水通話	40	丸尾	布施・安永・柴山・〔松田〕
1月15日	カイツブリへの給餌と解説	35	岡田(隆)	布施・柴山
1月26日	古代魚への給餌と解説	15	柴山	右川
1月29日	カイツブリへの給餌と解説	40	布施	柴山・岡田(隆)
2月9日	古代魚への給餌と解説	30	右川	柴山
2月19日	カイツブリへの給餌と解説	40	岡田(隆)	布施
3月5日	カイツブリへの給餌と解説	45	布施	岡田(隆)・柴山
3月16日	古代魚への給餌と解説	30	柴山	右川
3月23日	トンネル水槽潜水通話	60	丸尾	柴山・布施・安永・〔弓削〕
3月30日	カイツブリへの給餌と解説	40	岡田(隆)	柴山・布施



トンネル水槽での潜水通話（撮影：丸尾有美）



カイツブリ水槽での給餌、解説（撮影：丸尾有美）

(2) 展示交流員と話そう

展示交流員は、琵琶湖博物館の案内だけではなく、展示を通して来館者と交流し、来館者に身近な自然や生活へ目を向けていただく「かけはし」となっている。展示交流員は、普段から展示室での交流を行っているが、さらなる交流業務の充実をはかるため、昨年度に引き続き、「展示交流員と話そう」を実施した。

本事業を実施するにあたって、展示交流員は各自でテーマを設定し、担当学芸員のアドバイスを受けながら、知識の習得、交流方法の検討、資料作成などの準備を行った。普段の交流から「きっかけ」をつかみ、できるだけ自然なスタイルで臨めるよう努力した。展示交流員は各自のテーマに沿って、展示だけの交流ではなく、化石を触ってもらう・自作の資料を見ってもらう等、来館者の興味を引き出す工夫も行った。詳細は以下のとおりである。

実施期間：2004年8月2日(月)～11月30日(火) —①

2004年12月1日(水)～2005年3月31日(木) —②

(日曜日、祝・祭日は除く)

実施人数：① 展示交流員 30名 ② 展示交流員 32名

実施回数：① 2004年8月 17回 ② 2004年12月 73回

2004年9月 21回 2004年1月 84回

2004年10月 18回 2004年2月 71回

2004年11月 19回 2004年3月 83回

計 75回 計 311回

交流人数：① 計 379人 ② 計 1694人

「展示交流員と話そう」実施内容

名前	平成16年8月～11月（4か月）		平成16年12月～平成17年3月（4か月）	
	展示室	テーマ	展示室	テーマ
芦田弘美	A	トリの骨から恐竜骨格を組立てる	A	トリの骨から恐竜骨格を組立ててみたら・・・

奥村恵子	C	沖島のくらし	水族	つくってみよう滋賀の味
松岡治子	C	アオコについて		
今泉美保	C	農村のくらし	C	琵琶湖の3つの島めぐり
大川篤子	B	琵琶湖疏水ー京都近代化の礎ー	B	琵琶湖疏水ー古都復興を賭けた大プロジェクトー
近藤摩子	B	治水・利水	B	内水排除施設とは？
池畑慎吾	C	思い出クイズ	C	思い出クイズ
中村とく子	A	ギベオン隕鉄	A	ギベオン隕鉄
井出範子	水族	チョウザメとガーについて	B	琵琶湖疏水を行く
犬塚菊美	A	『咽頭菌』って何でしょう？	B	琵琶湖と淀川水系
吉田治美	水族	チョウザメ	水族	チョウザメとガー
釜本敦子	水族	タナゴの仲間		
山元真里	水族	音を出す魚『ギギ』	水族	ちゃっかりした魚『ムギツク』
愛須美由起	C	おいしいお水を作るのはだあれ！？	C	植物のふしぎと華麗なる舞
西尾文里	C	里山のいきものーイノシシ編ー	C	里山のいきもの
村田洋子	B	滋賀県内 朝鮮半島ゆかりの地	B	イスラエルの湖 ガリラヤ湖
広谷ちひろ			C	昆虫たちの大作戦！～オオセンチコガネ・オサムシ～
本田幸子			C	豊かな土壌づくりの役割みみず
弓削宣子			水族	水鳥あれこれ“カイツブリとユリカモメ”
吉岡 令			C	草津市の花 あおばな
荒井紀子	C	ホタルのことをもっと知ろう・考えよう！	C	ホタルと水辺環境の変化をさぐる
北川喜美榮	C	ヨシ葺き屋根について	C	ヨシ葺き屋根
岩見 勉	B	丸子船と連絡船	ディスカバリー	『どんぐり』であそぼう！
大林博子	水族	チョウザメについて	B	琵琶湖疏水を歩いてみませんか？
折中康子	C	琵琶湖にすんでいる一ツ目小僧さんて誰？	B	瀬田の唐橋
北田昌子	ディスカバリー	人形劇『三匹のなまず』	ディスカバリー	はくぶつかん おもしろ はっけん ガイドツアー(紙芝居)
杉本和子	水族	ユリカモメ	A	メタセコイア
橋本富栄	ディスカバリー	アカハライモリ	ディスカバリー	アカハライモリ
石川寛子	B	縄文土器の文様	B	縄文人のくらし
清水聡子	B	草津川の歴史	ディスカバリー	フィンランドってどんなところ？
木村美枝	B	万葉の古都 大津	B	日吉大社 山王祭
斉藤文子	A	ゾウの臼歯の化石	C	琵琶湖の漁師
林 克子	C	竹生島のカワウ	C	竹生島のカワウ
柳原徳子	C	森林が私たちにもたらしてくれるもの	A	地球46億年の『長さ！』



ディスカバリールームでの交流（撮影：斉藤晶）



A展示室 コレクションギャラリーでの交流（撮影：斉藤晶）

5. 博物館実習（期間：平成16年8月2日(月)～8月9日(月)；ただし8月8日は休日）

国内10大学29名の学生を対象に、琵琶湖博物館の理念および活動方針と、それにもとづく交流サービス、情報、資料整備、展示などの活動について、講義・実習を行った。特に、交流の場としての博物館活動を理解してもらうために、来館者との交流の担い手となる展示交流員体験や、利用者とともに常に成長・発展するための博物館評価としてのユニバーサルデザインチェックとその分析・発表も行った。博物館活動の基本的考え方の理解を確認し、学生と学芸職員との意見交換を行うため、最終日にはディスカバリーボックスの企画とその発表を行った。実習の日程および内容、参加者内訳は下記の通り。

なお、7日以上の実習が必要な学生6名については、期間を延長して実習を行った（1名は1日、5名は3日延長）。

実習の日程および内容

月日（曜日）	実習内容（午前）	実習内容（午後）
8月2日(月)	<ul style="list-style-type: none"> 全体オリエンテーション 博物館とは何か？ 	<ul style="list-style-type: none"> 琵琶湖博物館の設置理念と概要 館内案内 ディスカバリールームの見学 ディスカバリーボックス製作ガイダンス
8月3日(火)	<ul style="list-style-type: none"> 常設展示の概略・戦略 	<ul style="list-style-type: none"> 企画展示の説明と見学
8月4日(水)	<ul style="list-style-type: none"> 資料とデータベース 水族部門の概要と見学 収蔵施設周辺の見学 	<ul style="list-style-type: none"> 博物館資料の整理実習
8月5日(木)	<ul style="list-style-type: none"> 交流事業と情報事業の概要と実習 	<ul style="list-style-type: none"> 交流事業と情報事業の概要と実習
8月6日(金)	<ul style="list-style-type: none"> 展示交流員体験 	<ul style="list-style-type: none"> 展示交流員体験
8月7日(土)	<ul style="list-style-type: none"> ユニバーサルデザインチェック 	<ul style="list-style-type: none"> チェック結果の考察
8月8日(日)	休 日	
8月9日(月)	<ul style="list-style-type: none"> ディスカバリーボックス製作 	<ul style="list-style-type: none"> ディスカバリーボックス製作発表 修了式

実習生：10大学，29名（内訳）

所 属	人 数	所 属	人 数
滋賀県立大学	5	京都教育大学	2
成安造形大学	5	高知大学	2
近畿大学	7	帯広畜産大学	1
京都府立大学	3	宝塚造形芸術大学	1
京都文教大学	2	龍谷大学	1
合 計			29

6. 来館者との交流会

来館者の多い夏休み期間は、8月9日(月)以外は休まず開館し、特別企画として開館の月曜日にビデオ上映とミニ解説、月曜体験コンサートなどの事業を実施した。

1) ビデオ上映のミニ解説

日時：7月26日(月) 午後2時より

会場：ホール

内容：ビデオ「よみがえれ日本の淡水魚！ー魚たちにせまる危機ー」とミニ解説

2) 月曜体験コンサート

日時：8月の毎週月曜日（9日を除く）午後2時より

会場：アトリウム

内容：①8月2日(月)

「サントゥールってなあに？」 出演：谷正人

②8月16日(月)

「歌をうたおう！」 出演：MAPヴォーカルアンサンブル

③8月23日(月)

「打楽器の仲間たち」 出演：中路友恵、山内利一

④8月30日(月)

「プラス！プラス！プラス！」 出演：おくらしっくプラスアンサンブル

3) 水族飼育員と話そう

日時：7月26日および8月の毎週月曜日（9日を除く）午後1時30分より

会場：水族展示コーナー

内容：水族飼育員による魚、カイツブリ等への餌やり実演と楽しいお話

7. 地域交流活動への支援事業

平成16年度に当館学芸職員が一般団体、機関等を対象として行った館内ガイダンス、視察対応、講義、講演等は以下に示した表のとおりである（海外団体への対応については「6. 国際交流活動」を参照）。

(1) 地域活動支援（博物館内）

月	日	曜日	団体名	参加者 (名)	タイトル・内容	区分	場 所	担当
4	18	金	NTTドコモ関西	約70	琵琶湖の環境	講義		布谷
6	5	土	草津市馬場町子ども会	55	むかしのいきもの	講師	生活実験 工房ほか	西垣・ 磯野・ 青木・ はしか け
	12	土	栗東第8団カブスカウト隊	70	琵琶湖の魚に親しもう	講師	実習室	秋山・ 青木
	26	土	日本ボーイスカウト連盟	約30	博物館の裏側探検	案内	動物収蔵 庫	八尋
7	4	日	奈良県都祁村教育委員会	17	よし笛をつくろう	講師	実習室	青木
	11	日	大阪府善久寺子供会	20	よし笛をつくろう	講師	実習室	青木
	18	火	能登川町神郷子供会	30	よし笛をつくろう	講師	実習室	青木・ わたの ね
	27	火	八木町教育委員会	子ども 29	アユモドキについて	講演	セミナー 室	前畑
	31	日	滋賀県自然環境保全課 (滋賀の生物多様性を考えるフォーラム)	大人 約200	魚貝類、昆虫類の現状 について	講演	ホール	中井・ 松田・ 前畑・ 八尋
8	2	月	大津市松原町子供会	30	よし笛をつくろう	講師	実習室	青木
	2	月	仮説実験授業研究会	大人 60 子ども 64	全国合宿研究会サマースクール「化石のレプリカ作り」	講師	実習室	谷口・ 西垣
	6	金	大阪府水道サービス公社	120	水源「琵琶湖」夏休み親子見学会 「外来魚の解剖」	講師	実習室	中井・ 西垣・ 谷口
	8	日	全国子ども環境特派員	100	子ども環境特派員事業	講師	実習室	西垣
	15	日	胆道閉鎖症の子どもを守る会	14	化石のレプリカをつくろう	講師	実習室	青木
	19	木	伊川を愛する会	48	琵琶湖の魚と貝	講師	実習室	松田
	21	土	泉南市立青少年センター	20	琵琶湖の魚に親しもう	講師	実習室	秋山・ 青木

9	4	土	中国上海市徐匯区教育代表団施設訪問	9	琵琶湖博物館での環境学習	講演	会議室	西垣
	12	日	ダスキン出口支店	24	よし笛をつくろう	講師	実習室	青木
10	17	日	近畿大学農学部	約100	博物館実習	講師	ホール・展示室	孝橋・松田
	29	金	滋賀県緑化推進会	大人約20	おいしい水を育む森林	講師	会議室	草加
11	2	火	日野町立中央公民館(町民大学)	大人 45	琵琶湖の環境と魚類	講師	セミナー室	前畑
	9	火	(独) 水資源機構	大人 12	琵琶湖の魚類の現状と環境変化	講師	セミナー室	前畑
	11	木	静岡県内水面漁場管理委員会	大人 7	カワウの現状について	講師	会議室	亀田
	20	土	滋賀県中小企業家同友会	大人約70	自然の恵みと滋賀の環境問題	講師	セミナー室	草加
	21	日	守山ロータリークラブ(総会)	大人 40	水環境教育のひとつのやり方	講師	セミナー室	芳賀
12	12	日	近江八幡市環境課	20	琵琶湖の魚に親しもう	講師	実習室	秋山・青木
2	16	水	おおつ環境フォーラムこどもが遊べる川づくりプロジェクト	子ども 10	プランクトンの観察	講師	実習室・企画展示室	楠岡
	18	金	環境監視研究所	大人 4	参加型環境教育について	講師	展示室	芳賀
3	6	日	大津市大石龍門町子ども会	子ども 35	化石のレプリカ作り	講師	実習室	谷口
	12	月	神戸市立須磨海浜水族園(ボランティア研修)	大人約50	琵琶湖の歴史、環境変化と魚	講演	セミナー室	前畑
	12	月	神戸市立須磨海浜水族園(ボランティア研修)	大人約50	ボランティア交流会	交流	セミナー室	草加・西垣・前畑

(2) 地域活動支援 (博物館外対応)

月	日	曜日	団体名	参加者(名)	タイトル・内容	区分	場所	担当
4	4日～12月12日		伯母川博物館実行委員会・子どもエコクラブ 伯母Q五郎	大人・子ども 15	志津地域への支援事業(計41件)	野外活動・講師	志津地域	西垣
	29	木	第19回セタジミ祭実行委員会	大人約140	琵琶湖の魚類、貝類、環境問題	講演	瀬田川(大津)	松田
5	2	日	滋賀県	-	琵琶湖ルールの啓発	操船	琵琶湖	松田
	21	金	滋賀県総合教育センター	大人約100	天体観望会	講演	滋賀県総合教育センター	谷口

6	5	土	広島県立歴史民俗資料館(第25期文化講座)	大人 約50	琵琶湖の魚と水田のかかわり	講演	県立歴史民俗資料館(広島)	前畑
	9	水	(社)滋賀県保育協議会	大人 約170	びわ湖の環境と魚	講演	アヤハレークサイドホテル(大津)	前畑
	12	土	真野公民館(大津市)	大人・子ども 約50	ホタルの観察とお話	講演・野外活動	伊香立生津町(大津)	八尋
7	2	金	滋賀県レイカディア大学	大人 200	琵琶湖の魚と田んぼ	講演	米原町文化産業交流会館	前畑
	4	日	岡山県瀬戸町教育委員会	大人 約200	魚はなぜ水田地帯にやってくるのか	講演	瀬戸町総合福祉センター(岡山)	前畑
	9	金	琵琶湖ラムサール条約連絡協議会研修交流会	20	伯母川博物館事業について	講師	草津市役所	西垣
	21	水	下阪本学区まちづくり推進協議会	約30	木の岡地区ビオトープ自然観察会	講師	木の岡(大津)	八尋
	25	日	滋賀県(自然環境保全課)	-	琵琶湖ルールの啓発	操船	琵琶湖	孝橋・杉野
8	2	土	NPO法人シニア自然大学	大人 約60	魚とは何か?	講師	梅田東生涯学習ルーム(大阪)	前畑
	9	月	NPO法人シニア自然大学	大人 約60	淡水魚に関する理論と実習	野外学習	大戸川(大津)	前畑
	10	火	NPO法人シニア自然大学	大人 約60	魚とは何か?	講師	梅田東生涯学習ルーム(大阪)	前畑
	12	火	NPO法人シニア自然大学	大人 約60	魚とは何か?	講師	梅田東生涯学習ルーム(大阪)	前畑
	20	金	滋賀県総合教育センター	大人 100	天体観望会	講演	滋賀県総合教育センター	谷口
	21	土	南草津図書館開館2年記念講演会	大人 約50	「環境と歴史」	講演	草津市立南草津図書館	宮本
	23	月	滋賀県理容生活衛生協同組合	大人・子ども 約50	チョコちゃん環境フェスティバル	講師	草津市下物	孝橋
	24	火	NPO法人シニア自然大学	大人 約60	淡水魚に関する理論と実習	野外学習	大戸川(大津)	前畑
	25	水	滋賀県湖南地域振興局	大人・子ども 約50	水環境クリーン・ウォーク(魚釣りコース)	講師	烏丸半島(草津)	孝橋
	27	金	20年目の琵琶湖調査団	大人 60	琵琶湖の環境と魚	講演	朝日漁業協同組合会館(湖北町)	前畑
29	日	国土交通省近畿地方整備局	大人 250	水の使い方を考えるシンポジウム	パネラー	京都リサーチパーク西地区4号館	前畑	

10	1	金	滋賀県総合教育センター	大人 約100	天体観望会	講演	滋賀県総合教育センター	谷口
	4	月	ロイヤルオークホテル	大人 約100	ビワマスの生態と保護	講演	ロイヤルオークホテル(大津)	桑原
	11	月	滋賀県理容生活衛生同業組合	大人 約100	チョキちゃん環境フェスティバル	講演	ドラゴンハットふれあいセンター(竜王町)	中島
	17	日	島根県教育庁古代文化センター	大人 約300	楽しむ・発見する・発信する	講演	くにびきメッセ 3階国際会議場	橋本
	19	火	若鮎保育園	幼児20	草木染め体験	講師	若鮎保育園	中藤・近江はたおり探検隊
	31	日	「わんぱくプラザ矢倉っこ」実行委員会・矢倉公民館	子ども 約40	よし笛・よし凧をつくろう	講師	矢倉小学校(草津)	青木・西垣・体験学習の日G
	31	日	野尻湖ナウマンゾウ博物館(20周年記念講演会)	大人 40	ナウマンゾウのルーツをさぐる	講師	野尻湖博物館(長野)	高橋
11	6	土	草津小学校PTA	91	外来魚の解剖・化石のレプリカ	講師	草津小学校	西垣・谷口・体験学習の日G
	12	土	滋賀県総合教育センター	大人 8	ニジマスの解剖実習	講師	滋賀県総合教育センター	桑原
	31	日	浅井町・虎姫町商工会青年部	大人 約40	まちづくり講演会	講師	びわ町商工会館	牧野(厚)
12	2	木	マキノ東小学校6年生	子ども12	私たちが作った奥田沼水田魚道	講師	マキノ東小学校	杉谷
	11	土	金田公民館	大人・子ども約10	綿からの糸紡ぎ	講習	金田公民館(近江八幡)	中藤・近江はたおり探検隊
	16	火	(株)日本水産資源保護協会	大人 約60	カワウの食性と採食場所選択について	講演	明科公民館(長野)	亀田
	27	木	滋賀県レイカディア大学	大人 約250	びわ湖の魚と田んぼ	講演	米原町文化産業会館	布谷・前畑

1	6	木	中洲公民館	大人・ 子ども約10	綿からの糸紡ぎ	講習	中洲公民館 (守山)	中藤・ 近江は たおり 探検隊
	19	水	中洲公民館	大人・ 子ども約10	綿からの糸紡ぎ	講習	中洲公民館 (守山)	中藤・ 近江は たおり 探検隊
	24	月	中洲公民館	大人・ 子ども約10	綿からの糸紡ぎ	講習	中洲公民館 (守山)	中藤・ 近江は たおり 探検隊
	24	木	毎日新聞社	大人 約250	「水辺と生き物ー 琵琶湖の環境を 考える」シンポ ジウム	パネラー	朝日生命ホー ル(大阪)	前畑
	30	日	滋賀県立草津市文化芸 術会館	約120	こどもアート体 験教室	講師	草津市文化 芸術会館	青木・ 西垣・ 体験学 習の日 G
2	4	金	滋賀県総合教育センター	大人 約100	天体観望会	講演	滋賀県総合 教育センター	谷口
	6	日	NPO法人明るい社会づ くり運動滋賀県協議会	大人 約60	琵琶湖水質学習 会	講師	近江八幡市	芳賀
	13	日	早崎内湖再生協議会	大人 約260	早崎内湖再生シ ンポジウム	パネラー	びわ町文化 学習センター	前畑

(3) 博物館ガイダンス (視察対応も含む)

月	日	曜日	団体名	参加者 (名)	内 容	場 所	担当
4	10	土	京都橘女子大学	学生等 約40	博物館概要	会議室	中島
	21	水	滋賀県農政水産部	大人 2	展示案内	展示室	杉谷
	24	土	貝塚市	大人 2	収蔵庫案内	収蔵庫	八尋
5	2	日	徳島県立博物館	大人 2	展示案内	展示室	用田
	8	土	新潟県立歴史博物館	大人 1	展示案内	企画展示室	中藤
	11	火	全国市町村文化研修所	大人約50	博物館運営について	セミナー室	布谷
	12	水	総務省総務部予算調整課	大人 3	展示案内	展示室	前畑
	17	月	高島綿'sクラブ	大人 4	展示案内	企画展示室	中藤
	22	土	砺波郷土資料館	大人 2	機織り道具について	企画展示室	中藤
	25	火	大津市歴史博物館	大人 2	展示案内	展示室	用田

6	15	火	文化庁伝統文化課	大人1	収蔵庫案内	収蔵庫	用田
	17	木	二上山博物館	大人1	収蔵庫案内	収蔵庫	用田
	29	火	茨城県生活環境部	大人4	博物館活動について	応接室	中島
7	4	日	近畿府県監査委員	大人26	展示案内	展示室	高橋
	15	木	近畿府県監査委員協議会	大人約40	展示案内	展示室	金森
	27	火	八木町教育委員会	子ども29	バックヤード見学	C展示裏側	前畑
	28	水	三重県教育委員会	大人3	博物館概要・運営	応接室	高橋
	28	水	大手前大学(西宮市)	学生他34	概要説明と展示案内	展示室ほか	里口
	28	水	関西博物館研究会	大人約20	概要説明	会議室	布谷
	29	木	茨城県議会環境商工委員会	大人約20	博物館運営について	会議室	金森・中島
8	5	木	滋賀大学教育学部	学生等約31	博物館の概要	会議室	中島
	11	水	茨城県企画部地域計画課	大人3	博物館概要、運営	会議室	布谷
9	3	金	関西大学文学部	学生等約50	博物館運営について	セミナー室	布谷
	3	金	全国林業試験研究機関協議会関西Iブロック	大人8	展示案内	展示室	金子
	10	金	TKC近畿京滋会	大人約250	琵琶湖の形態と人びとのくらし	ホール	中島
	16	木	横浜国立大学経済学部	大人約20	博物館の役割についての調査協力	会議室	布谷
	23	木	桃山学院大学	学生等約10	概要説明ほか	収蔵庫ほか	布谷
10	7	木	栗東歴史民俗資料館	大人2	昭和30年代の台所用具(資料の熟覧)	環境収蔵庫	中藤
	16	土	琵琶湖・淀川水質保全機構	80	ジュニアリバーズスクール2004	ホール	西垣
	19	火	環境保全型農業基盤整備技術・工法検討委員会	大人15	展示案内	展示室	杉谷
	23	土	京都市	大人1	収蔵庫案内	収蔵庫	八尋
	27	水	環境エネルギー館	大人3	フロアスタッフの役割	ディスカバリールーム	磯野
	31	日	当目まちづくり委員会	大人15、子ども15	展示案内	展示室	杉谷
11	3	水	京都府立大学	大人1	収蔵庫案内	収蔵庫	八尋
	10	水	吹田市	大人3	概要説明、展示案内	展示室ほか	布谷
	24	水	滋賀県新聞通信放送十社会	大人12	研究活動説明、展示案内	会議室	金森・高橋
	26	金	関東農政局	大人5	展示案内	展示室	杉谷
	27	土	NPO法人自然と緑	大人約50	博物館の概要説明	セミナー室	牧野(厚)
	30	火	フォーラム仙台 会派議員	大人10	博物館の概要説明	会議室	高橋
12	7	火	愛知学院大学文学部史学科	大人25	本館の設立経緯と特徴、今後の課題	会議室	中藤
	7	火	ひめゆり平和祈念資料館	大人4	博物館の概要説明	応接室	高橋

1	27	木	岡山県教育委員会	大人 4	博物館の概要説明	応接室	用田
	31	月	新潟市議会無所属連合	大人 5	展示案内	展示室	高橋
2	11	金	鹿児島県文化振興財団	大人 2	博物館の概要説明	応接室	中島
	19	土	岐阜県世界淡水魚園アクア トトぎふ	大人 2	水族展示施設について	展示室	松田
	20	日	滋賀YMCA	大人12	博物館の概要説明	実習室	青木
	22	火	三重大学人文学部	学生等 約22	琵琶湖の遺跡	展示室	宮本
3	2	水	草津宿街道交流館	大人 2	収蔵庫案内	民俗収蔵庫	中藤
	2	水	(株)びわこビジターズビュー ロー	大人 約15	博物館の概要説明	会議室	前畑
	6	日	神戸市立須磨海浜水族園ボ ランティア	大人 約50	はしかけ活動について	セミナー 室	西垣
	15	火	岐阜県博物館視察	大人 4	展示交流について	実習室・ 展示室	宮本
	17	木	山形県立博物館	大人 2	博物館の概要説明	応接室	布谷
	17	木	新江ノ島水族館	大人12	水族展示施設について	展示室	松田
	18	金	北海道開拓記念館	大人 1	博物館資料の燻蒸について	収蔵庫ほ か	八尋
	19	土	宍道湖自然館	大人 1	水族展示施設案内	展示室	松田
	19	土	(株)びわこビジターズビュー ロー	大人 約17	博物館の概要説明	会議室	中島
	22	火	京都府立大学	学生 2	収蔵庫案内	収蔵庫	八尋
	23	水	(財)日本国際協力センター	大人 9	博物館の概要説明	応接室	中島
	30	水	日本藻類学会	大人 7	展示案内（企画展示含む）	展示室	大塚

3 情報発信活動

琵琶湖博物館では、コンピュータ技術を活用し、情報拠点として機能できる基本情報システムの構築を進めてきた。しかし、コンピュータ技術の発展と普及に伴って電子情報が博物館活動の全体に広く関わりを持つ状況になり、電子情報関連の業務だけを独立した事業の1つとして取扱う意義が薄れてきた。その一方で、コンピュータ技術と関わりの深い二次資料（図書映像資料）を整備する事業を、一次資料（いわゆる実物資料）の整備と別に取扱うことの弊害が目立ってきた。

そこで本年度より、これまで一次資料のみを対象としていた資料整備事業において二次資料の整備も取扱うこととし、情報に関する担当部署（情報センター）では、コンピュータ技術に関わる他の事業、すなわち電気通信を利用した「情報発信」に関わる事業と、コンピュータ利用の基本となるインフラストラクチャの整備に関する事業のみを取扱うこととした。

(1) 通信網を利用した館外への情報提供

来館者や遠隔地の利用者に対する情報提供手段として、2つのシステムを運用してきたが、うち1つは今年度途中で運用を終了した。

1) ファクシミリ情報提供サービス

各家庭や職場のファクシミリから電話回線で接続して操作することにより、展示案内・行事案内・交通案内などの情報が受信できるサービス。9月22日に故障のため運用を停止し、そのまま再開しないこととした（詳細は後述）。2004年度当初から運用停止までのアクセス件数は下表のとおりであった。

ファックス情報提供サービスへのアクセス件数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	合計
総アクセス数	14	20	5	9	28	14	90
目次アクセス数	7	7	2	4	13	5	38

総アクセス数：サーバから情報が取り出された件数

目次アクセス数：「総アクセス数」のうち、目次ページへのアクセス件数

（通常、目次ページで目的とする情報の所在を確認した後、改めてサーバに接続してその情報を取り出す。）

[運用終了に至る経緯]

このサービスは開館準備中の平成8年（1996年）5月から運用を続けてきたが、主にインターネット環境の普及のために、徐々に利用が減少していた。提供する情報の元となるデータは他の媒体（チラシやインターネットなど）と同じであるとはいえ、ファクシミリ専用で整形するために相応の手間を要していた。そんな中、9月21日に、このサービスを行っているサーバに軽微な不調が生じた。この不調は、直ちに運用に支障を来すものではなかったが、当初は博物館職員の手で簡単に修理できる

と見込まれたため、翌22日に運用を一時停止して、必要な部品を直ちに手配することにした。

ところが、実際には必要な部品を必要数だけ調達するのが困難であることが判明したため、諸般の状況を検討の上、11月11日付けで正式に「サービス終了」とすることにした。

2) www (いわゆる「ホームページ」)

インターネットを經由して博物館のページに接続することにより、展示案内・行事案内・交通案内などの情報を利用したり、博物館資料のデータベースや各種の学術情報を検索利用することができる。

実際の運用は、データベースや電子交流システムなど利用者からの反応に応じて異なる情報を提供する「動的サーバ」と、それ以外の一般的な情報を提供する「静的サーバ」の2台で分担しており、アクセス状況に関する統計も独立に計上されている。2004年度における各サーバのアクセス件数は下表のとおりであった。

インターネットページ（静的サーバ）へのアクセス件数

	総 ヒ ッ ト 数	ページヒット数	連続アクセス	表紙アクセス	表紙開始アクセス
4月	1,024,518	315,376	40,772	10,512	7,862
5月	1,390,753	431,402	50,353	11,987	8,915
6月	1,193,869	375,413	43,366	11,497	8,333
7月	1,343,750	398,988	46,037	13,150	9,860
8月	1,532,356	459,003	45,182	13,797	10,510
9月	1,102,090	342,220	43,687	11,752	8,877
10月	1,189,263	364,737	44,081	11,665	8,805
11月	1,006,982	307,472	41,958	11,324	8,479
12月	771,371	242,889	37,354	8,636	6,344
1月	1,250,067	405,229	46,687	10,832	7,893
2月	1,101,947	329,528	38,954	11,111	8,243
3月	971,216	292,417	36,516	11,316	8,562
合 計	13,878,182	4264,674	514,947	137,579	102,683

総 ヒ ッ ト 数：サーバに対する全ての種類のデータ要求の総数（但し、博物館内部からの要求は除外）各ページの定義ファイルはもちろん、ページを構成する画像ファイルの要求も含まれる

ページヒット数：「総ヒット数」のうち、各ページの定義ファイルに対する要求の件数

連続アクセス：同一利用者が概ね1時間以内に再度アクセスしたと思われるものは合わせて1件と数えた場合のアクセス件数（博物館内部からのアクセスは除外）

表紙アクセス：「連続アクセス」のうち、ウェルカムページ（表紙ページ）を經由したアクセスの件数（「表紙から入った」と「表紙へ戻った」との合計）

表紙開始アクセス：「表紙アクセス」のうち、最初にウェルカムページにアクセスした件数

※「エリアキャッシュ」を利用して利用者側の組織内で情報を再使用している場合は、合わせて1件しか計数されない。

インターネットページ（動的サーバ）へのアクセス件数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
セッション数	218	297	323	300	369	249	274	260	283	307	308	234	3,422
絞込検索回数	429	198	250	197	244	155	449	192	258	239	354	329	3,294
データ閲覧件数	2,233	3,119	3,599	2,765	2,224	2,288	5,177	1,650	5,584	2,621	7,972	3,466	42,698

セッション：サーバ側が絞込検索を実現するために認識している「同一ユーザによる連続した」アクセスの集合

※博物館内部からのアクセスは計数していない。

(2) 通信網を利用した双方向の情報交換サービス

博物館側からの一方的な情報発信ではなく、来館者や遠隔地の人からの情報を受ける活動も含めた双方向の情報交換を実現するため、2つのサービスを運用している。

1) 電子メールによる質問などの受付けサービス (query@lbm.go.jp)

インターネットを介した電子メールによって、質問・感想・要望などを受付けている。一般的な内容のものは情報センターの担当者が回答し、専門的なものは各々の内容に応じて該当分野担当の学芸職員が回答している。2004年度は全部で260件のメールがあり、その内容は以下のようなものであった。

内 容	件 数
専門的内容を含む質問	122
施設利用・行事の問い合わせ	25
館の運営についての意見・問い合わせ	20
情報掲載依頼（リンク許可・サイト登録を含む）	16
画像使用の許可依頼	16
資料の提供・利用などの問い合わせ	6
館の案内資料の請求	8
アンケートの回答依頼	4
研修・視察の依頼	4
職員採用についての問い合わせ	4
近隣施設の問い合わせ	7
職員個人あてのメール	6
他施設へ転送（送り先間違いなど）	10
その他	12
合 計	260

※スパムメール・ウィルスメール・一方的な情報提供は計上していない。

※回答に回答しての追加質問など、継続したやりとりは、合わせて1件とした。

2) 電子交流システム (LBMNET)

各家庭のパソコンを博物館のシステムに接続することにより、身のまわりのできごとに関する報告や質問を書込んだり、他の参加者の質問などに対応して議論したりすることができるシステムである。当初は旧来型のパソコン通信で接続するシステムとして運用開始し現在も利用可能であるが、1999年にインターネットを経由して接続することもできるように改良し、現在はこちらが主たる入口になっている。

なお、このシステムには館職員にしか読み書きできないように規制している部分があり、こちらは館内の会議などの記録を蓄積するシステムとして活用している。

(3) 情報システムの整備

2004年度は、以下のような追加整備等を行った。

《機器の更新》

開館後8年を経過して、多数の機器が損傷するなど老朽化が進行しているため、該当するものを通称「パソコンリサイクル法」に準じて廃棄し、主にリースによって代替機種を導入した。

今年度新規導入した主な機器は、以下のとおりである。

- ネットワークハードディスク（異機種間データ交換用） 1台
- ノート型パソコン（Windows：NEC社製Versa Pro VY22X/RX-M）12台
- デスクトップ型パソコン（Macintosh：Power Mac G4）5台
- デスクトップ型パソコン（Windows：ヒューレッドパッカード社製dx 6100）1台
- モノクロレーザープリンター（Canon LBP 3800）5台
- A3サイズ対応スキャナー（Epson Offirio ES-7000H）1台
- マルチフォーマットフィルムスキャナー（Nikon Super Cool Scan 5000ED）1台

《ネットワークの整備》

情報システムの発達により、各種事業で電子媒体を利用した試みが活発となり、開館時に整備したLAN配線では対応できなくなったため、平成14（2002）年度に高速LANを要所に敷設した。しかし、この際に高速LANが不必要と判断した部分でも必要な状況が生じてきたため、館内の8か所に高速LANの末端を追加する配線工事を実施した。

《ソフトウェアの追加開発》

琵琶湖博物館の収藏品データベースは、主に博物館が収蔵する資料の管理を目的として構築運用され、現在までに約40万件のデータが入力されている。平成11（1999）年度以降、このデータベースに蓄積された資料情報を一般利用者にも公開して活用してもらうためのシステム改良を、準備が完了した分野から順次進めている。本年度は、そのうち民俗と脊椎動物の分野についてのシステム改良を行った。

また、コンピュータ・ネットワークをめぐる昨今の情勢変化に伴い、データベースシステムへのアクセス権限を細分化してセキュリティを強化する必要性が生じてきたため、そのためのシステム改良を行った。

《セキュリティ強化のための措置》

情報システムのセキュリティを確保するためにファイヤーウォール装置やウィルス対策システムを導入しているが、これらのシステムは最新の情勢に応じたバージョンアップを継続的に行う必要があるため、メーカーとの契約に基づいて提供される改良版ソフトウェアを順次導入した。

また、博物館の電子情報を突発的な災害から守るために必要となる、定期的なデータバックアップの態勢を見直し、より強固な態勢の構築を行った。

4 資料整備活動

琵琶湖博物館で資料整備の対象としているのは、「琵琶湖とその集水域および淀川流域」およびその全体的評価にかかわるもの、ならびに博物館のテーマ「湖と人間」に関係する日本、アジア、世界の湖沼とその周辺地域におよぶものである。自然、人文、社会科学等にかかわる過去から現在までの実物の資料、生魚などの水族資料、映像資料、図書資料および博物館業務に必要な資料について、収集・整理・保管および利用を図り、博物館活動の充実に努めている。

収蔵資料は、博物館職員による収集をはじめ、受贈、受託、交換、購入、製作、提供、参加型調査等によって受け入れられ、必要に応じて速やかに利用できるよう、各資料区分ごとの体系にしたがって整理を行っている。

以下に2004年度の資料整備状況を示す。

(1) 収蔵資料

収蔵資料は、地学標本、植物標本、動物標本、微生物標本、水族資料（生体）、考古資料、歴史資料、民俗資料、環境資料、図書資料、映像資料の11分野にわたる。

登録資料数とは、琵琶湖博物館情報システムの資料データベースに登録されているものの総数をいい、収蔵概数とは、登録資料数と未整理な資料を含めた収蔵全体数である。

2004年度末現在で、博物館登録資料は365,034で、収蔵概数は704,736となった。

これらの収蔵資料は、保存に影響を与えない範囲で、展示、閲覧および貸出等に利用している。

【収蔵資料のまとめ】

2005年3月現在

	登録資料数	収蔵概数	2004年度登録数	2004年度受入総数
地学	25792	30112	3674	1720
植物	76439	160969	4140	21
動物	88241	217600	6543	2968
微生物	0	21000	0	11735
水族（生体）	15651	15651	11250	11250
考古	0	1346箱・334点	0	0
歴史	0	177件	0	5件
民俗	0	6034	0	821
環境	0	45箱・703点	0	87
図書	81370と1775タイトル	100765	6186と588タイトル	4363と588タイトル
映像	75766	150000	0	46220
合計	365034	704736	32381	79778

【各分野別の詳細】

地学標本	2004年度				整理状況・作業内容・公開など	累積	
	登録数	採集数	寄贈・提供数	受入総数		登録資料数	収蔵概数
化石	1320	201	349	550	薄片作成8点、登録前収納整理 1449点、ラベル作成等530点、標 本貸出23点	18088	20890
岩石・鉱物	620	0	1170	1170		5613	6022
堆積物	1616	0	0	0		1779	2220
プレパラート	118	0	0	0		312	980
小計	3674	201	1519	1720		25792	30112

植物標本	2004年度						累積	
	登録数	採集数	寄贈数	提供数	受入総数	整理状況・作業内容・公開など	登録資料数	収蔵概数
さく葉標本	4135	0	0	16	16	標本配架344点、資料目録「村瀬忠義植	76377	160799
菌類乾燥標本	5	0	0	5	5	物標本目録2・3」刊行、企画展示「のび	5	113
水草包埋標本	0	0	0	0	0	る・ひらく・ひろがる」資料出展	57	57
小計	4140	0	0	21	21		76439	160969

動物標本	2004年度						累積		
	登録数	採集数	寄贈数	提供数	受入総数	整理状況・作業内容・公開など	登録資料数	収蔵概数	
脊椎動物(魚類を除く)	268	0	0	18	18	新規データベース構築および入力作業	331	331	
内訳	哺乳類骨格標本	3	0	0	3	3		187	187
	哺乳類剥製標本	1	0	0	1	1	データベース登録作業	7	7
	哺乳類	64	0	0	0	0		100	100
	鳥類骨格標本	61	0	0	8	8	標本受入、整理、計測、骨格標本製	61	83
	鳥類乾燥標本(果、レプリカ等含む)	137	0	0	4	4	作8点、乾燥標本製作22点	137	297
	爬虫類骨格標本	0	0	0	0	0		32	32
	爬虫類剥製標本	2	0	0	2	2	標本受入、整理、登録作業	4	4
爬虫類	0	0	0	0	0		1	1	
魚類(淡水魚類)	2551	780	0	71	851		44031	74516	
内訳	乾燥骨格標本	126	0	0	0	0	咽頭菌標本の作成、登録、計測83件・	2436	2436
	DNA分析用標本	972	536	0	0	0	展示中の標本などの登録43件	3093	3093
	液浸標本	1453	244	0	71	851	登録作業	38502	68987
昆虫	1693	306	2	1123	1431		32413	129753	
内訳	昆虫液浸標本	1693	69	2	291	362	寄贈標本・受け入れ標本の同定、ラベル添付、	11221	29700
	昆虫乾燥標本	0	237	0	832	1069	配架、登録1453件・アルコール液点検、補充、	21192	100053
貝類	2031	196	0	216	412	ホルマリンよりの置換1120件	11466	13000	
甲殻類	0	142	0	94	236		0	0	
内訳	液浸標本	0	141	0	94	235	Web公開に伴うDB改良完成、ソーティング	0	0
	プレパラート標本	0	1	0	0	1	(小分け・粗同定)、同定、ラベル添付および修	0	0
無脊椎動物	0	6	6	8	20		0	0	
内訳	ダニ類プレパラート標本	0	0	6	0	6	正、収納整理作業996本、参照標本作成4本、	0	0
	寄生虫プレパラート標本	0	3	0	0	3	アルコール液点検・補充29,700本	0	0
	寄生虫液浸標本	0	1	0	2	3	村山修一蝶類コレクションおよび他の	0	0
	クモ類液浸標本	0	0	0	1	1	昆虫の整理・標本作製2069点	0	0
	その他液浸標本	0	2	0	5	7	ソーティング(小分け・粗同定)、ラベルの作成	0	0
小計	6543	1430	8	1530	2968	および添付、仮データ入力各約990点・新規登録、	88241	217600	
						登録番号ラベルの作成および添付、標本の配架、			
						各2031件・アルコール液点検約12000本			

微生物標本	2004年度						累積	
	登録数	撮影数	寄贈数	提供数	受入総数	整理状況・作業内容・公開など	登録資料数	収蔵概数
珪藻標本	0	0	0	3920	3920	データベース構築準備、写真を	0	6000
光学・電子顕微鏡写真	0	7815	0	0	7815	整理中	0	15000
小計	0	7815	0	3920	11735		0	21000

水族資料(生体)	2004年度						累計		
	登録数	採集数	提供数	購入数	繁殖数	受入数	整理状況・作業内容・公開など	登録資料数	収蔵概数
脊椎動物	9099	2611	99	1022	5367	9099		14391	14391
内訳	魚類	9093	2605	99	1022	5367		14357	14357
	両生類	6	6	0	0	0		9	9
	爬虫類	0	0	0	0	0		18	18
	鳥類	0	0	0	0	0		7	7
無脊椎動物	2151	2079	0	8	64	2151		1260	1260
内訳	昆虫	188	116	0	8	64		76	76
	貝類	488	488	0	0	0		806	806
	甲殻類	1475	1475	0	0	0		378	378
小計	11250	4690	99	1030	5431	11250		15651	15651

考古資料	2004年度			累積	
	登録数	受入総数	整理状況・作業内容・公開など	登録資料数	収蔵概数
遺跡遺物(舟、瓦を除く)	0	0		0	1313(箱)と320
丸木船	0	0		0	5
瓦	0	0		0	22(箱)
灯籠	0	0		0	3
貝塚剥ぎ取り資料	0	0		0	6
展示関係(ガリラヤ湖関係含む)	0	0		0	11(箱)
小計	0	0		0	1346箱と334点

歴史資料	2004年度(件数)					累積(件数)		
	登録数	購入数	寄贈数	提供数	受入総数	整理状況・作業内容・公開など	登録資料数	収蔵概数
古文書、絵図、絵画等	0	3	0	2	5	東寺文書調書作成整理30点、小牧家旧蔵歴史資料調書作成整理900点	0	151
美術工芸品等	0	0	0	0	0		0	7
二次資料(レプリカ、模写、模造)	0	0	0	0	0		0	19
小計	0	3	0	2	5		0	177

民俗資料	2004年度				累積	
	登録数	寄贈数	受入総数	整理状況・作業内容・公開など	登録資料数	収蔵概数
生活生業用具	0	10	10	写真撮影800点、実測図作成100	0	4173
漁撈用具(船関係用具を含む)	0	2	800	点、資料展出版120点、公開用データベース作成	0	1839
二次資料(木造船模型)	0	11	11		0	22
小計	0	23	821		0	6034

環境資料	2004年度				累積	
	登録数	寄贈	受入総数	整理状況・作業内容・公開など	登録資料数	収蔵概数
水環境調査資料	0				0	72
生活用具類	0	87	87	受入作業と資料収納作業	0	25
民具類	0	0	0		0	22(箱)と577
二次資料(レプリカなど)	0	0	0		0	23(箱)と25
海外の湖沼船	0	0	0		0	4
小計	0	87	87		0	45箱と703点

図書資料	2004年度				累積		
	登録数	購入数	寄贈・提供数	受入総数	整理状況・作業内容など	登録資料数	収蔵概数
書籍	3780	744	1213	1957		49110	61801
文献	2406	0	2406	2406	開架図書9300冊、雑誌72件の整備、書籍レファレンス、コピーサービス(有料)、蔵書点検49000点、学術雑誌製本686冊、ニュースレターの整理、図書整備3800冊	32260	38964
雑誌	588タイトル	181タイトル	407タイトル	588タイトル		1775タイトル	
小計	6186と588タイトル	744と1819タイトル	3619と407タイトル	4363と588タイトル		81370と1775タイトル	100765

映像資料	2004年度					累積		
	登録数	撮影数	寄贈数	提供数	受入総数	整理状況・作業内容・公開など	登録資料数	収蔵概数
静止画資料	0	6831	0	38389	46220		75766	
内訳	昭和史写真コレクション	0	0	38276	38276	スキャニング、テキスト入力作業	0	静止・動画併せて150000
	滋賀水生生物調査グループ	0	4343	0	4343		0	
	水草	0	2488	0	113	2601	0	
	魚類フォトCD	0	0	0	0	1000	75766	
動画資料	0	0	0	0	0	DVD(デジタル化)編集作業1500点	0	
小計	0	6831	0	38389	46220		75766	150000

(2) 寄贈者および提供者一覧

敬称省略(点数)

【地学標本】

化石標本： 飯村 強(1) 北川陽一郎(235) 北林栄一(113)

岩石・鉱物標本： 飯村 強(1) 岡村喜明(192) 黒川眞孝(25) 杉野和彦(5) 鈴木保光(4)
中沢和雄(14) 森 健(929)

【植物標本】

さく葉標本： 安藤義範(10) 佐治達三(6)

菌類標本： 小原寿子(5)

【動物標本】

脊椎動物標本： 永野麻也子(2) 平尾 武(1)

(鳥類標本)： 黒川眞孝(3) 松川郁子(1)

無脊椎動物標本： 松本典子(6)

【動物標本】

魚類標本： 石田未基(1) 上原千春(1) 尾形比呂哉(9) 佐々木剛(5)

うおの会「共同研究」： 遠藤眞樹(2) 佐藤智之(42) 高田昌彦(10) 鎗野健太郎(1)

昆虫標本： 石田未基(1) 上原千春(205) 大川 聡(2) 佐々木 剛(181) 東 奈津子(12)

石田未基(9) 上原千春(67) 遠藤眞樹(3) 桐村信行(521) 黒田智生(4) 佐々木 剛(98)

杉野由佳(12) 関 慎太郎(3) 高橋和征(60) 中川 優(7) 長太伸章(25) 南 尊演(2)

山内英治(2) 吉居晴美(3) 初宿成彦(7)

貝類標本： 上原千春・佐々木 剛(2) 内田臣一(1) 梶谷 崇(4) 金尾滋史(10) 小林正典(4)

柴山弘史・吉川真一郎(11) 清水良治(1) 高橋 通(3) 田中政之(4) 中山晴司(1)

西 邦雄(5) 人美友幸(2) 増田 修(48) 水上不二夫(1)

1998年度生き物総合調査： 石井秀憲(8) 江尻清子(7) 中谷成一(1) 西迫 尚(1)

本田典子(1)

滋賀淡水貝類研究会： 石田未基(51) 上西 実・梶谷 崇(1) 岡田 隆(12) 佐藤智之(25)

長田智生(19)

姫路市立水族館(2)

甲殻類標本： 上原千春(8) Wu ShuPing(2) 大高明史(4) 田中 晋(74) 佐々木 剛(7)

遠部 卓(1) 布村 昇(5)

「田んぼの生き物調査」はしかけグループ(138)

無脊椎動物標本： 上原千春(3) 佐々木 剛(3) 高田昌彦(1) 本田(2)

宮川よし子・宮川麻里佳(2)

微生物標本： 成田哲也(3920)

【歴史資料】

滋賀県水産関係資料：小西典子(28)

近江名所絵葉書他：村上幸雄(42)

【図書資料】

民俗関係書籍：橋本鉄男(5647)

昆虫関係書籍：村山修一(22)

書籍：番野 剛(13) 奥田道廣(2) 岡田明彦(2) 音居友三(1) 河合典彦(1) 河野 甲(1)
御勢久右衛門(1) 高橋順之(2) 高木弘重(2) 細川修平(2) 山本喜三雄(4) 市川義夫(2)
支岐常正(1) 小林秀昭(1) 上野和男(1) 森 健(1) 石田志朗(1) 草川敬三(2)
松浦俊和(1) 鷹羽 稔(1) 渡邊豊太郎(1) 南 尊演(1) 日比繁一(1) 富田克敏(2)
鋒山正男(1) 野崎進之助(1) 林 定信(1)

【映像資料】

静止画資料：山田康幸(44) 右川洋一(36) 佐藤智之(32) 安川浩史(1)

(3) 購入資料一覧

	資料名	点数	資料形態	内容等
歴史資料	近江坂田郡筑摩神社祭礼行列図	1点	卷子	年代：明治16(1883)年写
	近江国之図	1点	貼継	年代：安永8(1779)年写
	近江国大津代官石原同心佐久間家旧蔵写図	12点	貼継	年代：江戸後期写

(4) 水族繁殖生物

種 名	学 名	個体数
日本産魚類		
コイ科		
モツゴ	<i>Pseudorasbora parva</i>	200
ウシモツゴ	<i>Pseudorasbora pumila sp.</i>	470
シナイモツゴ	<i>Pseudorasbora pumila pumila</i>	430
ホンモロコ	<i>Gnathopogon caeruleus</i>	350
タモロコ	<i>Gnathopogon elongatus elongatus</i>	150
デメモロコ	<i>Squaliclus japonicus japonicus</i>	170
ヒナモロコ	<i>Aphyoypris chinensis</i>	340
アブラヒガイ	<i>Sarcocheilichthys biwaensis</i>	82
シロヒレタビラ	<i>Acheilognathus tabira tabira</i>	160
ヤリタナゴ	<i>Tanakia lanceolata</i>	336
イチモンジタナゴ	<i>Acheilognathus cyanostigma</i>	132

スイゲンゼニタナゴ	<i>Rhodeus atremius suigensis</i>	45
タナゴ	<i>Acheilognathus melanoguster</i>	76
カネヒラ	<i>Acheilognathus rhombeus</i>	30
アカヒレタビラ	<i>Acheilognathus tabira subsp. R</i>	117
ゼニタナゴ	<i>Acheilognathus typus</i>	128
ニッポンバラタナゴ	<i>Rhodeus ocellatus smithi</i>	240
ワタカ	<i>Ischikauia steenackeri</i>	464
アブラボテ	<i>Tanakia limbata</i>	155
メダカ科		
メダカ	<i>Oryzias latipes</i>	650
トゲウオ科		
ハリヨ	<i>Gasterosteus microcephalus</i>	524
ムサシトミヨ	<i>Pungitius pungitius subsp.</i>	245
ハゼ科		
アオバラヨシノボリ	<i>Rhinogobius sp. BB</i>	650
外国産魚類		
コイ科		
ヘミクルター・レウキスクルス	<i>Hemiculter leucisculus</i>	200
オオタナゴ	<i>Acheilognathus macropterus</i>	432
コウライハス	<i>Opsariichthys uncirostris bidens</i>	241
トンキントゲタナゴ	<i>Acheilognathus tonkinensis</i>	174
オオタナゴ	<i>Acheilognathus macropterus</i>	70
ノーザンファットヘッドミノー	<i>Pimephales promelas</i>	155
メダカ科		
ランプリクティス・タンガニカヌス	<i>Lanprichthys tanganicanus</i>	205
カワズズメ科		
ネオランプロローガス・ブリシャルディ	<i>Neolamprologus brichardi</i>	50
ネオランプロローガス・オケラータス	<i>Neolamprologus ocellatus</i>	6
昆虫類		
タガメ	<i>Lethocerus deyrollei</i>	52
ゲンゴロウ	<i>Cybister japonicus</i>	1
クロゲンゴロウ	<i>Cybister brevis</i>	40

(5) 資料の利用

1) 資料の貸出

月	日	貸出先	資料内容	利用目的	備考
4	3	テレビ東京	モロコとりの小地曳網 沖島地曳網漁	テレビ番組内にて沖島の漁師の説明として使用	
4	7	びわ湖を守る水環境保全県民運動	魚類3点	びわ湖会議機関誌「H2O No.3」中面 2色面にて使用	デジタルデータ (Webページより取得)

4	3	京都新聞	テナガエビ	テナガエビに関する記事に使用	デジタルデータ
4	12	社団法人 農村環境整備センター	植物4点	「環境との調和に配慮した調査計画・設計の手引き」の参考資料作成のため	デジタルデータ
	魚類20点				
	アメリカザリガニ				
	ウシガエル				
		スズメ			
4	16	水のみぐみ館「アクア琵琶」	ニゴロブナ	「ビワズ通信」春号掲載のため	デジタルデータ
5	17	国土交通省 中国地方整備局 福山河川国道事務所	カワヨシノボリ	国土交通省発行の報告書を国土交通省ホームページにて公開	転載
6	12	福岡市環境局保健環境研究所	魚類3点	環境学習施設「まもるーむ福岡」の展示の中で移入種問題として取り上げ、説明に利用	デジタルデータ
5	26	日野町教育委員会	鳥類 20種 各1点	「近江日野の歴史」第1巻 自然・古代編（平成16年10月末刊行予定）の本文および付録CD-ROMに掲載するため	デジタルデータ
5	26	東近江地域振興局	オリジナルポスター「琵琶湖&川の魚」	平成16年度実施の農業・農村体験学習事業における子供向けパンフレットの下敷きとして利用	デジタルデータ
6	9	竹村 元嗣	魚類4点	水口町主催 環境フェスタにおける講演での呈示資料として利用	デジタルデータ
6	12	滋賀県政策調整部広報課	オリジナルポスター「琵琶湖&川の魚」	小学生向け冊子「わたしたちの滋賀県」（平成16年度版）への掲載	デジタルデータ
6	12	東浅井子どもセンター事務局	魚類13点	子ども情報誌「ぎゃざぁー」への掲載	デジタルデータ (Webページより取得)
7	16	国立科学博物館	織毛虫写真(未登録資料)	国立科学博物館新館二期展示	デジタルデータ
7	3	嘉田 由紀子	前野コレクション (古写真)	学芸出版社刊「いい川づくり(仮称)」のための嘉田執筆章(第5章)での利用(2004年7月発行)	デジタルデータ
			古谷コレクション (現在写真)		デジタルデータ
7	16	独立行政法人 水資源機構	ニゴロブナ	水資源機構 広報誌「水とともに」9月号 表3に掲載し水辺の生物の大切さを訴える	デジタルデータ
7	22	国土交通省近畿地方整備局	私とあなたの琵琶湖アルバムより	水のみぐみ館「アクア琵琶」企画展～「水辺の環境展～生命のゆりかご、びわ湖を守る～」2004年7月21日～8月31日に使用	デジタルデータ
			魚類写真		
7	29	水のみぐみ館 アクア琵琶	前野隆資コレクション	南郷洗堰完成100周年企画展のため	デジタルデータ
			田中三郎コレクション		

7	30	社団法人 農業土木学会	魚類	「環境との調和に配慮した事業実施のための調査計画・設計の手引き」(仮称)第1編及び第3編への転載	デジタルデータ
			貝類		
			葉脚類など		
			甲殻類		
			両生類		
			植物3点		
8	3	子どもエコクラブ「おばたん」事務局	魚類15点	地域の子供たちによる川の生き物調査での資料として使用	デジタルデータ
8	6	読売新聞	ハリヨ♂ハリヨ♀	記事として掲載	デジタルデータ
8	10	近江八幡市	沖島の港近くの道と家並みの写真	『近江八幡の歴史』第1巻「街道と町並み」に掲載のため	デジタルデータ
8	25	さいたま川の博物館	魚類2点	特別展「ナマズ・鯰・なまず大集合!」図録への写真掲載及び写真パネルの展示	デジタルデータ
8	27	滋賀県湖北地域振興局	魚類5点	湖北地域振興局田園整備課主催「第3回ドジョウの学校」で配付資料として利用	デジタルデータ (Webページより取得)
9	3	(株)名鉄エージェンシー	魚類9点	愛知万博 中部千年共生村(滋賀県エリア)展示に利用	デジタルデータ
			鳥類6点		
10	2	(財)日本釣振興会 滋賀県支部	魚類15点	「2004びわ湖釣り祭り」“ハローフィッシング魚とふれあう楽しい釣り体験”展示	デジタルデータ
10	2	八尋 克郎	水生昆虫2点	フォーラム「滋賀県の希少動植物を考える」ならびに「生き物総合調査中間報告書」に使用	
10	28	紀南河川国道事務所調査課	イワナ	熊野川の情報冊子作成のため	転載
10	16	大津市役所 環境保全課内 おおつ環境フォーラム	前野隆資コレクションより	おおつエコ祭り(おおつ環境フォーラム主催)「なつかしの大津」展示に使用	デジタルデータ
10	25	(財)琵琶湖・淀川水質保全機構	ニゴロブナ	水環境情報誌「BY BLUE」で水に関する食文化で「ふなずし」を紹介。「フナズシ」説明用写真として使用	デジタルデータ
10	29	独立行政法人 水資源機構 丹生ダム建設所	魚類7点	広報誌「たかとき川」第33号の中面記事の中で、高時川に見られる魚として掲載のため	
11	9	大学共同利用機関法人 総合地球環境学研究所	別紙リスト	若手研究者(主に大学院生)による琵琶湖研究成果展示物に利用	デジタルデータ
12	15	国土交通省 淀川河川事務所 淀川資料館	セイタカアワダチソウ	淀川の外来種に関する展示パネル作成のため(常設展示)	デジタルデータ

11	14	朝日新聞	ビワヨシノボリ (仮称)	朝日新聞滋賀県版に掲載	デジタルデータ
11	16	独立行政法人 水資源機構	スジシマドジョウ小型種琵琶湖型	水資源機構広報誌「水とともに」1月号表3に掲載のため	デジタルデータ
11	16	(株)名鉄エージェンシー	魚類5点	2005年愛知万博・中部広域交流館展示利用	
11	16	国土交通省 淀川河川事務所 淀川資料館	魚類 5種 両生爬虫類 3種 甲殻類 1種 貝類 2種 水生植物 3種	淀川の外来種に関する展示パネルとしてイベントに展示、その後、常設展示として使用	デジタルデータ
11	16	京都新聞「滋賀新聞情報室」	イサザ	滋賀新聞「旬をおいしく」郷土料理紹介に添える写真として利用	転載
11	16	朝日新聞週刊情報誌「あいあいAI滋賀」	カネヒラ	新聞掲載(近江ひとある記)のため	デジタルデータ
11	20	NHKエンタープライズ21	ハクレン	NHK総合「お昼ですよ!ふれあいホール」の放送に利用	複写
12	15	独立行政法人 水資源機構 丹生ダム建設所	コアユ	丹生ダム発行の広報誌「たかとき川」第33号中面に掲載のため	転載
12	15	滋賀県教育委員会事務局学校教育課長	粟津貝塚の発掘場所 丸子舟 瀬田川洗堰(全開時) 前野隆資コレクション 2種各1点 琵琶湖の主な魚類 琵琶湖のプランクトン	「琵琶湖と自然」五訂版(滋賀県高校生向け環境学習副読本)	デジタルデータ
12	8	あいあいAI滋賀編集室	鳥類21点	朝日新聞「あいあいAI滋賀」連載記事への掲載	デジタルデータ
12	15	国土交通省 河川環境課	アユ仔魚(ヒウオ)	国土交通省河川局の政策の中で河川の環境保全に関して広く一般の方々に知って頂くため	デジタルデータ
12	16	NHK	魚類8点	放送に使用	デジタルデータ
12	16	アインズ株式会社	ワカサギ	アインズ情報誌「2291kakami」に掲載のため	デジタルデータ
12	16	大津びわこライオンズクラブ	魚類27点	京阪電車 石坂線1編成に琵琶湖の魚種を描き「美しい琵琶湖をみんなで守りましょう」のキャンペーンを1~2年間にわたり行うため	デジタルデータ
12	16	読売新聞	マゴイヤマトゴイ	読売新聞で琵琶湖のコイに関する記事に使用	デジタルデータ

1	8	嘉田 由紀子	前野コレクション 大橋コレクション 藤村コレクション 古谷コレクション	河川協会発行「河川文化」30号内「やさしい川、こわい川」に掲載のため	デジタルデータ
1	15	きしわだ自然資料館	コウガゾウ全身骨格プリント画像 カズサジカ左角前頭骨一部画像 ウマ類左上腕骨画像 ムカシマンモスゾウ左下第2大臼歯画像 トウヨウゾウ右上第2大臼歯画像 ヘビウ上腕骨画像7点	きしわだ自然資料館発行冊子「キシワダワニとそのなかまたち～化石でたどる関西400万年」の掲載のため	デジタルデータ
1	19	瑞穂市役所	ハリヨ	広報誌のハリヨ紹介欄に使用するため	デジタルデータ
1	21	滋賀県水政課	ニゴロブナ オリジナルポスター「琵琶湖&川の魚」	冊子「滋賀の環境」の作成のため	デジタルデータ
1	27	京都府企画環境部環境企画課	静止画資料（魚類） 静止画資料（爬虫類）	小学生向き環境啓発冊子「環境まなぶっく」（2005）作成のため	転載
2	10	アインズ株式会社	魚類2点	アインズ(株)が発行している地元情報誌（2291KaKami）3号の「滋賀食文化」にモロコを特集するため	デジタルデータ
2	16	福山河川国道事務所	カワヨシノボリ	芦田川河川整備計画の策定（委員会資料並びに HPへの掲載）	転載
2	25	秋田県立男鹿水族館 GAO	アユモドキ（成魚） アユモドキ（卵仔魚） アユモドキ人工採卵風景	平成16年度春期企画展「春が来た！ドジョっこ、フナっこ、コイっこ展」で希少生物の資料展示パネルを作成するため	デジタルデータ
2	28	関西国際広報センター	「琵琶湖治水利水の歴史（明治以降）」 「日本の十字路琵琶湖水運の歴史」	広報ビデオ「関西KANSAI～The Essence of Japan～」制作のため	琵琶湖空撮、情景など
3	10	自然調査委員会（飯水教育委員会内）	魚類5点	児童向け科学読み物「千曲川」への掲載	デジタルデータ
3	10	びわ湖を守る水環境保全県民運動	カミツキガメ	びわ湖会議機関誌「H2O」の外來生物のコラム欄に使用	デジタルデータ
3	15	独立行政法人 水資源機構	タカハヤ	水資源開発機構広報誌「水とともに」5月号表3に掲載のため	デジタルデータ
3	17	滋賀県農政水産部農業流通課	滋賀県産シカ頭骨	ニホンジカによる農作物被害防止対策の手引きへの掲載	

3	30	財団法人 琵琶湖・淀川水質保全機構	オオクチバス	機関誌「BY BLUE」16号(4月発行予定)において水と食文化を紹介するページにブラックバスを食べられる魚として紹介するため	デジタルデータ
3	24	毎日新聞	スナヤツメ	毎日新聞3奈良面に連載中の「吉野川物語」のカット写真に使用	転載
3	30	(株)環境総合テクノス	魚類4点	都市再生プロジェクト「琵琶湖・淀川水域の再生」計画書およびその概要版に使用のため	デジタルデータ (Webページより取得)

2) 資料の譲与

【水族】	タモロコ	20点	千歳サケのふるさと館
	ビワマス	20点	千歳サケのふるさと館
	ニッポンバラタナゴ	20点	志摩マリンランド
	ニッポンバラタナゴ	50点	姫路市立水族館
	アユモドキ	50点	水道記念館
	ケユギョ	3点	さいたま水族館
	ロングイヤーサンフィッシュ	20点	なかがわ水遊園
	コクチバス	5点	宍道湖自然館
	オスフロネームス・グーラミィ	1点	若狭たかはまエルどらんど
	マゴイ	4点	独立行政法人水産総合研究センター 養殖研究所
	ハリヨ	35点	宮津エネルギー研究所水族館
	ヒナモロコ	10点	名古屋港水族館

3) 特別観覧許可

2004年度には、以下のとおり特別観覧を行った。

<映像>

月	日	貸出先	資料内容	利用目的
5	14	株式会社 ライフイーエックス	エリ	(株)サボイ発行、食と健康のマガジン「クックル」誌面掲載
9	16	(株)思文閣出版	近江国木津庄検注帳・引田帳 5点	「中世村落の景観と環境」への写真掲載
9	5	フォーラム平和・人権・環境	アオコ 3点	合成洗剤問題に関するビデオ制作の資料として
2	21	株式会社 福本事務所	前野隆資コレクション 4点	郷土出版社発行「大津・滋賀の今昔」写真集の本文中に使用
3	22	株式会社 オフィスノベンタ	魚類4点	諫早湾干拓副読本に掲載

<館内閲覧>

月	日	利用者	閲覧内容	閲覧目的	備考
4	15	小浜市企画調整課 歴史遺産振興室	1) 永和3年8月3日、武田重信書状 2) 明德～応永、伝法会談義試講料足算用状 3) 延慶3年12月8日、御室宮令旨	若狭国太良荘史料集成第4巻のための原本照合	
4	22	岩間 敬子	1) 明德～応永、伝法会談義試講料足算用状 2) 生和2年以降、東寺所帯重書案	「山城国上桂庄史料」のための原本照合、史料確認	
6	22	龍谷大学理工学部 宮浦 富保	1) 淡水貝類標本 21点 2) ウズムシ類 1点 節足動物類 4点 3) 昆虫類 4点	学生実習での観察	
6	30	日本テレビ放送網 株式会社	細見新補近江国大絵図	午後は〇〇おもいきりテレビきょうは何の日コーナー「竹生島が国の史跡・名勝に指定された日」に使用	撮影
3	10	滋賀県中学校教育 研究会社会科部会 長	1) 民具(糸車、風呂 他) 16点 2) 藤村和夫コレクション 1点 3) 魚類写真 1点 4) 図録印刷物転載 2点	中学生向け資料集「12歳から学ぶ滋賀県の歴史」への掲載	副読本
3	22	滋賀県総合教育セ ンター	土山町産イルカの下顎骨の化石 1点	小学校理科6年生用デジタル教材への掲載	撮影

(6) 資料の保管

整理された資料を保管する際には、冷凍乾燥、二酸化炭素燻蒸など防虫・防かび対策を行った後に、収蔵庫へ収納している。また、収蔵資料が長期間にわたり安全で良好な状態に保てるよう、目視による資料チェックや保存液の補充などを行い、収蔵庫の適切な保存環境を維持するため、収蔵庫内の温湿度管理、害虫対策として定期的な清掃とトラップ調査を行っている。

温湿度管理	各収蔵庫定点観測を実施 時間ごとに計測し、全データを保存。 温湿度の変化を年間を通して把握し、環境の基準を設定する。
定期清掃	月1回第1金曜日に実施
生物環境調査	害虫トラップ調査3回 2004年6月25日～7月10日 2004年11月2日～11月16日 2005年3月10日～3月24日

(7) 燻蒸

琵琶湖博物館では、資料を安全に長期間保管し活用していくために、年に1回収蔵庫の燻蒸を行い、収集した資料や活用後の資料については収蔵庫への搬入の前に、燻蒸庫での燻蒸を随時行っている。琵琶湖博物館には、大型・小型の2台の燻蒸庫があるが、2005年1月にはそれまで燻蒸に使用されていた臭化メチル製剤(エキボン)が使用禁止になることにともない、大型燻蒸庫は沃化メチルガス(アイオガード)と炭酸ガスの併用が、小型燻蒸庫は炭酸ガス処理が行えるよう改修を行った。併せて、冷凍処理による殺虫を行うための冷凍庫の導入を行った。

2004年度の燻蒸実施状況は以下の通りである。

○収蔵庫燻蒸

- ・実施期間：2004年9月4日～10日
- ・実施収蔵庫：民俗収蔵庫1、動物収蔵庫、特別収蔵庫、環境収蔵庫、一時保管庫
- ・使用ガス：エキボン

○大型燻蒸庫燻蒸

- ・実施回数：5回
- 内訳 エキボン1回、アイオガード2回、炭酸ガス2回

○小型燻蒸庫燻蒸

- ・実施回数：4回
- 内訳 エキボン1回、炭酸ガス3回

○冷凍処理 随時

(8) 資料評価委員

博物館として重要な資料の購入や受贈にあたって、博物館資料としての学術的評価と価格評価を行うため、あらかじめ選定しておいた33名からなる資料評価者名簿をもとにしながら資料評価委員を選任し、資料評価を依頼している。

5 展示活動

2004年度は、常設展示の展示物や情報機器の更新、展示手法の改善を行い、常設展示の内容を発展させた関連事業を行った。また、次のような企画展示、水族企画展示、ギャラリー展示、水族展示イベントを開催し、関連事業を展開した。

(1) 常設展示の主な更新

1) A展示室

「博物館の地下をさぐる」 ボーリング調査の記念写真撮影用のヘルメット・上着・長靴を設置
(小泉 2004/9/21)

「琵琶湖のおいたち」 魚類樹脂包埋標本の一部を愛知万博へ貸し出し(武部 2005/1/17~2005年秋まで)

2) B展示室

「湖と漁師」 おこないの実物展示を写真展示等に変更(用田 2004/7/22)

「湖畔の都と万葉集」 展示している日本書紀を別バージョンに(橋本 2004/10/25)

「世界の考古学者からのメッセージ」 モニター変更とパウチ展示の追加(牧野(久))

「輸送の主演 丸子船」 映像中心に展示更新(牧野(久) 2004/12/1)

収蔵ケース 船模型の展示に更新(牧野(久) 2004/12/6)

3) C展示室

「身近な環境をみつめる人びと」 活動紹介パネルの一部を「琵琶湖を守る1万人の誓い」
(滋賀県自然環境保全課)に変更(牧野(久) 2004/4/26)

ミニ展示 赤野井湾の浚渫(滋賀県湖南地域振興局)(武部 2004/5/16)

「琵琶湖盆地の風と気象」 「ひまわり観測の現況について」パネルの追加(戸田 2004/4/28)

「琵琶湖地方の生き物情報」 フィールドレポーター 蝶の調査結果に更新
(楠岡・フィールドレポーター 2004/8/24)

「生きものコレクション」 プランクトンコーナーの展示を更新(楠岡・大川 2004/9/29)

「農村のくらし」 展示交流員が富江家のある本庄町を訪問した成果の紹介
(展示交流員・榊永 2004/12)

魚類の標本の一部 愛知万博へ貸し出し(武部 2005/1/17~2005年秋まで)

「身近な環境をみつめる人びと」 草津市立常磐小学校の学習成果を展示
(谷口 2005/2/9~2/28)

4) 水族展示室

コイヘルペスパネルの設置 各所 (孝橋 2004/6/15)

5) 屋外展示

生活実験工房前 雨水利用展示(滋賀県湖南地域振興局)(牧野(久) 2004/5/1)

6) ディスカバリー・ルーム(榊永・磯野・堀田)

ミニ展示 5月の節句関連展示 (2004/5/10)

ミニ展示 たなばた展示 (2004/7/8)

「ミクロの目」 スズメノエンドウとカラスノエンドウに更新 (2004/5/15)

「ミクロの目」 博物館のまわりで見つけたもの (2004/7/1)

「ミクロの目」 咽頭歯を見つけてみよう (2004/10/1)

カウンター ウシガエルのおたまじゃくし (2004/6/1)

カウンター アルビノの蛙のおたまじゃくし、タニシ、ドジョウ (2004/7/1)

カウンター カイコ (2004/8/31)

カウンター 次年度企画展 (オサムシ) 関連展示 (2004/11/10～)

カウンター 節分の工作 (2004/1/28～2/3)

「おばあちゃんの台所」 ゆかた展示 (2004/7～)

「おばあちゃんの台所」 着物展示 (2004/9～)

「おばあちゃんの台所」 お正月展示 (2004/1/4～)

「世界の子どもたち フィンランド」 フィンランドの夏休み (2004/7/21～10/31)

「世界の子どもたち フィンランド」 フィンランドの冬休み (2004/12/14～2005/5/31)

「ディスカバリー・ボックス」 福笑い・すごろくBox (2004/1/4～)

「音の部屋」 日本の楽器 (2004/1/6～)

(2) 第12回企画展示「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」

1) 概要

期 間：2004年7月17日(土)～11月23日(火・祝) 計113日間

場 所：琵琶湖博物館 企画展示室

観覧料：大人400円(300円) 高校生・大学生300円(230円) 小学生・中学生200円(150円)

(カッコの中は20人以上の団体料金)

観覧者数：計50,914人

展示設計業者：(株)日展

担当者：主担当者 芦谷 美奈子

副担当者 布谷 知夫・山川 千代美

進行管理 高橋 啓一

2) 内容・特徴

① 展示のテーマ

植物は、動物と比べると静的な受身のイメージがあるために、その生育については非常に分かりにくい。しかし植物は体を動かすことができないために、実は動物以上にその子孫を残すためには、さまざまな工夫をし、劇的に「動く」場合がある。

そのように植物が繁殖のために多様な生き方をしていることを示すことで、植物の静的なイメー

ジを払拭し、そういう目で植物を見ることで、身近なフィールドの植物にも興味や共感を覚えられるようにした。

② 展示会の対象

ディスカバリー・ルームで培ってきたノウハウを使いながら、子どもを主な対象とし、同時に普通の大人の人に対しても、意外性があるような植物の展示会とした。

③ 展示の手法

子どもたちが楽しく展示を体験できるような、ハンズオンの手法を多用した展示室を計画した。

④ 展示のストーリー展開

「プロローグ 植物は動けない」

「のびる」

植物は他の植物よりも少しでも早く、高く成長して太陽の光を受けようとしている。植物が生長する様子や早く生長するための工夫などを紹介した。

「ひらく」

花は花粉のやり取りをして、種子を作るためにある。花粉を効率的に別の花に届けるために、花はあらゆる物を利用し、工夫を行っている。その多様な例を紹介した。

「ひろがる」

植物は作り上げた種子をより確実に、自分にとって都合のいい環境に運び、その場所で発芽をしようとしている。風や動物を利用して遠くに種子を運ぶために、植物が行っている多様な工夫を紹介した。

「エピローグ くりかえされる命」

⑤ もうひとつの目的

この企画展示では、上記のような目的とともに、ハンズオンの展示手法の評価を行うというねらいもある。企画展示の現場で、展示の手法を変えて来館者調査の方法により評価し、より効果の高いハンズオン展示とはどのようなものかについて研究するという実験的な目的である。これは、琵琶湖博物館開館以後、共同研究として取り組んできた「ハンズオン研究会」の研究のまとめのための検証の場として、今回の企画展示を位置づけるという意味である。

3) 展示項目

① エントランス

展示室への誘い導線（ツル植物）

② プロローグ

根っこの世界 / ムクノキの根っこ / 根っこサンダル / 植物は動けない(映像)

③ のびる 光を求めて繁殖するための体づくり

アラカシの新芽(写真配置) / 速さが勝負 15メートルのクズ / クズに覆われたのは誰 / 速さが勝負 タケノコとヒトの子 / タケの繁殖部秘密 / 春一番に咲くために タンポポ絵日記とロゼット / 高く、大きく、強く 春日スギ / 様々な木の材質 / 葉っぱはどこにつく

葉の光利用 樹冠パズル、葉っぱパズル / いろいろな葉っぱ / いよいよ開花 花芽

④ ひらく 花を咲かせて花粉を媒介し結実する

花から花へ / 植物園はレストラン / コオニユリ / ノアザミ (映像) / レンゲ / オオマツヨイグサ (映像) / ベゴニア / マムシグサ / アベリア / ヤブツバキ / 花の構造と役割 君ならどんな花を咲かせる / 自分で花を作ってみよう パソコンで / 花の色 / 花の香りと蜜の味 / 虫が見た花 / もしも虫が来なかったら ツユクサ / 風に乗せて スギ / 水にゆられて ネジレモ

⑤ ワークショップコーナー

⑥ ひろがる 確実に育つ場所に種子を運んで発芽する

ひつついたね オオオナモミ / はじけたね / フワりとんだね / 動物のふんだね / これもアリだね / 生命のタイムカプセル / 大賀ハス / 植物は語る / 分身を作って増える / 運命のドングリコロコロ

⑦ エピローグ

植物のQ and A / 植物の不思議を探せ / あなたはどんな植物 / 繰り返される命 (映像) / アンケートの木



会場正面



ひろく 花を咲かせて花粉を媒介し結実する

4) 関連事業

① 市民講座「植物の不思議・なんでやろう」

会場：草津市まちづくりセンター 時間：18:30~20:30

植物は歩き出すことはしない。でも動かない代わりに、自分の子孫を残すために、花を咲かせ、種子を散布するときには、驚くほど巧みな工夫をしている。そういう植物の暮らしの中の不思議について5回にわたって話をした。

7月21日(水) 第1回：植物のくらしとかたち

7月28日(水) 第2回：のびる・光をもとめて

8月4日(水) 第3回：ひろく・種子をつくるために

8月11日(水) 第4回：ひろがる・確実に子孫を残すために

8月18日(水) 第5回：水の中の植物の不思議

② 博物館講座「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」

会場：琵琶湖博物館セミナー室 時間：14:00～16:00

植物は歩き出すことはしない。でも自分の子孫を残すために、花を咲かせ、種子を散布するときには、驚くほど巧みな工夫をしている。そういう植物の暮らしについてお話をした。

7月24日(土) 第1回：のびる・光を求めて

7月31日(土) 第2回：ひらく・種子を作るために

8月7日(土) 第3回：ひろがる・確実に種子を残すために

③ 観察会等

4月29日(木・祝) 「春いっぱい朽木で見つけてふれあおう」 朽木村朝日の森

5月2日(日) 「春の棚田の観察会」 伊吹町小泉

8月8日(日) 「夏のスキー場の植物観察会」 今津町箱館山

10月17日(日) 「秋の棚田の観察会」 伊吹町小泉

④ 体験学習の日プログラム

10月9日(土)・23日(土) 「草木染めをしよう」 琵琶湖博物館実習室

⑤ ワークショップ

ワークショップコーナーで不定期にワークショップを行った。このワークショップには「はしかけ」植物観察グループに協力してもらった。内容は、カラスムギ、ドングリ、飛ぶたね、蜜の味、葉の形、マツボックリなどを組み合わせて自由に行った。

7月18日(日)、19日(月・祝)、21日(水)、25日(日)、28日(水)、30日(金)、

8月1日(日)、11日(水)、15日(日)、21日(土)、29日(日)、31日(火)、

9月10日(金)、12日(日)、14日(火)、19日(日)、23日(木・祝)、25日(土)、

10月8日(金) 計19回

⑥ 博物館フォーラム 「展示室におけるコミュニケーション・展示と人・人と人」

ここ数年間、博物館についての議論が広く行われるようになり、さまざまなテーマでシンポジウムなどが行われるようになってきた。しかし、そうした中で、展示室という場を対象とした議論は比較的少なかったように思われる。

展示は博物館利用にとっての入り口であるだけでなく、展示物と人、そして展示室での人と人とのコミュニケーションのための装置としての働きを持ち、今後の様々な可能性を秘めたものであると考えられる。

このフォーラムでは、博物館の展示をいくつかの視点から見つめなおし、その可能性について議論をしてみたいと考えた。そのため、多人数の報告者とともに比較的少人数での議論参加者が集まり、報告者だけではなく、参加者からも、現場での事例などを十分に出してもらい、全体として深い議論ができるような場を設定した。

- ・日 時：2005年2月14(月)～15日(火)
- ・場 所：琵琶湖博物館会議室
- ・参加者：報告者9名 議論参加者(含報告者)26名
- ・プログラム

2月14日 13:00～17:00

主旨説明 布谷 知夫(琵琶湖博物館)「現在の博物館の中の展示の位置」

基調講演 上田 信行(同志社女子大学)「Playful learning meets children's museum」

小テーマ「展示室での人と人とのコミュニケーション」

井島 真知(林原自然科学博物館)

「なぜコミュニケーション? どんなコミュニケーション? ダイノソアファクトリー
でのプログラムの例から」

佐藤 優香(大阪大学)

「『つくること』を通して増幅されるコミュニケーション」

討 論

2月15日 9:00～12:00

小テーマ「展示と人とのコミュニケーション」

芦谷美奈子(琵琶湖博物館)

「琵琶湖博物館企画展『のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき』における
ハンズ・オン展示手法比較と展示評価の試み」

久留島 浩(国立歴史民俗博物館)

「歴史展示だってできるコミュニケーション」

坂本 昇(伊丹市昆虫館)

「すすんで展示を経験してもらおう」

討 論

2月15日 13:00～17:00

小テーマ「展示の活用」

坂東 元(旭山動物園)

「心に響く展示を目指して」

坂本 和弘(東京都恩賜上野動物園)

「葛西臨海水族園における子どものための展示を活用した催しと評価の試み」

鈴木 有紀(愛媛県美術館)

「すでに出来上がっている展示を活用する～国宝鑑真和上展での試み～」

討 論

総合討論

(3) 水族企画展示 「植物のある暮らし」

期 間：2004年7月13日(火)～9月30日(木)

場 所：琵琶湖博物館 水族企画展示室

観覧料：常設展示観覧券で観覧

担当者：秋山

1) 概要

展示する水生植物

滋賀県産：ネジレモ・セキショウモ・クロモ・センニンモ・ササバモ・オトメフラスコモ・ヤナギモなど

外国産：オオカナダモ・コカナダモ・ホテイアオイ・ポタンウキクサなど

琵琶湖における水生植物利用の歴史（パネルなどで展示）

琵琶湖南湖の水草分布状況（パネルなどで展示）

アクアリウムディスプレイ（近年流行の憩いのディスプレイ）



「植物のある暮らし」入口風景

(4) ギャラリー展示

1) 第3回博物館資料展（民俗資料・その3）「糸を紡いで布を織る－民具の復元・再現・体験－（Weaving: Fiber to Thread to Cloth - Crafting and Using the Traditional Tools-）」（「国際博物館の日」記念事業）

期 間：2004年4月23日(金)～6月10日(木) 計43日間

場 所：琵琶湖博物館 企画展示室

観覧者数：18,320人（一日平均 約426人）

担当者：主担当 中藤容子

副担当 國分政子・歴史資料整理室

（細川真理子・辻川智代・牧野久実・用田政晴）

協 力 琵琶湖博物館はしかけグループ「中世のおんなたち」

（立石文代・前田雅子・佐藤義信・辻 勝彦ほか）

① 概要

本館に収蔵する民具資料を公開することで、資料整理・研究の成果を資料提供者・調査者をはじめ一般に還元することを目的として開催している民俗資料展の3回目。今回はそれに加え、収蔵民具をもとに民具を復元製作し動きを再現し、人々と共に昔の布づくりを体験することも目的とし、展示室内に収蔵資料の展示だけでなく機織り体験コーナーを設置し、はしかけグループ「中世のおんなたち」の協力のもと体験講座を運営した。

② 関連行事

a) 体験学習の日プログラム「機織り体験をしてみよう」

日 時：4月24日(土) 13:30~15:00

参加者：計30名

はしかけグループ「体験学習の日」と「中世のおんなたち」の共同で、学芸職員が企画して行う新しい試みであった。

b) 糸を紡いで布を織る体験講座

開催日：4月28日(水)、5月2日(日)、8日(土)、9日(土)、12日(水)、15日(土)、16日(日)、19日(水)、23日(日)、26日(水)、30日(日)、6月2日(水)、6日(日)、9日(水)
(計14回開催)

参加者数：受付29名 のべ参加者84名

はしかけグループ「中世のおんなたち」とともに、その活動を一緒に行うメンバーを募集。展示期間中にもメンバーを受け付けた。

c) マスコミ取材

京都新聞 読売新聞 びわ湖放送 滋賀ケーブルネットワーク NHK

d) 来館者アンケート

開催期間中アンケート調査を実施したが、中間集計の結果、博物館全体に対するアンケートと誤解した回答が相当数含まれていたため(5月16日(日)までの回答239通のうち47通)、5月18日(火)以降、質問内容を一部、変更した。(以下、5月16日以前を第1期、5月18日以降を第2期とする。)

・回答数 全期間を通じて471通(第1期239通+第2期232通)

・回答の結果

展示を知ったきっかけ(第1期のみ)

ポスター・チラシ 3 新聞・広報 5 インターネット 8

学校 103 博物館に来て 102

その他(はしかけの誘い 2、子ども会 2、温泉にあったパンフレット 1)

一番印象に残った展示(第1期、第2期共通)

全般 75(第1期13+第2期62) 例:たくさんいろいろな種類、名前がある、昔のものがよく残っていた。木製。きれい。昔は大変。県内にこんなものがある。こんなもので布をつくるんだなあ。田舎を思い出した。など

機 89(44+45) うち、高機 20(8+12) 地機 2(1+1) 各種の機 6(5+1)

地機コーナー 8(4+4) 機の実演 13(2+11)

布・完成品 84(43+41) うち、着物 35(20+15) はしかけ作品 12(7+5)

蚊帳 9(6+3) 網織紬 1

さまざまな用具 58 (39+19) うち、糸車 41 (26+15) 糸巻き・糸枠 5 ヒ 6 (5+1)
 糸取機 4 (2+2) 綿繰機 2 (1+1)
 ビデオ 40 (18+22) うち、浜ちりめん 13 (10+3) 弦楽器 1
 カメ、染め 22 (16+6) うち、染め 2
 糸、糸の材料 14 (6+8) うち、糸の材料 7 (4+3)

その他、展示内容についての感想

－資料展に対して好意的 189 (101+88)

例：面白かった。発見した。すごい。なつかしい。やってみたくなった。

－解説不足、実演体験がない、楽しくない、展示不足 56 (26+30)

例：琵琶湖博物館らしくない。

－その他 照明が暗い 2

糸や布をつくっているところを見たり自分でつくったりしたことはありますか (第2期)

はい 67 いいえ 163 (無回答 2)

・はいと答えた67通を対象に、

それはいつごろ、どこで、どんな材料で、どんなものを、どうやってつくっているところだったか。

学校でつくった (家庭科の授業、クラブなど)	12
趣味でつくった	13
実用で (家の手伝い、つくろいものなど)	8
博物館等の実習でつくった	7
大人がしていたのを見た	6
施設見学で見た	4
テレビで見た	6

・いいえと答えた163通を対象に、

自分で糸や布をつくってみたいですか。どんなものをつくってみたいでしょうか。

つくってみたい 147 つくりたくない (つくれない) 6

e) 展示を終了して

・資料展の目的について

資料整理／調査研究の成果を一般に公開するという目的は十分達成されているが、資料提供者、調査者に還元するという点は、年々、難しくなっているのを感じる。(提供者に送付する案内状が配達不能で戻ってくるものが増えている。案内状によって来館されているのは数件程度。) その一方、今回は新しい資料の価値を掘り起こすべく、民具の復元製作をはしかけグループ「中世のおんなたち」と共に行い、地機おりの活動も展示した。これにより、はしかけ活動の紹介、メンバーの増員、全国で同様の活動をやっているグループとのネットワークが生まれ、展示終了後、はしかけ活動は多様化し、「近江はたおり探検隊」として研究会を立ち上げるこ

ととなった。こうした研究、展示、交流が三つ巴となった博物館活動は、当館の中長期基本計画の方向性を先取りする、意義ある成果であると考え。

・資料展のあり方と本館の来館者

展示は、ありったけの収蔵資料を展示し、資料をじっくり見てもらうために、解説は最低限、使い方は絵図の写真パネルで紹介した。アンケート結果によると、多くの来館者がこうした展示からも何らかの発見をして好意的に感じており、実際にはたおりをされている方や研究者からは「このタイプの機の実物を初めてみた」「地機が動くのを初めてみた」という感想も寄せられている。しかし、「琵琶湖博物館らしくない」「もっと説明がほしい」「さわれるものがない」という意見も数多い。こうした来館者に、実物資料の見方をどう伝えていくかは、今後の博物館の課題となるだろう。

2) 「ミクロの世界を探検しようープランクトンの不思議ー」

期 間：2004年12月23日(木・祝)～2005年4月10日(日) (88日間)

場 所：琵琶湖博物館 企画展示室

観覧者数：50,597人 (2005年4月10日の展示期間終了まで)

館内担当者：楠岡 泰・大塚泰介・谷口雅之・大川 聡

① 内容・特徴

展示内容：多くの人が名前は聞いたことがあるが、実物を見たことはないプランクトンの世界を、写真や模型、顕微鏡を通して紹介した。今回の展示では、特にプランクトンの形のおもしろさや不思議な生活史に焦点をあてた。

展示の特徴：このギャラリー展示の最大の特徴は、多くの人々が展示に関与したことである。まず、県内でプランクトンに関心を持っている教員や微小生物の研究者に計画段階から関わってもらい、その意見を元に展示の原案を作った。また、学校の先生を対象にプランクトン調査の研修を行い、これに基づいて先生や生徒にプランクトンの調査をしてもらい、その結果を展示した。さらに、展示物の素材の多くを滋賀県内の研究機関および研究会に負っている。

体験学習との連動も大きな特徴である。展示期間を中心に、顕微鏡観察に基づいてプランクトンの立体模型を作ってもらった体験学習を、子どもたちを主な対象として計4回行い、その作品を展示していった。さらに、来場者に琵琶湖などで採れたプランクトンの顕微鏡写真を撮影してもらい、これを分類群ごとにまとめ直して、「みんなで作るプランクトン図鑑」として展示した。

展示内容については、子どもたちを主な対象としながらも、プランクトンの専門家まで楽しめるように工夫した。以下に主なコーナーを示す。

- ・まったく解説を加えず、プランクトンのさまざまな形や色を楽しんでもらうコーナー
- ・プランクトンの分類や生活史を解説したやや専門的なコーナー
- ・妖怪とプランクトンの形の類似性を示し、プランクトンの形を印象付けるコーナー

- ・顕微鏡を使って生きたプランクトンを観察するコーナー
- ・プランクトンの形について遊びながら学ぶ「プランクトンマスター」コーナー
- ・学校や研究機関のプランクトンに関する研究成果を展示したコーナー

このギャラリー展の開催にあたっては計画段階からさまざまな学校関係者（先生および児童・生徒・学生）、研究者の皆様のご協力をいただいた。協力して下さった個人団体は以下のとおりである。

<出展協力いただいた個人>

浅井 浩、石上三雄、石川雅量、井田三良、一瀬 諭、今井由美子、今安和彦、巖 靖子、大久保義彦、太田滋規、大野泰路、岡村貴司、奥野健太郎、畠田絵美理、木田幹人、木村成子、葛原はづき、熊谷道夫、辻田良雄、辻村茂男、手良村知央、手良村知功、戸田任重、中澤 浩、中村大輔、根来 健、幡野真隆、伴 修平、本宮裕二、本多登美子、真鍋 健、村居利美、村上宣雄、森田光治、森本真実子、山田裕章、横井 彰、横山泰史、若林徹哉

<協力して下さった機関および団体>

大分県立大分舞鶴高等学校科学部生物班、甲賀市立甲南中学校科学部、子どもエコクラブ伯母Q五郎、滋賀県琵琶湖研究所、滋賀県立衛生環境センター、滋賀県立水産試験場、滋賀県立大学、滋賀大学、はしかけ（体験学習の日）、はしかけ（たんさいぼうの会）、ポリテックカレッジ滋賀、余呉町立鏡岡中学校科学部、栗東市立栗東中学校科学部



糸を紡いで布を織る



ミクロの世界を探検しよう

(5) トピックス展示

1) 水族トピック展示

水族展示室内のふれあい体験室前に設置した小型展示水槽をつかって、生まれたばかりの稚魚や話題性のある魚など、常設展示では観察することの難しい水生生物を展示した。内容と期間は以下のとおりであった。

- ・「ホンモロコの稚魚」(松田2004/5/16~6/15)
- ・「ニッポンバラタナゴの稚魚」(松田 2004/8/10~9/5)
- ・「デメモロコの稚魚」(桑原 2004/9/10~10/3)

- 「ワタカの稚魚」(松田 2004/10/5~31)
- 「繁殖期を迎えたカネヒラ」(松田 2004/11/2~21)
- 「ビワマスの卵」(桑原 2005/1/4~23)
- 「中国のタナゴ類」(中島 2005/1/25~2/13)
- 「昔、日本にいた魚」(中島 2005/2/15~3/6)

6 国際交流活動

(1) 「JICA博物館集中コース」の実施

JICAからの委託事業として、国立民族学博物館と共に、「博物館集中コース」を実施した。事務局は国立民俗学博物館が持ち、琵琶湖博物館は企画委員2名を出して、全体の運営にかかわると共に、10名の研修の受け入れを行った。

なお、このJICAの研修は過去10年間にわたり国立民俗学博物館が「博物館技術コース」として行っていたもので、琵琶湖博物館も研修生を受け入れて協力してきたが、今年度から名称と研修内容を変更し、琵琶湖博物館も共催して行ったものである。

1) 研修員

- Ms. Ana Maria CORTES SORANO (コロンビア国立博物館)
- Ms. Fiorella RESENTERRA QUIROS (コスタリカ美術館)
- Mr. KONE Siaka (コートジボアール文化財管理局)
- Ms. Hemmat MOUSTAFA SALEM (エジプト イスラム美術館)
- Mr. Haile BERHE BRU (エリトリア国立博物館)
- Mr. Wodaje Messele DESTA (エチオピア国立博物館)
- Mr. Justin Chukwma NWANERI (ナイジェリア ミナ国立博物館)
- Ms. Elena VEGA Obeso (ペルー チャンチャン遺跡博物館)
- Mr. Mustafa METIN (トルコ アナトリア文明博物館)
- Mr. HO Van Quang (ベトナム クワン・ナム遺跡・文化財保存センター)

2) スケジュール

2004年8月30日 来日

9月13日 開講式

12月3日 閉講式

12月4日 帰国

琵琶湖博物館での研修

9月27日 琵琶湖博物館の紹介 (楠岡)

地域博物館の特徴と資料整備 (布谷)

収蔵庫見学 (布谷)

9月28日 資料の収集方法と理論 (グライガー)

博物館資料の背景にある研究活動 (高橋)

バックヤードの紹介 (高橋)

9月29日 資料の整理と収蔵 (中藤)

能登川町立博物館の見学 (布谷)

10月6日 展示の企画からディスプレイまで (乃村工藝社 鮫島)

琵琶湖博物館の展示の見学 (楠岡)

- 10月7日 企画展示の企画から実施まで（布谷）
 10月13日 交流事業の考え方（牧野(厚)）
 体験学習への参加（西垣・体験学習はしかけグループ）
 10月14日 博物館評価の手法（布谷・楠岡）

3) 個別研修

選択の個別研修には、研修員10名のうちの7名が参加した。

- 参加研修員 Ana Maria CORTES SORANO、Fiorella RESENTERRA QUIROS、KONE Siaka、Hemmat MOUSTAFA SALEM、Justin Chukwma NWANERI、Elena VEGA Obeso、Mustafa METIN
- 個別研修期間
11月15日～18日
- 研修内容（テーマ・地域と博物館）
 11月15日 外来魚の体験学習（秋山・楠岡・青木）
 体験学習の紹介（青木・体験学習はしかけグループ）
 11月16日 ヨシ博物館の見学（布谷）
 伯母川博物館の見学（西垣・楠岡）
 11月17日 プラクトンの体験実習（楠岡）
 ギャラリー展示の準備（楠岡）
 11月18日 MIHOミュージアム・滋賀県立陶芸の森の見学（楠岡）

(2) 海外からの視察

月 日	依頼者 視察団体名	人数	担 当
4月2日	びわこビジターズビューロー 亜東関係協会	7	中島
4月8日	JICE東京国際センター JICA「イラン湿地環境管理コース」	6	グライガー 西垣、前畑、中井
4月16日	滋賀県商工観光労働部国際課 中国共産党中央党史工作者代表団	10	中島
4月25日	WWFジャパン The 1001: A Nature Trustジャパンツアー2004	17	中井
4月27日	ミシガン州立大学連合日本センター 「環境学」インターン	7	グライガー
5月13日	ミシガン大学フrint校	2	グライガー
5月13日	イスラエル博物館エルサレム、ヘブライ大学	2	牧野(久)
5月19日	ミシガン州立大学連合日本センター15周年記念事業参加者	7	グライガー
5月19日	韓国 忠清南道県環境管理課 水管理業務担当者	16	布谷
6月9日	(株)国際水産技術開発 JICA集団研修「持続的増養殖開発コース」	6	グライガー、 松田

6月30日	(米国) Institute of International Education Toyota International Teacher Program	55	楠岡、戸田
6月30日	滋賀県商工観光労働部国際課 JICA青年招聘事業によるフィリピン青年団	28	布谷
7月2日	滋賀県教育委員会事務局学校教育課 平成16年度滋賀県高校生海外相互派遣事業	28	グライガー
7月9日	能登川町教育委員会 (カナダ) テーバー町との交流事業	18	グライガー
7月14日	びわこビジターズビューロー 台湾高校教育旅行	4	中島
8月25日	大阪大学環太平洋大学公開 (APRU) 第5回 Fellows Program	28	グライガー
9月10日、25日	(財)国際湖沼環境委員会 JICA水環境を主題とする環境教育研修	10	楠岡、西垣、谷口
9月12日	JICA 横浜国際センター 平成16年集団「沿岸漁業資源管理」コース	12	布谷
9月12日	JICA中部国際センター インドネシア国「環境情報システム」個別研修	3	中島
9月14日	滋賀県水政課 日中協力水利人材養成プロジェクト2004 準高級幹部・研修管理分野研修	7	用田
10月2日	滋賀県浅井町 オーストラリア ウェントワース町の使節団	11	グライガー
10月7日	滋賀県立大学環境科学部 文部省科研費「アジア型直接支払制度の展望－スイス・日本・韓国の比較制度分析から－」の来日研究者	4	グライガー
10月8日	沖縄県衛生環境研究所 平成16年度(第2回) JICA衛生環境分析技術者IIコース	8	楠岡
10月14日	びわこビジターズビューロー ソウル小学校校長訪日団	16	用田
10月22日	滋賀県水政課 平成16年度ハンガリー国「環境保全」コース	3	布谷
10月26日	JICA東京国際センター 平成16年度マラウイ養殖開発マスタープラン(国別研修)「水産開発」研修	5	前畑
11月10日	環境省環境調査研修所 JICA集団研修「水環境モニタリングコース」	12	グライガー
11月10日	JICA北海道国際センター 平成16年度集団「地域環境保全技術」コース	7	グライガー
11月12日	北九州国際技術協力協会 第5回生活排水対策コース	10	グライガー
11月19日	琵琶湖研究所 「環境とエネルギーを考える講演会」の参加者	17	楠岡
11月23日	関西国際広報センター 第53回KIPPOプレスツアー	15	中島
11月30日	第1回びわこバイオ国際セミナーの講師	5	グライガー
12月14日、17日	UNEP-IETC イラク湿地環境管理支援のための水質管理研修	19	グライガー

1月1日、 3月1日	(財)国際湖沼環境委員会 JICA平成16年度(第15回)湖沼水 質保全研修	12	芳賀、楠岡
1月22日	外務省欧州局 平成16年度NIS諸国青年招聘計画	11	芳賀
1月27日	岐阜市国際室 中国杭州西湖風景名勝区管理委員会日本博物 館視察団	10	高橋
2月1日	びわこビジターズビューロー 台湾・台北駐大阪経済文化辦 事處長一行	5	布谷
2月1日	Korea Maritime Institute	4	桑原、楠岡
2月4日	滋賀県商工観光労働部国際課 リオ グランデ ド スール州 友好代表団	5	楠岡
2月23日	JETRO アジア経済研究所開発スクール	19	スミス
3月2日	びわこビジターズビューロー 韓国インセンティブツアー造 成ファムトリップ	7	用田
3月2日	全国市町村国際文化研修所 JICA・JICE平成16年度国別研 修「タジキスタン市民社会形成セミナー」	11	秋山
3月4日	びわこビジターズビューロー 中国 広東省修学旅行団体	13	用田
3月9日	(中国)無錫市外事辦公室	4	嘉田
3月15日	JICA大阪国際センター 平成16年度「国別：シリア博物館 学導入コース」	8	布谷
3月23日	JICE北海道支店(帯広) 平成16年度「ゼロ・エミッション 型農業・農村環境システム」コース	9	グライガー
3月30日	カリフォルニア大学デービス校, Prof. Charles R. Goldman 一行	4	楠岡

7 印刷物

平成16年度出版物一覧

品名	サイズ	ページ数	発行部数
研究調査報告書23号「みんなで楽しんだうおの会」	A 4	233	2,000
資料目録11号「植物標本4」	A 4	466	900
資料目録12号「植物標本5」	A 4	338	900
業績目録8号	A 4	150	600
年報8号	A 4	124	900
うみんど31号	A 4	8	35,000
うみんど32号	A 4	8	25,000
うみんど33号	A 4	8	25,000
うみんど34号	A 4	8	35,000
うみっこ16号	A 4	4	60,000
うみっこ17号	A 4	4	50,000
もよおしもの案内(2004年度 秋冬編)	A 4		45,000
もよおしもの暦(2004年度 秋冬編)	A 4		1,350
もよおしもの案内(2005年度 春夏編)	A 4		40,000
もよおしもの暦(2005年度 春夏編)	A 2		1,350
企画展示「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」 展示解説書	A 4	64	2,500
企画展示「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」 ポスター	A 2		2,000
企画展示「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」チラシ	A 4		30,000
企画展示「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」 JR駅用ポスター	B 1		100
企画展示「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」 JR駅用チラシ	A 4		20,000
水族企画展示「植物のある暮らし」フィールドガイドブック	A 5	24	10,000
ギャラリー展示「糸を紡いで機を織る」リーフレット	A 4	8	7,500
ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しよう」チラシ	A 4		15,000
ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しよう」ポスター	A 2		1,050
ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しよう」リーフレット	A 4	8	15,000
ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しよう」JR駅用チラシ	A 4		15,000
ギャラリー展示「淡海の川」チラシ	A 4		15,000
ギャラリー展示「淡海の川」ポスター	A 2		1,250
研究発表会「博物館は学びの場となりうるのか」チラシ	A 4		7,500
研究発表会「博物館は学びの場となりうるのか」ポスター	A 2		500
夏休み「自由研究講座」チラシ	A 4		6,000
夏休み「生き物飼いか講座」チラシ	A 4		6,900
展示見学サポートシート	A 4	19種21ページ	76,000
次回企画展示広報用チラシ	A 4		12,000
広報用「琵琶湖&川の魚」カレンダーポスター	A 1		1,800
広報用「琵琶湖&川の魚」チラシ	A 4		140,000

Ⅱ 利 用 状 況

1 平成16年度入館者数

期 間：2004年（平成16年）4月1日～2005年（平成17年）年3月31日

合 計：441,186人 開館日数：310日

1日平均：1,423人

月平均：36,766人

入館者の区分別内訳

単位：人

区 分	個 人 (人)	団 体 (人)	合 計 (人)	構 成 比 (%)
未 就 学 児	55,419	5,126	60,545	13.7
小・中 学 生	34,958	80,271	115,229	26.1
高・大 学 生	5,543	11,919	17,462	4.0
一 般	174,734	73,216	247,950	56.2
合 計	270,654	170,532	441,186	100.0

(1) 総入館者数

年 月	開館日数 (日)	有 料 入 館 (人)				無 料 入 館 (人)								総 計 (人)	1日当り平均 (人)	
		一 般	高大学生	小中学生	有料計	65歳以上	障害者	家族ふれあいサンデー	体験学習	こどもの日	学校行事	その他	無料計			
2004 (H15)	4	26	14,597	3,944	7,760	26,301	405	538	1,112	81		909	4,312	7,357	33,658	1,295
	5	27	26,447	2,477	18,633	47,557	582	927	981	88	585	1,104	6,757	11,024	58,581	2,170
	6	26	17,130	963	9,776	27,869	489	682	1,289	123		2,636	4,415	9,634	37,503	1,442
	7	28	24,711	979	7,115	32,805	553	932	1,157	149		1,661	7,206	11,658	44,463	1,588
	8	30	37,437	2,475	13,412	53,324	627	1,407	798	193		313	10,350	13,688	67,012	2,234
	9	23	18,028	1,413	4,231	23,672	363	1,174	1,374	120		931	5,523	9,485	33,157	1,442
	10	27	17,746	1,282	15,600	34,628	493	1,385	798	69		7,382	5,951	16,078	50,706	1,878
	11	25	14,561	823	6,222	21,606	408	864	708	50		3,819	8,128	13,977	35,583	1,423
	12	23	6,347	371	2,103	8,821	136	295	345	36		263	2,204	3,279	12,100	526
2005 (H16)	1	24	9,518	305	2,588	12,411	314	364	763	79		316	4,279	6,115	18,526	772
	2	24	10,901	387	3,596	14,884	233	466	895	75		791	4,565	7,025	21,909	913
	3	27	13,859	725	3,904	18,488	343	659	847	52		575	7,024	9,500	27,988	1,037
計	310	211,282	16,144	94,940	322,366	4,946	9,693	11,067	1,115	585	20,700	70,714	118,820	441,186	1,423	



ご来館500万人達成（3月18日）

(2) 学校等入館者数

年 月		小 学 校		中 学 校		高 校		養 聾 盲 学 校	
		学校数	人 数	学校数	人 数	学校数	人 数	学校数	人 数
2004 (H16)・4	全 体	47	3,769	22	2,262	14	3,260	1	39
	県 内	4	169	4	382	1	240	1	39
5	全 体	95	7,104	65	8,528	8	1,913	3	58
	県 内	13	851	3	134	0	0	1	17
6	全 体	67	4,408	57	6,890	2	223	2	9
	県 内	35	1,917	11	547	0	0	2	9
7	全 体	27	2,294	16	1,666	12	741	4	46
	県 内	7	430	8	608	9	444	3	31
8	全 体	10	406	13	109	5	131	3	40
	県 内	5	95	12	76	2	21	1	1
9	全 体	31	2,412	5	465	9	747	1	4
	県 内	10	692	2	173	2	18	0	0
10	全 体	277	21,308	19	2,153	9	1,012	10	176
	県 内	107	7,433	8	695	1	44	5	61
11	全 体	82	6,199	25	3,013	6	287	4	93
	県 内	46	3,280	10	467	1	40	1	4
12	全 体	17	1,340	4	60	3	106	2	17
	県 内	3	129	4	60	1	23	2	17
2005 (H17)・1	全 体	13	1,002	2	94	0	0	0	0
	県 内	4	300	1	1	0	0	0	0
2	全 体	35	2,565	5	471	1	40	3	38
	県 内	7	347	4	264	1	40	2	10
3	全 体	9	480	5	143	3	318	2	42
	県 内	3	73	3	89	3	318	2	42
合 計	全 体	710	53,287	238	25,854	72	8,778	35	562
	県 内	244	15,716	70	3,496	21	1,188	20	231

(3) 月別・曜日別入館者数

年 月	日曜・祝祭日	土曜日（祝日除く）	そ の 他	計	
2004 (H16)	4	11,547	5,540	16,571	33,658
	5	23,271	7,424	27,886	58,581
	6	12,637	6,188	18,678	37,503
	7	16,880	9,228	18,355	44,463
	8	19,348	9,926	37,738	67,012
	9	16,024	5,915	11,218	33,157
	10	13,353	6,198	31,155	50,706
	11	9,334	4,800	21,449	35,583
	12	4,685	2,560	4,855	12,100
2005 (H17)	1	9,020	3,602	5,904	18,526
	2	10,267	5,088	6,554	21,909
	3	12,001	5,156	10,831	27,988
計	158,367	71,625	211,194	441,186	
構成割合%	35.9	16.2	47.9	100.0	

2 来館者アンケート調査結果報告

(1) 目的

博物館利用者の動向を把握し、そのニーズや満足度を的確に把握しながら、今後の広報活動のあり方を考え、運営や企画にその声を生かすなど、人びとに利用しやすい博物館づくりを進めるため、来館者アンケートを毎年3ないし4回行っている。

(2) 実施時期

アンケートの実施は、原則として平日と休日を含んで連続する3日間とし、来館者への券売時に毎日1000枚を手渡ししてアンケート協力をお願いをしている。また、別途、アンケート記入台をアトリウムに2個所、玄関横に1個所、計3個所設置してアンケート用紙類を置いて実施している。

平成16年度は、夏休みの月曜開館日を含めた7月31日(土)から8月2日(月)、秋の行楽シーズンの10月29日(金)から31日(日)、さらに春休み中の2005年3月25日(金)から27日(日)の計3回にわたりアンケート調査を実施した。

第1回	2004年7月31日(土)～8月2日(月)	回答者数	262人
第2回	2004年10月29日(金)～10月31日(日)	回答者数	202人
第3回	2005年3月25日(金)～3月27日(日)	回答者数	316人

(3) 項目

来館回数、博物館を何で知ったか、開催中の企画展・ギャラリー展、滞在時間、満足度などについて尋ねた上、意見や不満な点などがあれば具体的に記入していただいている。また、記入者自身について、およその年齢、性別、住居地域を教えてくださいという形式である。

毎回、特に尋ねたい事柄を1ないし2項目追加し、第1回のアンケート調査では、広報誌『うみんど』のあり方を検討中であったため、無料の広報誌『うみんど』が有料ならどうするか、いくらまでなら購入するかを尋ねた。

第2回を実施した10月には、大阪市営地下鉄の駅・ホームのモールボードで広報映像を放映中であったため、その効果を測る質問を設け、第3回アンケート調査では、平成16年度から常設展示観覧料を値上げしたことについてふれながら、当館の観覧料金についてのご意見をお伺いした。

また、平成16年度は、近隣地でありながら新規来館者の開拓余地があると考えられた三重県に的を絞って、新聞広告による広報を行ったため、居住地の項目に「三重県」を独立して掲げて、その効果を測ることにした。

(4) 傾向

毎回のアンケート調査結果はほぼ同じ傾向を示し、きわめて安定したデータであることは平成16年度についてもいえる。

・リピーター

「初めての来館」者は、2003年度にはほぼ過半数であったが、今年度は40%前後に下がってきている。逆にリピーターは増えて、30%以上の方が4回目以上であるという。夏休みや春休み以外の時であった第2回目の調査では、初めての来館者は40%を切って38.6%、4回目以上の人は37.6%とデータ値

は接近した。来館者の約半数が県内の人であるという通常の週末であったため滋賀県内の人の新規来館者の確保は厳しい状況になってきたと考えられる。

・ 口コミ

来館のきっかけとなった情報源は、友人・知人、家族・親戚といういわゆる口コミによるということが依然として多く、「湖周道路の看板」も特に3月は「ホームページ」以上の効果を上げている。

・ 企画展示・ギャラリー展示

来館者のうち、企画展示を観覧された方の割合については、テーマとして昨年度の「外来生物」より今日的な話題性が少なかったせいか、率は昨年を下回ったが、「プランクトン」のギャラリー展示は来館者のほぼ80%が観覧したという高率であった。全体の入場者も5万人を越える人気ギャラリー展示であった。

・ 満足度

博物館を訪ねてみて、「非常に満足した」と「満足した」をあわせると概ね70%以上を占め、特に第3回の調査では76.8%とこれまでにない高率であった。ギャラリー展示が好評であったことが要因とも考えられるが、「琵琶湖博物館中長期基本計画」第一段階の「年3回平均目標値75%」を達成するための参考となった。

もう一度来てみたいという来館者は60%を越えてはいるが、全体としては減少傾向にある。観察会や体験学習に参加したいという希望者も20%近くいることから、単に数字ではなくこうした行事への参加者の満足度も評価していく必要がある。

・ 不満な点

来館された方の不満な点は、以前からレストラン、交通の便、駐車場、昼食場所などに集中しているが、レストランについてはその数字が徐々に下がってきており、関係者の努力が報われつつある。また、昼食場所についても2005年度に全天候型昼食・集合スペースを確保する見通しがついたことから今後改善すると思われる。

一方、2004年4月からJR草津駅と博物館を結ぶバスの便数が2、3割減るなど、公共交通機関を利用しての来館者にはますます不便な状況となった。今後、バスでの来館者への何らかのサービスなどが必要と思われる。

これら来館者の意見については、毎回のアンケート調査後、琵琶湖博物館としての対応や考え方を公表しているところであり、関係者への周知も行うなど一層の内部努力も求めているところであるが、根本的な解決に至らない事項も依然として多いことも事実である。

・ 来館者

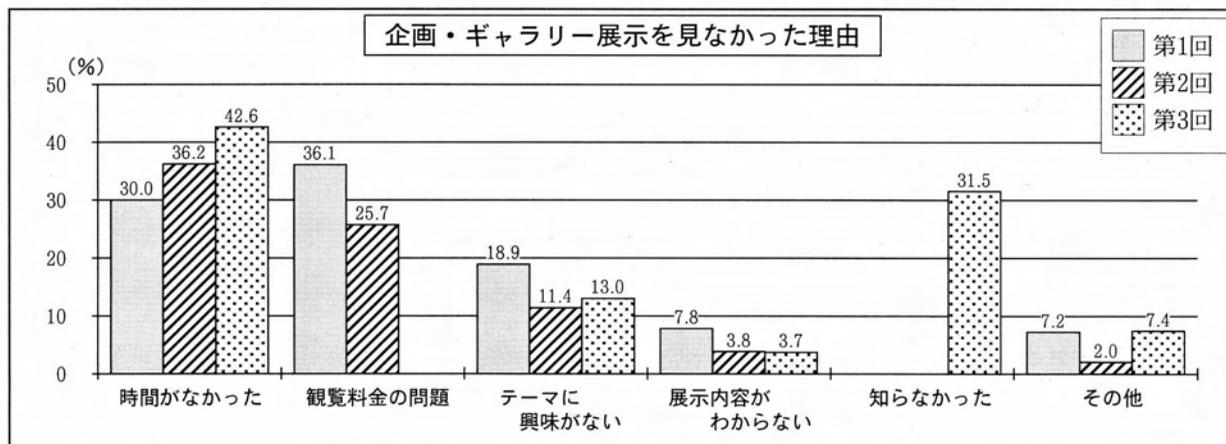
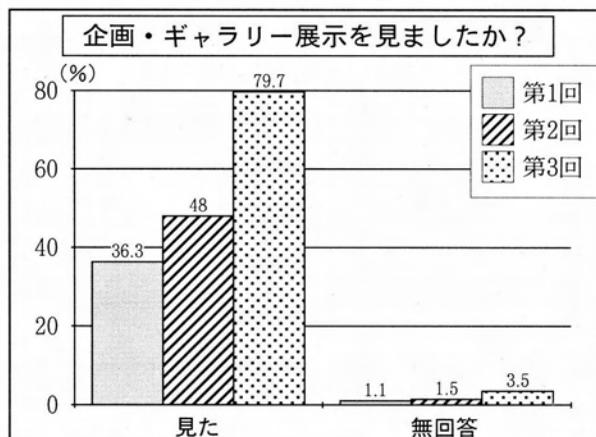
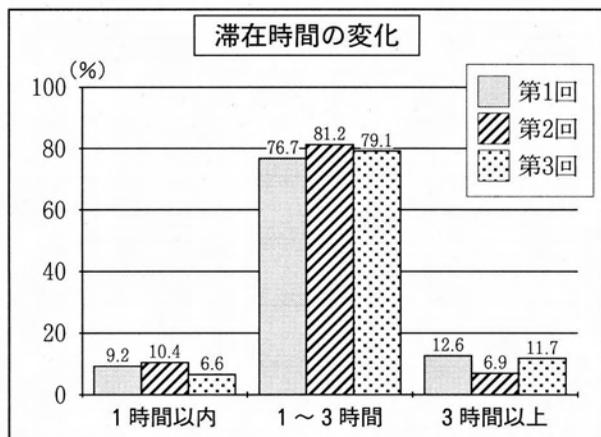
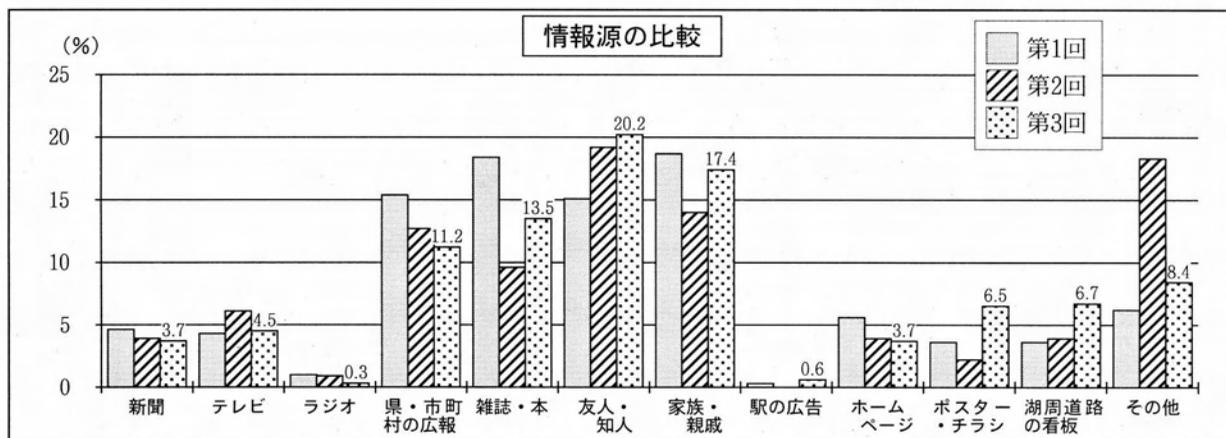
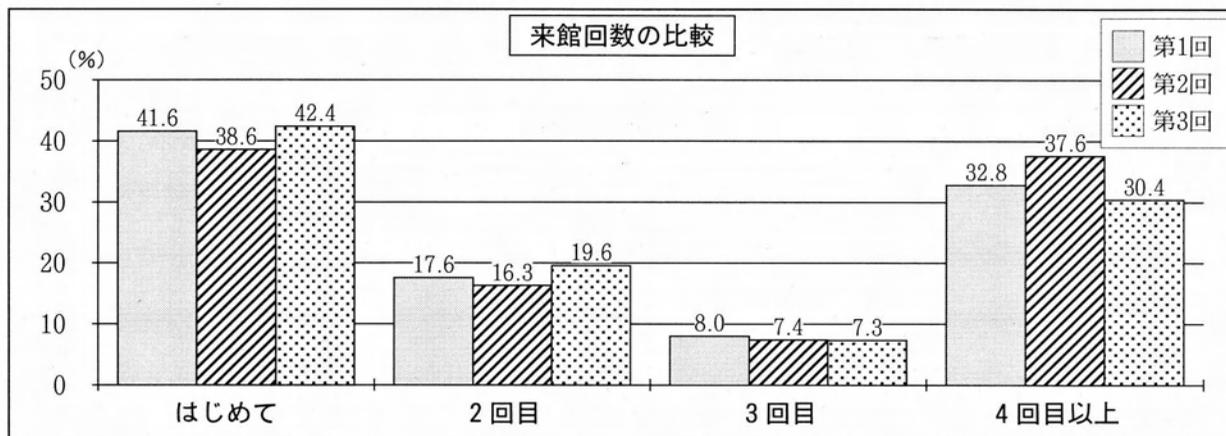
30歳代、40歳代の方が中心で、平均すると県内の方が30%、滋賀県を含めた近畿圏内の方で80%を占め、東海地方は10%、その他の地域が10%という結果である。

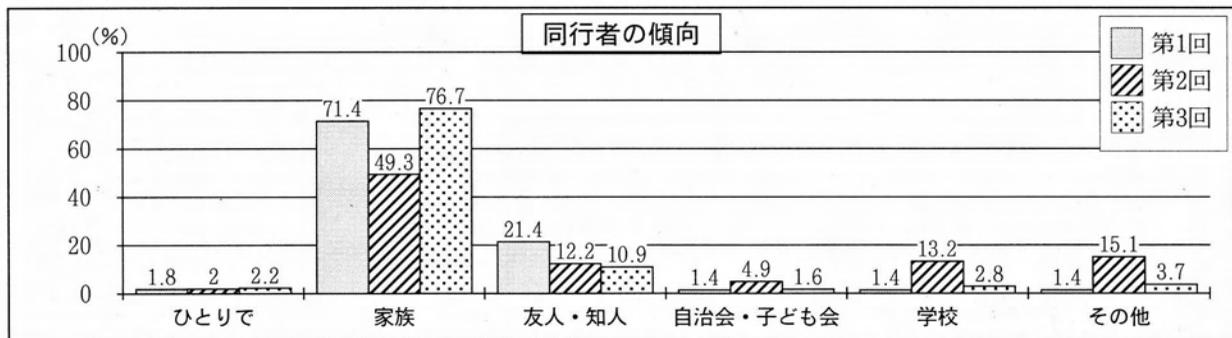
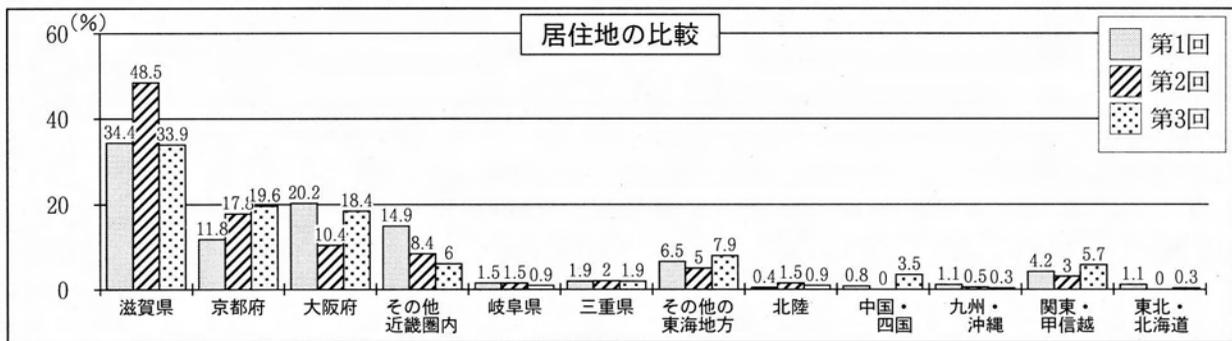
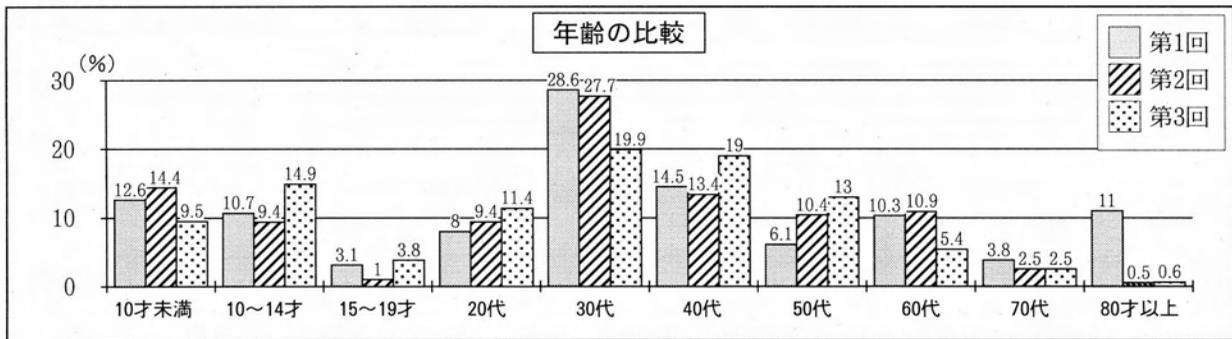
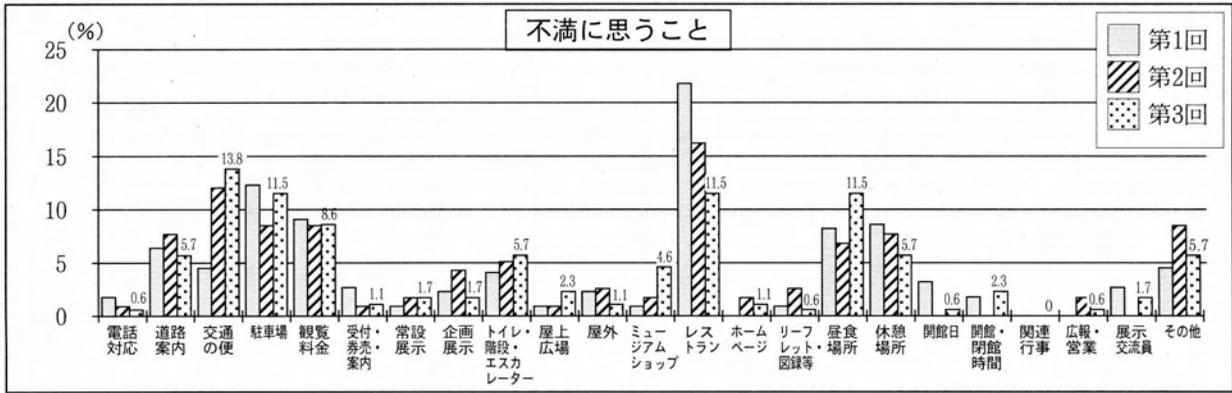
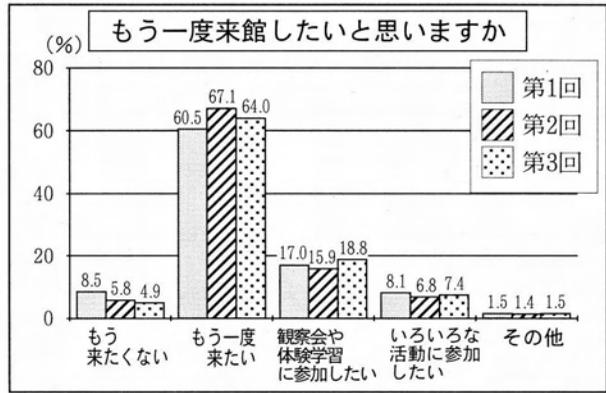
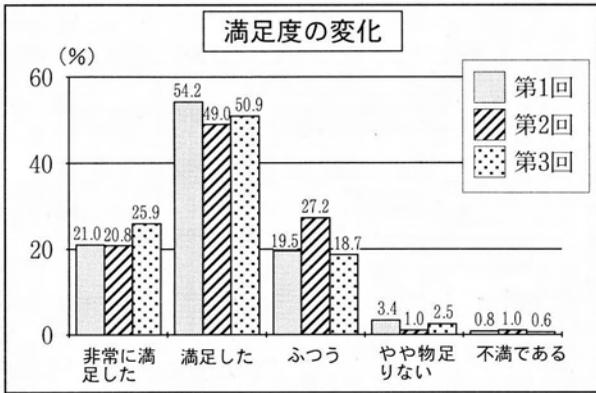
アンケート調査を実施したのが土曜日、日曜日や夏休み、春休み中ということもあって、家族と共に来られた方が圧倒的に多く、今後、団体での来館者を確保する方策を考えていく必要がある。

・ その他

広報効果を測る項目では、その結果が数字には表れてこなかった。その評価は別の方法も併用しながら行っていく必要があると思われる。

2004年度来館者アンケートグラフ





3 新聞掲載記録

月日	記事タイトル	新聞社名	月日	記事タイトル	新聞社名
4 3	琵琶湖博物館と「丸子船探検隊」が制作した、丸子船ペーパークラフトプレゼントの案内	しが県民情報	4 21	体験学習の日「機織り体験をしてみよう」の案内	あいあい AI 滋賀
4	守山市の「豊穰の里 赤野井湾流域協議会」が水生生物観察会を開催、子ら地域の環境学ぶ 講師に前畑政善総括学芸員	京都新聞	22	タンポポ雑種急増 「外来」 侵害「在来」 危機 12団体が「タンポポ調査・近畿2005実行委員会」(委員長 布谷知夫琵琶湖博物館研究部長) を組織、近畿1万ヶ所調査へ	読売新聞(夕刊)
5	太間川で危険な“落とし物” 大津署がカミツキガメ? 捕獲 琵琶湖博物館のコメント	中日新聞	23	祭りでシジミ漁体験や親貝放流 松田征也主任学芸員が琵琶湖やセタシジミの現状について講演	中日新聞
5	大津の川にカミツキガメ 琵琶湖博物館のコメント	朝日新聞	24	琵琶湖博物館で 機織り文化を再現 特別展「糸を紡いで布を織る ～民具の復元・再現・体験～」を開催	京都新聞
5	大津で凶暴カミツキガメ発見 琵琶湖博物館のコメント	産経新聞	24	幻の「国鱒」標本あった、京大博物館 川那部浩哉館長の話	朝日新聞
5	体長50センチカミツキガメ捕獲 捨てられ野生化? 県内7匹目 琵琶湖博物館のコメント	京都新聞	27	滋賀の魚 『ホンモロコ』 秋山廣光 専門学芸員の話	京都新聞
7	琵琶湖博物館でタンガニーカ湖再現	京都新聞	27	写真資料提供 『ホンモロコ』	京都新聞
7	体験学習の日「丸子船のペーパークラフトをつくろう」の案内	あいあい AI 滋賀	28	琵琶湖博物館で古代の機織りを体験、弥生機 親子連れら30人楽しむ	読売新聞
8	文化施設充実、1日中楽しめる琵琶湖博物館	産経新聞	28	外来魚(ブラックバス・ブルーギル) 意外においしいよ 朝小読者がクッキング、中井克樹主任学芸員のコメント	朝日小学生新聞
11	琵琶湖博物館で 丸子船の紙模型に挑戦	朝日新聞	28	観たい魅せたい変貌するミュージアム ボランティアは橋渡し役 琵琶湖博物館の「はしかけ制度」	産経新聞(夕刊)
13	スマイルカードで琵琶湖博物館など6施設無料	しが県民情報	5 1	「西日本自然史系博物館ネットワーク」が設立、NPO法人として活動開始 琵琶湖博物館も参加	朝日新聞(夕刊)
14	身近な水環境の保全をまず楽しみ、関心もって 琵琶湖博物館研究顧問の嘉田由紀子京都精華大教授の話	京都新聞	3	「激減している琵琶湖の固有種だよ ホンモロコの稚魚を見て」 琵琶湖博物館で繁殖に取り組み展示	中日新聞
15	体験学習の日「機織り体験をしよう」の案内	オー!ミー	3	「日野川の生物知って」 旧鎌掛小に「水族室」 琵琶湖博物館の学芸員の指導を受け水槽を設置	京都新聞
16	湖浄化の変遷紹介 琵琶湖博物館で経緯や様子詳細に 赤野井湾で県が実施した水質浄化事業を紹介する特別展示開催	京都新聞	11	滋賀の魚 『ウグイ』 松田征也主任学芸員の話	京都新聞
16	体長1メートル、でっかいぞ ビワコオオナマズ捕れた 琵琶湖博物館に寄贈 秋山廣光専門学芸員のコメント	京都新聞	11	イベント紹介 ・生き物文化誌学会第2回学術大会公開シンポジウム ・博物館講座「アジア基層文化の探求」(全4回)	しが県民情報
17	[明日への視座] 8 環境の世紀 思い複雑 川那部浩哉館長の話	京都新聞	12	琵琶湖博物館など「県立9研究機関で、応用研究取り組みを」 県監査委が提言	京都新聞
17	[コンパス] 琵琶湖博物館に復元、展示されている丸子船	毎日新聞	13	GW県内人出、琵琶湖博物館二万四千人	産経新聞
19	琵琶湖博物館で アフリカ東部の水槽の内装一新 アンドリュー・ロンター専門学芸員(現ハワイ・ワイキキ水族館長)が湖岸の環境を忠実に再現しデザイン	中日新聞	16	「生き物文化誌学会」 琵琶湖博物館で大会開幕	京都新聞
20	第3回博物館資料展 「糸を紡いで布を織る -民具の復元・再現・体験-」の案内	しが県民情報			
21	琵琶湖の環境航海中に学ぶ 「うみのこ」出港、2日目に琵琶湖博物館を見学	朝日新聞			

月日	記事タイトル	新聞社名	月日	記事タイトル	新聞社名
5 16	地域・環境考える「生き物文化誌学会」 秋篠宮さまが出席	産経新聞	6 20	レインスティック水への思い 雨ごい 用の中南米の楽器 琵琶湖博物館体験 教室の取り組み紹介	読売新聞
16	「生き物文化誌学会」 琵琶湖博物館で 公開シンポ	読売新聞	22	滋賀の魚 『ズナガニゴイ』 秋山廣 光専門学芸員の話	京都新聞
18	滋賀の魚 『ヌマムツ』 桑原雅之主任 学芸員の話	京都新聞	23	体験学習の日「レインスティックをつ くろう」の案内	あいあい A I 滋賀
18	カワウ激増「困った」 稚アユなど被害 深刻 亀田佳代子主任学芸員の話	読売新聞 (夕刊)	24	おでかけカレンダー「レインスティッ クをつくろう」の案内	オー!ミーク
19	体験学習の日「琵琶湖のプランクトンを 観察しよう」の案内	あいあい A I 滋賀	25	民具とくらし(5) 琵琶湖博物館収 藏品から「シク」	京都新聞
23	琵琶湖博物館内のレストラン“悪役” プ ラックバスを料理 「天井」「バーガー」 人気	朝日新聞	27	琵琶湖研究の過程考察 環境社会学会 がセミナー開催、特別インタビューで は同学会長で琵琶湖博物館研究顧問の 嘉田由紀子京都精華大教授らが残され た課題などを振り返った	毎日新聞
27	学術情報19万件に充実 琵琶湖博物館、 HPで公開	京都新聞	30	夏休み自由研究講座の案内 民具とくらし(6) 琵琶湖博物館収 藏品から「クサトリグルマ」	あいあい A I 滋賀
28	滋賀大 環境学習の 助っ人 養成 琵 琶湖博物館など県の研究機関と連携して 実験や実習を行う	中日新聞	7 2	100年変わらぬ景色満喫 湖上タクシ ーで巡る 琵琶湖	京都新聞
28	UNEP・技術センター開設10周年記念 琵琶湖博物館で来月にイベント開催	毎日新聞	3	滋賀の魚 『ブルーギル』 桑原雅之 主任学芸員の話	読売新聞 (夕刊)
28	民具とくらし(1) 琵琶湖博物館収 藏品から「田植え杵」	京都新聞	6	帰ってきたトゲカイエビ 60年代農薬 で姿消す 楠岡泰主任学芸員が同定	京都新聞
6 1	滋賀の魚『ニジマス』 孝橋賢一主査の話	京都新聞	6	湖国の魚 『ピワコオオナマズ』 前 畑政善総括学芸員の話	中国新聞
4	民具とくらし(2) 琵琶湖博物館収 藏品から「ジャグルマ(蛇車)」	京都新聞	7	観察会「水辺の貝を調べてみよう」・ 「びわ湖を船で体験」の案内	あいあい A I 滋賀
7	国連機関開設10年 琵琶湖博物館で国際 シンポ開催	朝日新聞	7	7月7日は「川の日」 川や湖の生態系 を考えよう 博物館の施設紹介と松田 征也主任学芸員の話	大阪日日 新聞
7	ネットワークの構築重要 UNEPシン ポ、琵琶湖博物館で開催	毎日新聞	9	民具とくらし(7) 琵琶湖博物館収 藏品から「ニシンカゴ(鯨籠)」	京都新聞
9	特定外来生物被害防止法 野生生態系 脅かす、指定の線引きが課題 中井克樹 主任学芸員の話	読売新聞	10	夏休みレジャー&プレゼント特集 ～家 族で楽しい思い出をつくろう～ たい けん・はっけん 琵琶湖博物館を楽し もう!	朝日小学 生新聞
11	民具とくらし(3) 琵琶湖博物館収 藏品から「麦打ち台」	京都新聞	11	滋賀の帰化生物 田んぼの中で暮らす 草とり虫 カブトエビ 滋賀県では 都市化の進んでいるところで見つかる (琵琶湖博物館フィールドレポーター調 査より)	滋賀民法
15	滋賀の魚 『ナマズ』 前畑政善総括学 芸員の話	京都新聞	11	県内で8匹捕獲 琵琶湖博物館でカミ ツキガメ収容 桑原雅之主任学芸員の コメント	朝日新聞
16	[双曲線] 魚つかみの伝統からみえるこ と 目標だけでなく課程を大切に楽しむ 牧野厚史主任学芸員の話	京都新聞	13	企画展「のびる・ひらく・ひろがる -植物がうごくとき」の案内	しが県民 情報
18	民具とくらし(4) 琵琶湖博物館収 藏品から「ナガシバリ(流し針)」	京都新聞	14	涼感、室内装飾にどうぞ 琵琶湖博物 館で水生植物の企画展開催	京都新聞
18	[芭蕉のみち] 湖に県鳥よみがえれ 「琵琶湖にカイツブリをよみがえらせ たいのです」 桑原雅之主任学芸員の話	中日新聞 (夕刊)			
19	[明日への視座]17 風土はどこに消えた? 川那部浩哉館長の話	京都新聞			
19	県内の美術館・博物館スタンプラリー好 評 抽選で琵琶湖博物館のナマズのぬい ぐるみなどプレゼント	京都新聞			

月日	記事タイトル	新聞社名	月日	記事タイトル	新聞社名
7 15	湖国の魚 『イワトコナマス』 前畑政善総括学芸員の話	あいあい A I 滋賀	8 2	滋賀の魚 『ソウギョ』 中井克樹主任学芸員の話	京都新聞
16	民具とくらし(8) 琵琶湖博物館収蔵品から「ドンジョケ」	京都新聞	4	湖国の魚 『ワタカ』 前畑政善総括学芸員の話	あいあい A I 滋賀
17	ゲームや映像で植物の生態紹介 琵琶湖博物館企画展開催	京都新聞	6	民具とくらし(11) 琵琶湖博物館収蔵品から「マス(栴)」	京都新聞
18	「動く」植物 琵琶湖博物館企画展始まる	産経新聞	8	琵琶湖も富士山も守りたい。自分たちにはできることは? 湖上学習の小学生、琵琶湖博物館を見学	京都新聞
19	琵琶湖博物館で体験・発見!! 400万年前、琵琶湖は三重県で誕生	中日新聞	8	「湖の子たち真剣に環境会議」 うみのこや琵琶湖博物館などでの学習や共同生活を通して交流を深め、地域の環境保全活動に役立てる	産経新聞
21	湖国の魚 『ハス』 前畑政善総括学芸員の話 ・企画展連続講座「のびる・ひらく・ひろがる 植物が動くとき」の案内	あいあい A I 滋賀	9	子ども環境交流事業も閉幕 最終日は琵琶湖博物館で湖などに生息する魚の展示を見学	毎日新聞
22	琵琶湖博物館が学芸職員を募集	京都新聞	10	3県子ども環境交流事業 学んだ友と別れ惜しむ 琵琶湖博物館見学し閉会	毎日新聞
23	民具とくらし(9) 琵琶湖博物館収蔵品から「ウナギウエ(鰻釜)」	京都新聞	10	滋賀の魚 『ハリヨ』 孝橋賢一主査の話	京都新聞
24	水辺の生物 こんにちは 「ミドリセンチコガネを探しに行こう」の紹介	朝日新聞(夕刊)	11	絶滅から30年余 ニッポンバラタナゴ繁殖 琵琶湖博物館で稚魚300匹を公開	京都新聞
24	たくましく生きる在来種 魚類分布を調査 琵琶湖博物館うおの会会長武田繁さんの話	京都新聞	11	湖国の魚 『ニゴロブナ』 孝橋賢一主査の話 ・イベント特集「水生生物の撮影の実際」	あいあい A I 滋賀
25	よみがえれ日本の淡水魚! 琵琶湖博物館にてビデオ上映と学芸員の解説	京都新聞	12	琵琶湖博物館の近くのホワイトビーチに面した一帯に、「飛び火」花ハス新たに群生	産経新聞
25	植物の不思議、種なども展示 「のびる・ひらく・ひろがる -植物がうごくとき」琵琶湖博物館にて開催	中日新聞	13	民具とくらし(12) 琵琶湖博物館収蔵品から「アバ(浮子)」	京都新聞
26	昆虫採集方法や標本づくり学ぶ「夏休み自由研究講座」琵琶湖博物館にて開催	朝日新聞	13	「環境保護考えよう」絶滅危機の稚魚 琵琶湖博物館にて展示 松田征也主任学芸員のコメント	中日新聞
27	滋賀の魚 『ビワヒガイ』 秋山廣光専門学芸員の話	京都新聞	17	夏休み特別講演会「環境の歴史と人間」 宮本真二学芸員(南草津図書館)	しが県民情報
28	[観たい魅せたい変貌するミュージアム] コンパニオンという呼名 琵琶湖博物館の「展示交流員」	産経新聞(夕刊)	18	ニッポンバラタナゴ琵琶湖博物館にて展示 絶滅種の稚魚人気 松田征也主任学芸員のコメント	産経新聞
28	県内の小中生、植物・昆虫採集し標本 専門家の指導で学ぶ「夏休み自由研究講座」琵琶湖博物館にて開催	中日新聞	18	写真資料提供 『ハリヨ』	読売新聞
28	湖国の魚 『コイ』 前畑政善総括学芸員の話	あいあい A I 滋賀	19	琵琶湖博物館学芸職員の募集	しが県民情報
29	企画展示「のびる・ひらく・ひろがる -植物がうごくとき」琵琶湖博物館にて開催	滋賀報知新聞	21	「水族飼育員と話そう」琵琶湖博物館アトリウムで無料コンサートも	しが県民情報
30	民具とくらし(10) 琵琶湖博物館収蔵品から「氷挽き鋸」	京都新聞	24	「水生生物の撮影の実際」の案内	しが県民情報
31	滋賀などの児童61人琵琶湖舞台に環境学習 最終日は琵琶湖博物館	毎日新聞	25	琵琶湖で熱帯魚を捕獲 琵琶湖博物館が発表	京都新聞
8 1	琵琶湖博物館で体験・発見!! 400万年前、琵琶湖は三重県で誕生	中日新聞	25	[チャイム] 東南アジア原産の熱帯魚「スポッテッド・インディアンナイフ」1匹を捕獲 琵琶湖博物館の話	産経新聞

月日	記事タイトル	新聞社名	月日	記事タイトル	新聞社名
8 25	守山の琵琶湖で東南アジア原産 熱帯魚 見つかる 琵琶湖博物館が発表	読売新聞	9 19	環境再生は皆の責務 「水の使い方を 考えるシンポジウム」 京都で開催 前 畑政善総括学芸員のコメント	毎日新聞
25	湖国の魚 『ゲンゴロウブナ』 孝橋賢 一専門員の話	あいあい A I 滋賀	21	滋賀の魚 『ギギ』 秋山廣光専門学 芸員の話	京都新聞
26	琵琶湖に熱帯魚 定置漁具にかかる 琵琶 湖博物館の話	中日新聞	22	琵琶湖保全へプロジェクト 2005年度 は琵琶湖博物館で自然観察会など開催	京都新聞
27	民具とくらし(13) 琵琶湖博物館收藏品 から「牛の口籠」	京都新聞	22	地球環境と大気汚染を考える市民会議 (CASA)が 琵琶湖博物館などを回る フィールドワークや琵琶湖博物館研究 顧問の嘉田由紀子京都精華大教授を講 師に市民講座開催	産経新聞
27	県内で30年以上前に絶滅したとされるニッ ポンバラタナゴを 琵琶湖博物館で展示	朝日新聞	22	琵琶湖の水環境保全を 「びわ湖命の 水プロジェクト」 常任理事の川那部 浩哉琵琶湖博物館館長のコメント	産経新聞
28	イベント「水族飼育員と話そう」の案内	しが県民 情報	22	湖国の魚 『ビワヒガイ』 秋山廣光 専門学芸員の話	あいあい A I 滋賀
28	[明日への視座]26 生きものに良い密度 住める所に住むのが自然 川那部浩哉 館長の話	京都新聞	24	民具とくらし(17) 琵琶湖博物館収 藏品から「ハネテング」	京都新聞
28	湖上で調査実習「合宿琵琶湖市民大学」 で前畑総括学芸員講義	毎日新聞	25	「びわ湖命の水プロジェクト」発足 WWFジャパン常務理事の川那部浩哉 琵琶湖博物館館長のコメント	ゴム化学 新聞
28	3 県子ども環境交流事業 琵琶湖博物 館で環境学習	毎日新聞	26	志津小の児童が琵琶湖博物館の支援で 進めている環境学習「伯母川探検隊」 で海外の研修員と楽しく生物調査	京都新聞
29	ネット情報 自由研究に 児童ら琵琶湖 博物館のHPなどの活用方法学ぶ	京都新聞	28	BBCの番組「うーたんのこどもプラ スワン」 琵琶湖博物館での体験学習 などを取り上げ県内の小学校の学習教 材にも活用	産経新聞
9 1	「ため池シンポジウム2004 in しが」 琵琶 湖博物館で開催	中日新聞	29	環境破壊見抜く厳しい目を 養老孟司 氏 琵琶湖博物館プランクトンの展示 を通して見えるもの	京都新聞
1	湖国の魚 『ホンモロコ』 中井克樹主 任学芸員の話	あいあい A I 滋賀	29	湖国の魚 『アブラヒガイ』 秋山廣 光専門学芸員の話 ・観察会「秋の棚田の観察会」の案内	あいあい A I 滋賀
3	民具とくらし(14) 琵琶湖博物館収 藏品から「シブオケ(渋桶)」	京都新聞	30	「合宿琵琶湖市民大学 琵琶湖の20年 後を考える」での前畑政善総括学芸員 の講義の詳録	毎日新聞
6	親子で自然を学ぶ『田んぼ水辺の楽校』 が「田んぼ水辺研究会」(会長前畑政 善総括学芸員)の主催で開かれる	京都新聞	10 1	一部透明の珍虫見つかる(近江八幡)、 ジンガサハムシと判明 八尋克郎主任 学芸員が確認	京都新聞
7	滋賀の魚 『コアユ(小アユ)』 前畑 政善総括学芸員の話	京都新聞	1	民具とくらし(18) 琵琶湖博物館収 藏品から「イモアライ(芋洗い)」	京都新聞
8	湖国の魚 『コアユ』 桑原雅之主任学 芸員の話 ・体験学習の日「紙すきをしよう」の案 内 ・観察会「化石観察会」の案内	あいあい A I 滋賀	2	体験学習の日「草木染めをつくろう」・ 観察会「ビワマス採卵現場を見学して みませんか」の案内	しが県民 情報
10	民具とくらし(15) 琵琶湖博物館収 藏品から「スキバリ」	京都新聞	6	湖国の魚 『スジシマドジョウ』 松田征也主任学芸員の話	あいあい A I 滋賀
14	滋賀の魚 『モツゴ』 孝橋賢一主査の話	京都新聞	8	民具とくらし(19) 琵琶湖博物館収 藏品から「ハナピラカゴ(花弁籠)」	京都新聞
15	湖国の魚 『ビワマス』 桑原雅之主任学 芸員の話	あいあい A I 滋賀			
16	プラス聴いて触って吹いて 琵琶湖博物 館で金管五重奏の演奏会開催	しが県民 情報			
17	植物“のびる・ひらく” 子孫残す工夫 に焦点 琵琶湖博物館で企画展開催	中日新聞			
17	民具とくらし(16) 琵琶湖博物館収 藏品から「スゴアミ」	京都新聞			

月日	記事タイトル	新聞社名	月日	記事タイトル	新聞社名
10 13	琵琶湖に新外来魚“フロリダバス”大量繁殖、中井克樹主任学芸員らの調査で判明	産経新聞(夕刊)		学芸員がパネリストとして参加「楽しむ、発見する、発信する」博物館を提案	
15	民具とくらし(20) 琵琶湖博物館収蔵品から「ガイコン」	京都新聞	11 1	「絶滅危ぐ種増加見込み」05年版リスト 県が調査中間報告を琵琶湖博物館で開催の「滋賀の生物多様性を考えるフォーラム」で公表	中日新聞
17	太古の化石探すゾウ! 来月、安心院で琵琶湖博物館と安心町教委が共同で発掘調査	大分合同新聞	3	湖国の魚 『ウナギ』 松田征也主任学芸員の話	あいあい A I 滋賀
17	モンゴルの環境考える討論会「モンゴル・フスグルのサスティナビリティを探索」が琵琶湖博物館で開催	毎日新聞	4	[私の視点] 水害 自助・共助の意識高めて 琵琶湖博物館研究顧問の嘉田由紀子京都精華大教授の話	朝日新聞
17	琵琶湖の環境保護、モンゴルから学ぶワークショップ「モンゴル・フスグルのサスティナビリティを探索」が琵琶湖博物館で開催	中日新聞	5	民具とくらし(22) 琵琶湖博物館収蔵品から「フィゴ(鞆)」	京都新聞
19	滋賀の魚 『カネヒラ』 中井克樹主任学芸員の話	京都新聞	6	被災者から聞き取り調査、過去の水害僕らが伝える「子ども流域文化研究所」の取り組み。同研究所副所長で琵琶湖博物館研究顧問の嘉田由紀子京都精華大教授の話	毎日新聞
20	観察会「秋の里山探検」の案内	あいあい A I 滋賀	6	琵琶湖のブラックバス フロリダバス大量侵入 中井克樹主任学芸員らが採集、今秋の日本魚類学会で報告、中井克樹主任学芸員の話	朝日新聞
22	民具とくらし(21) 琵琶湖博物館収蔵品から「ツト(苞)」	京都新聞	8	川の生き物の気持ちになって…子どもの視点で水環境考えよう。京都の小中高生が「子ども流域協議会」設立へ、準備会で川那部浩哉館長を囲んでの意見交換を予定	京都新聞
23	ホンモロコ、ニゴロブナの養殖を目指し来月研究会発足へ、設立総会で琵琶湖博物館学芸員の講演や湖魚料理の試食会	中日新聞	8	湖国伝統食継承へ モロコ・フナを「陸上養殖」 県内農家が「県モロコ・フナ養殖研究会」設立総会、秋山廣光専門学芸員が記念講演	京都新聞
24	湖国グルッと 里口保文主任学芸員の案内で琵琶湖博物館を紹介	産経新聞	10	湖国の魚 『ピワヨシノボリ』 秋山廣光専門学芸員の話	あいあい A I 滋賀
26	コイ、フナの稚魚救い湖に… 琵琶湖河川事務所と住人ら、「魚にやさしい」水路掘り。琵琶湖博物館研究顧問の嘉田由紀子京都精華大教授の話	朝日新聞	10	タンポポ外来種“席卷” 雑種急増、『在来』と交代 「タンポポ調査・近畿2005実行委員会」(委員長=布谷知夫上席総括学芸員)の予備調査で判明	読売新聞(夕刊)
26	滋賀の魚 『ニゴイ』 孝橋賢一主査の話	京都新聞	12	民具とくらし(23) 琵琶湖博物館収蔵品から「キジバチ」	京都新聞
27	「モロコつくだ煮、鮎ずし守ろう」大津に養殖研究会 設立総会で秋山廣光専門学芸員が記念講演会	産経新聞	16	滋賀の魚 『ピワマス』 桑原雅之主任学芸員の話	京都新聞
27	「滋賀の生物多様性を考えるフォーラム」琵琶湖博物館にて開催	読売新聞	16	なじみの「ゴリ」育てれば新種 『ピワヨシノボリ(仮称)』 写真資料提供と秋山廣光専門学芸員の話	朝日新聞
27	湖国の魚 『スゴモロコ』 松田征也主任学芸員の話	あいあい A I 滋賀	17	古代の「ミエゾウ」頭骨化石完全な形で 大分のため池で発見 安心院町教委と琵琶湖博物館が発表	毎日新聞(夕刊)
28	30年にわたるハリヨの飼育観察、近江町立双葉中学校科学部が琵琶湖博物館学芸員を招いて研究報告会開催	中日新聞	17	400万年前のゾウ 完全な頭骨化石 大分・安心院の地層で出土 安心院町教委と琵琶湖博物館が発表 調査団の高橋啓一研究部長のコメント	毎日新聞(大分)
29	「水の恵み見つめ直す時」 淀川水系流域委員会委員で琵琶湖博物館研究顧問の嘉田由紀子京都精華大教授の話	日本経済新聞			
30	[明日への視座]35 琵琶湖はどこへいく 水位操作など魚に大影響 川那部浩哉館長の話	京都新聞			
31	荒神谷遺跡(島根県斐川町)と地域の活性化、県教委・町共催の記念シンポジウム「検証・荒神谷遺跡」で橋本道範主任	朝日新聞			

月日	記事タイトル	新聞社名	月日	記事タイトル	新聞社名
11 17	湖国の魚 『イサザ』 孝橋賢一主査の話	あいあい A I 滋賀		・観察会「下物の水鳥を観察してみよう」の案内	
18	ミエゾウの秘密 見えそう！ 古代種大分で頭骨完全出土 高橋啓一研究部長のコメント	中日新聞	11 26	民具とくらし(25) 琵琶湖博物館収藏品から「ヤタウチ (ヤタ打ち)」	京都新聞
18	琵琶湖博物館など発掘調査、ミエゾウの頭骨出土 大分の前期鮮新世地層進化解明に期待 高橋啓一研究部長のコメント	京都新聞	27	琵琶湖ピンチ 70センチ級バス進む交雑 中井克樹主任学芸員らが共同研究で確認	毎日新聞 (夕刊)
18	400万年前の象の頭骨化石出土 進化解明のカギに 大分・安心院町が琵琶湖博物館と共同で発掘調査 高橋啓一研究部長の話	西日本新聞	27	写真資料提供 『イサザ』	京都新聞 (滋賀新聞)
18	300~400万年前のゾウの頭骨化石 完全な形なら日本初 進化知る手がかりに 大分・安心院町教委と琵琶湖博物館が発掘調査	読売新聞	28	「市民の底力」テーマに 県内のボランティアやNPO法人 60団体が守山で交流 「おうみ市民活動屋台村」に琵琶湖博物館「はしかけ」里山の会が参加	京都新聞
18	日本初、完全な形でミエゾウの頭骨化石 安心院町で出土、進化解明に期待 安心院町と琵琶湖博物館が発表 高橋啓一研究部長のコメント	大分合同新聞	29	琵琶湖密放流か？97年調査では「ゼロ」 フロリダバス大量侵入 中井克樹主任学芸員らが採集、調査 日本魚類学会で発表	中日新聞
18	ミエゾウ化石 画期的な発見 高橋啓一研究部長の話	大分合同新聞	12 1	湖国の魚 『ブルーギル』 中井克樹主任学芸員の話	あいあい A I 滋賀
18	530~170万年前生息のミエゾウ 頭骨化石 大分で発掘 琵琶湖博物館など発表	朝日新聞 (滋賀)	3	民具とくらし(26) 琵琶湖博物館収藏品から「ミンダル (味噌樽)」	京都新聞
18	ミエゾウ頭骨ほぼ完全出土 安心院町教委と琵琶湖博物館が発表	朝日新聞 (大分)	7	琵琶湖の水質管理学びたい、イラク政府関係者ら琵琶湖博物館などで研修	読売新聞
18	原日本人の姿求めて 列島到来、旧人は来た？来なかった？高橋啓一研究部長のコメント	京都新聞 (夕刊)	7	滋賀の魚 『ムギツク』 中井克樹主任学芸員の話	京都新聞
18	20・21日は「関西文化の日」 琵琶湖博物館など文化施設が入場無料	滋賀報知新聞	8	湖国の魚 『オオクチバス』 中井克樹主任学芸員の話	あいあい A I 滋賀
18	20・21日は関西一円0円均一。今年もやるで！関西文化の日 文化に触れよう！ 琵琶湖博物館など県内15の文化施設が入場無料	オー！ミー	・「体験学習の日」プログラム 「餅つきをしよう」の案内		
19	芸術の秋満喫しよう 関西文化の日編 琵琶湖博物館では20・21日の両日特別展が入場無料	夕刊フジ	10	彦根東高にスーパーサイエンスコースを新設、講演会の聴講や琵琶湖博物館で実習を行う	京都新聞
19	民具とくらし(24) 琵琶湖博物館収藏品から「ミ」	京都新聞	14	琵琶湖博物館研究発表会「博物館は学びの場となりうるのか」の案内	しが県民情報
23	滋賀の魚 『スナヤツメ』 秋山廣光専門学芸員の話	京都新聞	17	民具とくらし(27) 琵琶湖博物館収藏品から「セタ」	京都新聞
23	観察会「下物の水鳥を観察してみよう」の案内	しが県民情報	20	里山が生態系を豊かに 保全の大切さ再認識 「日本鱗翅学会近畿支部」が琵琶湖博物館と共催で里山保全をテーマにした特別講演会を開催	毎日新聞
24	海外記者11人琵琶湖を取材、琵琶湖博物館などを訪問	朝日新聞	20	写真資料提供 『オオクチバス』	産経新聞
24	湖国の魚 『ウツセミカジカ』 桑原雅之主任学芸員の話 ・写真資料提供 『カネヒラ』	あいあい A I 滋賀	21	ダム建設に「壁」高く 丹生・大戸川ワーキンググループ意見書案、環境破壊を明確に指摘 「淀川水系流域委員会」委員の川那部浩哉館長のコメント	朝日新聞
			21	滋賀の魚 『オイカワ』 秋山廣光専門学芸員の話	京都新聞
			21	琵琶湖博物館で北欧の冬 絵や人形で紹介 フィンランドから送られてきた児童作品展示	京都新聞

月日	記事タイトル	新聞社名	月日	記事タイトル	新聞社名
12 21	科学への好奇心、大満足！ 「地域子ども教室推進事業」（文部科学省委託事業）に琵琶湖博物館も参画	読売新聞	1 12	湖国の鳥 『コハクチョウ』 亀田佳代子主任学芸員の話	あいあい A I 滋賀
22	琵琶湖から外来魚5種類、安易な放流環境心配 松田征也主任学芸員の話 ・写真資料提供 『スポッテッド・インディアンナイフ』	朝日新聞	13	琵琶湖博物館研究顧問の嘉田由紀子京都精華大教授が修学旅行生に教員講義	京都新聞
22	観察会「冬の里山の観察会」の案内	あいあい A I 滋賀	17	プランクトンの世界探検 ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しようープランクトンの不思議ー」の紹介	中日新聞
24	幻のプランクトン探究 写真や顕微鏡で観察 「ミクロの世界を探検しよう？プランクトンの不思議」が琵琶湖博物館にて開催	産経新聞	17	小中生にお薦めの「アート体験教室」文化ボランティア推進モデル事業として県文化振興事業団が企画 琵琶湖博物館など4施設がプログラムを用意	中日新聞
24	[追跡2004] 進む「学習館」建設構想、発見されたミエゾウの頭骨は琵琶湖博物館にてクリーニング作業中 高橋啓一研究部長のコメント	大分合同新聞（夕刊）	18	滋賀の魚 『オヤニラミ』 秋山廣光専門学芸員の話	京都新聞
25	[明日への視座]43 鳳来寺山の水と人対処工夫し自然と共存へ 川那部浩哉館長の話	京都新聞	19	湖国の鳥 『ユリカモメ』 亀田佳代子主任学芸員の話	あいあい A I 滋賀
26	ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しよう？プランクトンの不思議」琵琶湖博物館にて開催	京都新聞	19	琵琶湖博物館で昆虫標本制作をしている杉野由佳さんの描いた動植物の「細密画の世界」 滋賀会館で開催	中日新聞
28	「水害に強い地域社会づくりにむけて」シンポジウム 琵琶湖博物館研究顧問の嘉田由紀子京都精華大教授をコーディネーターに7人のパネリストが議論	京都新聞	20	体験学習の日「博物館でスゴロクを楽しもう」の案内	オー！ミー
1 1	水質が変わった、自然のリズムを基に発想転換 川那部浩哉館長の話	毎日新聞	20	生態系への影響巡り賛否 「特定外来生物指定」オオクチバス先送り環境省小会合決定 中井克樹主任学芸員のコメント	京都新聞
3	湖国の鳥 『ヒシクイ』 亀田佳代子主任学芸員の話 ・「博物館でスゴロクを楽しもう」の案内	あいあい A I 滋賀	21	民具とくらし(28) 琵琶湖博物館収蔵品から「ワラジ（草鞋）」	京都新聞
5	[暮らし見つめて -洗堰の100年<中>] 琵琶湖総合開発 牧野厚史主任学芸員の話	毎日新聞	23	写真資料提供 『オオクチバス』	朝日新聞
6	[近江万国往来図?交流編] 「母なる湖」に研究の輪 滋賀で活躍する外国人 マーク・グライガー専門学芸員とロビン・スミス学芸技師の紹介	朝日新聞	23	淀川流域委員会第1期終了 環境保全の川づくり明確化 琵琶湖博物館研究顧問の嘉田由紀子京都精華大教授のコメント	京都新聞
9	「淀川水系流域委員会」の琵琶湖部会（部会長=川那部浩哉館長）が瀬田川洗堰水位の操作見直しを求める意見書提出を決定	読売新聞	24	「魚道」づくりに知恵出し合う 「FLBびわ湖自然環境ネットワーク」（環境団体）主催のシンポジウム 『魚ののぼれる川づくり』で前畑政善総括学芸員が「魚はなぜ田んぼにのぼるのか？」と題し講演	朝日新聞
9	[60年目の肖像] 琵琶湖、問われる水の管理 琵琶湖博物館研究顧問の嘉田由紀子京都精華大教授が県災害誌にある53年の水害の犠牲者を追跡調査	京都新聞	24	川づくりの必要性学ぶ 「びわ湖自然環境ネットワーク」主催シンポジウム 『魚ののぼれる川づくり』で前畑政善総括学芸員が講演	読売新聞
10	[こんにち話] 水害を学ぶ 川の怖さ伝える機会を 琵琶湖博物館研究顧問の嘉田由紀子京都精華大教授の話	京都新聞	24	スーパーサイエンスハイスクールに文科省から指定の滋賀県立彦根東高校1年生が琵琶湖博物館にて実習や講義などを受ける	中日新聞
			25	市民団体「琵琶湖を戻す会」が30日に琵琶湖博物館で『琵琶湖外来魚シンポジウム』を開催	中日新聞
			25	琵琶湖の外来魚完全駆除へ検討、琵琶湖の外来魚問題について語り合うシンポジウムを 琵琶湖博物館ホールで開催	朝日新聞

月日	記事タイトル	新聞社名	月日	記事タイトル	新聞社名
1	26 催、前半は「事例紹介」 後半は琵琶湖博物館の学芸員らと交えて「琵琶湖での可能性の検討」をテーマにパネル討議	京都新聞	2 6	外来魚の生態撮った 滋賀県立大大学院生ら琵琶湖で定点観察、中井克樹主任学芸員のコメント	中日新聞
	26 写真で地域変化探る、高島・今津中で学習発表会 琵琶湖博物館研究顧問の嘉田由紀子京都精華大教授が講評	京都新聞	7	[あなたの街から 烏丸半島] 琵琶湖博物館の紹介と松田征也主任学芸員の話	朝日新聞
	26 名の理由 奇抜な説 おならする『ミイデラゴミムシ』 八尋克郎主任学芸員が発表	京都新聞	8	「琵琶湖お魚ネットワーク交流会」の案内	しが県民情報
	26 湖国の鳥 『カルガモ』 亀田佳代子主任学芸員の話	あいあい AI滋賀	9	滋賀大独自資格 環境学習支援士を養成、琵琶湖博物館などと連携した実習などを行う	毎日新聞
	27 琵琶湖博物館で中国の ボテジャコ 展示 松田征也主任学芸員のコメント	京都新聞	9	滋賀大「環境学習支援士」を創設、琵琶湖博物館などで実習	産経新聞
	28 民具とくらし(29) 琵琶湖博物館収蔵品から「風呂のカサ」	京都新聞	9	滋賀大 環境支援士3コース30人を募集、琵琶湖博物館などでの実習や課題研究に取り組む	中日新聞
	28 南郷洗堰100周年記念「水辺と生き物?琵琶湖の環境を考える」シンポジウムのパネルディスカッションで前畑政善総括学芸員らが討論	毎日新聞	9	琵琶湖のお魚マップを作ろう、参加の個人、団体を募集 記録を琵琶湖博物館が分析して公表	中日新聞
	29 琵琶湖博物館でミクロの世界を探検! ギャラリー展示の紹介と担当の楠岡泰主任学芸員のコメント	しが県民情報	9	「琵琶湖お魚ネットワーク始動」琵琶湖博物館で交流会開催	読売新聞
	30 県内初、来月13日まで琵琶湖博物館で中国のタナゴ展示	産経新聞	9	湖国の鳥 『ヒドリガモ』 亀田佳代子主任学芸員の話	あいあい AI滋賀
	31 琵琶湖の外来魚駆除問題めぐりシンポジウム「完全駆除へのシナリオ」が琵琶湖博物館にて開催、中井克樹主任学芸員がこれまでの会合の経緯に触れる	朝日新聞	10	機織りの伝統伝承 守山市立中洲公民館と琵琶湖博物館の登録会員「近江はたおり探検隊」が合同で「綿から糸を紡ぐフェア」を企画開催 中藤容子学芸員のコメント	朝日新聞
	31 外来魚駆除「琵琶湖方式」探る、「琵琶湖外来魚シンポジウム」が琵琶湖博物館にて開催	中日新聞	10	タンポポ生育調査10万か所調査 「タンポポ調査・近畿2005実行委員会」(委員長=布谷知夫上席総括学芸員)が企画	読売新聞
	31 子ら型染めなどアート体験、草津文芸会館で「子どもアート体験教室」を開催、琵琶湖博物館など四館の学芸員やボランティアサポーターが参加	京都新聞	11	来年度から滋賀大で「環境学習支援士」指導者養成へ講座、琵琶湖博物館などで実習	朝日新聞
	31 琵琶湖博物館など県内4つの美術・博物館が親子で触れる芸術教室「子どもアート体験教室」を開催	中日新聞	11	民具とくらし(31) 琵琶湖博物館収蔵品から「セイロ(蒸籠)」	京都新聞
2	1 [新聞時評] 信頼増した本紙の災害・防災報道、琵琶湖博物館研究顧問の嘉田由紀子京都精華大教授	毎日新聞	15	滋賀の魚 『ピワコオオナマズ』 前畑政善総括学芸員の話	京都新聞
	2 湖国の鳥 『マガモ』 亀田佳代子主任学芸員の話	あいあい AI滋賀	16	湖国の鳥 『ハンビロガモ』 亀田佳代子主任学芸員の話 ・「水族展示の舞台裏」の案内	あいあい AI滋賀
	4 民具とくらし(30) 琵琶湖博物館収蔵品から「ヤマノカミ(山の神)」	京都新聞	18	[びわ湖の鳥たち] カワウ 亀田佳代子主任学芸員の話	しんぶん赤旗
	4 南郷洗堰100周年記念「水辺と生き物 琵琶湖の環境を考える」シンポジウムの第2部で前畑政善総括学芸員らが討論	毎日新聞	18	民具とくらし(32) 琵琶湖博物館収蔵品から「アブリカゴ(焙り籠)」	京都新聞
	5 「縄文コースターをつくろう」の案内	しが県民情報	19	[自然] 外来魚駆除に知恵絞る 産卵などの生態探り、逆手に捕獲 中井克樹主任学芸員の話	読売新聞(夕刊)

月日	記事タイトル	新聞社名	月日	記事タイトル	新聞社名
2 19	「縄文コースターをつくろう」・観察会「水族展示の舞台裏」の案内	しが県民情報		前畑政善総括学芸員らが討論、琵琶湖の生物多様性を守るために何が必要なのか	
21	琵琶湖の伝統漁法 えり漁科学で解明、琵琶湖博物館と近畿大学水産学科が共同研究で突き止める	朝日新聞	3 11	民具とくらし(35) 琵琶湖博物館収蔵品から「ドンベ」	京都新聞
21	[論点] ブラックバス規制を考える 在来種に影響は明白 中井克樹主任学芸員	毎日新聞	12	「ミクロの世界を探検しよう」・「化石のレプリカをつくろう」・「川虫探検」の案内	読売新聞
22	ドスン足跡100万年前ゾウだぞ～安曇川河床で発見 山川千代美主任学芸員の話	京都新聞	13	琵琶湖の魚べたり 京阪・石山坂本線「シール電車」運行 琵琶湖博物館がイラスト提供	中日新聞
23	湖国の鳥『コガモ』 亀田佳代子主任学芸員の話	あいあい AI 滋賀	15	[あれこれ] 「ミクロの世界を探検しよう」-プランクトンの不思議」の案内	読売新聞
24	滋賀の理科教材研究委員会のプランクトン図鑑出版に琵琶湖博物館などが編集に協力	中日新聞	16	琵琶湖博物館と共同でミエゾウの頭部化石を発掘した安心院町教育委員会が「大分合同新聞社賞 '05」を受賞	大分合同新聞
24	京都・神戸新聞環境キャンペーン[エコなお話(自然編)] ・写真資料提供 『メダカ』、自然環境保全的エコ視点 過去、現在、未来を「琵琶湖博物館」で体感する	京都新聞	16	湖国の鳥『オオバン』 亀田佳代子主任学芸員の話 ・わが町トピックス 「水族展示の舞台裏探検」	あいあい AI 滋賀
25	民具とくらし(33) 琵琶湖博物館収蔵品から「チャダ茶樽」	京都新聞	18	大津中央ロータリークラブ設立20周年記念事業「都市の水循環を考える『まちなかの川』フォーラムで琵琶湖博物館研究顧問の嘉田由紀子京都精華大教授が講演	毎日新聞
28	「お魚流域マップ」説明会が琵琶湖博物館で開催、県内外から220人が参加	朝日新聞	18	民具とくらし(36) 琵琶湖博物館収蔵品から「テアプリ(火鉢)」	京都新聞
28	生息地調査 参加を 琵琶湖お魚ネットワーク琵琶湖博物館で初交流会	中日新聞	19	琵琶湖博物館入館500万人超	朝日新聞
28	琵琶湖お魚ネットワーク 参加38団体が琵琶湖博物館で交流会	京都新聞	19	来館者500万人に 琵琶湖博物館記念セレモニー	毎日新聞
3 1	[オピニオン 新聞時評] マータイさんに学ぶ環境への視点 琵琶湖博物館研究顧問の嘉田由紀子京都精華大教授	毎日新聞	19	琵琶湖博物館500万人達成	京都新聞
2	琵琶湖博物館でコイ科の魚 “祖先” 紹介 ディスasterコドン国内では初公開に	産経新聞	19	琵琶湖博物館五百万人目の入館者迎える	中日新聞
2	湖国の鳥『ホンハジロ』 亀田佳代子主任学芸員の話 ・観察会「川虫探検」の案内	あいあい AI 滋賀	19	Measures pushed to net alien fish 中井克樹主任学芸員のコメント	読売新聞
4	琵琶湖の生態取り戻そう 県民一体、「琵琶湖博物館うおの会」が立ち上げたネットワークが始動	みんなの滋賀新聞(見本誌)	20	琵琶湖博物館入館者500万人達成	産経新聞
4	民具とくらし(34) 琵琶湖博物館収蔵品から「ナツタカゴ(鉦籠)」	京都新聞	20	大津中央ロータリークラブ設立20周年記念「都市の水循環を考える『まちなかの川』フォーラムで琵琶湖博物館研究顧問の嘉田由紀子京都精華大教授が「川と暮らし」と題して講演	京都新聞
5	「化石のレプリカをつくろう」・観察会「川虫探検」の案内	しが県民情報	21	子ども達の才能発見! 「地域子ども教室推進事業」(文部科学省委託事業)に琵琶湖博物館も参画	朝日新聞
5	科学への好奇心、大満足! 「地域子ども教室推進事業」(文部科学省委託事業)に琵琶湖博物館も参画	朝日新聞	23	湖国の鳥『カイツブリ』 亀田佳代子主任学芸員の話	あいあい AI 滋賀
9	湖国の鳥『バン』 亀田佳代子主任学芸員の話	あいあい AI 滋賀	24	琵琶湖の魚マップ作ろう 「お魚ネットワーク」呼び掛け、問い合わせは琵琶湖博物館内「うおの会」へ	産経新聞(夕刊)
11	南郷洗堰100周年記念「水辺と生き物-琵琶湖の環境を考える」シンポジウム	毎日新聞			

月日	記事タイトル	新聞社名	月日	記事タイトル	新聞社名
3 25	民具とくらし(37) 琵琶湖博物館収蔵品から「メクリヨキ」	京都新聞	3 29	[オピニオン 新聞時評] 万博は「人と人」「人と自然」の視点を 琵琶湖博物館研究顧問の嘉田由紀子京都精華大教授	毎日新聞
25	「大分合同新聞社賞 '05」表彰式 琵琶湖博物館と共同で発掘した安心院町教育委員会が受賞	大分合同新聞	30	湖国の鳥 『カンムリカイツブリ』 亀田佳代子主任学芸員の話	あいあい AI滋賀
26	「タンポポと野草の観察会」の案内	読売新聞			

4 雑誌等掲載記録

月	記事テーマ	掲載雑誌名等	月	記事テーマ	掲載雑誌名等
4	写真資料提供 『イサザ』と琵琶湖博物館の案内 展示紹介 「糸を紡いで布を織るー民具の復元・再現・体験ー」 琵琶湖博物館の催し物案内 ・ギャラリー展示 「滋賀の植物標本・写真展 ー村瀬忠義植物コレクションー」 ・「体験学習の日」プログラム 「わら細工を楽しもう」 ・「はしかけ」登録講座 ギャラリー展示 「滋賀の植物標本・写真展 ー村瀬忠義植物コレクションー」紹介 ギャラリー展示 「糸を紡いで布を織る」と県博協スタンプラリーの紹介 淡海の博物館・美術館 スタンプラリー2004 施設日より ・ギャラリー展示 「糸を紡いで布を織る ー民具の復元・再現・体験ー」 ・「体験学習の日」プログラム 「丸子船のペーパークラフトをつくろう」・「機織り体験をしよう」 琵琶湖博物館 平成16年度「田んぼ体験教室」・「里山体験教室」参加者募集 写真資料提供 『ニゴロブナ』 琵琶湖博物館の紹介 琵琶湖博物館の紹介 特集 地機織り入門 琵琶湖博物館の紹介 琵琶湖博物館の催し物案内 ・ギャラリー展示 「糸を紡いで布を織る ー民具の復元・再現・体験ー」 ・博物館講座「丸子船の不思議な世界」 ・「体験学習の日」プログラム「琵琶湖のプランクトンを観察しよう」	Pado No.002 4月号 民具マンスリー 第37巻 1号 日経サイエンス 390号 マンスリーガイド京都・滋賀・奈良 れいかる<春号> vol.32 滋賀プラス1 (県広報誌) vol.6 特別号(春) 滋賀プラス1 (県広報誌) vol.59 4月号 にゅーすもりやま No.364 ビワズ通信 No.41(春号) 電車&ウォーク 日帰りハンディガイド (JR西日本) <春> ロイヤルオークホテル Duet vol.86 (4・5月号) Conomity (高速道路周辺エリアレジャーガイド) No. 7 博物館研究 No.431	4	“見てビックリ！触って発見 まるでテーマパークの様な博物館” 琵琶湖博物館の紹介 5 写真資料提供 『ビワヒガイ』と琵琶湖博物館の案内 県博協スタンプラリー・琵琶湖博物館の紹介 観察会「琵琶湖のプランクトンを観察しよう」案内 琵琶湖博物館の紹介 地域協働合校子どもレポート 伯母川博物館 琵琶湖博物館の催し物案内 ・ギャラリー展示 「糸を紡いで布を織る ー民具の復元・再現・体験ー」 ・「体験学習の日」プログラム「機織り体験をしよう」 ・ギャラリー展示 「滋賀の植物標本・写真展 ー村瀬忠義植物コレクションー」 ・「体験学習の日」プログラム「丸子船のペーパークラフトをつくろう」 琵琶湖博物館の案内 「におのうみ」の人気メニューはバスバーガーとバス天丼！ 淡海生涯カレッジ草津校 「琵琶湖の生態系の現状」中井克樹主任学芸員の問題発見講座の案内 琵琶湖博物館の催し物案内 ・ギャラリー展示 「糸を紡いで布を織る ー民具の復元・再現・体験ー」 ・「体験学習の日」プログラム「レインスティックをつくろう」 琵琶湖博物館「はしかけ制度」紹介 桑原主任学芸員の話 琵琶湖博物館の催し物案内 ・企画展示「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」 ・観察会「水辺の貝を調べてみよう」 ・観察会「びわ湖を船で体験」	<関西>おでかけ大好き '04-05 Pado No.003 5月号 滋賀プラス1 (県広報誌) vol.60 5月号 子供の科学 第67巻 第5号 関西じゃらん 69号 広報くさつ No. 888 日経サイエンス 391号 納得工房&住まいの夢工場1日体験ツアー 積水ハウス名古屋北営業所 モーニングくさつ vol.26 No.5 広報くさつ No. 889 博物館研究 No.432 おうみネット No.41 Relax 6~8月号

月	記事テーマ	掲載雑誌名等	月	記事テーマ	掲載雑誌名等
5	<ul style="list-style-type: none"> ・観察会「ミドリセンチコガネを探しにいこう」 ・観察会「夏のスキー場の植物観察会」 ・夏休み自由研究講座 		6	<ul style="list-style-type: none"> ・「はしかけ」講座 ・夏休み自由研究講座 	日経サイエンス 392号
6	施設だより 体験学習の日「レインスティックをつくろう」と写真資料提供『ブルーギル』・『ブラックバス』 琵琶湖博物館の施設紹介 施設無料開放「体験学習の日」 琵琶湖博物館の施設紹介 琵琶湖博物館の催し物案内 ・「体験学習の日」プログラム「レインスティックをつくろう」 ・企画展の連続講座「植物の不思議・なんでやろう」 ・夏休み自由研究講座 ギャラリー展「糸を紡いで布を織る」紹介 体験学習の日「レインスティックをつくろう」案内 琵琶湖博物館の施設紹介 琵琶湖博物館の催し物案内 ・ギャラリー展示「糸を紡いで布を織るー民具の復元・再現・体験ー」 ・アジア考古学研究機構・連続講座「アジア基層文化の探求」 ・「体験学習の日」プログラム「レインスティックをつくろう」 ・水族企画展示「植物のある暮らしー水生植物と憩いの空間ー」 ・企画展の連続講座「植物の不思議・なんでやろう」 ・夏休み自由研究講座 ・観察会「水辺の貝を調べてみよう」 琵琶湖博物館の催し物案内 ・企画展示「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」 ・水族企画展示「植物のある暮らしー水生植物と憩いの空間ー」 ・企画展の連続講座「植物の不思議・なんでやろう」	滋賀プラス1（県広報誌）vol.61 あんふぁん 広報くさつ No. 890 Sanikleen Life vol.28 びいめーる vol.38 モーニングくさつ vol.25 No.6 にゅーすもりやま No.369 Urban net work 近くていい旅電車&ウォーク（JR西日本沿線情報誌） No.170 NEEDS（県立草津文芸会館文化情報誌） 6月号 博物館研究 No.433	7	施設だより ・夏休み自由研究講座 ・博物館講座「回転実験室で水槽実験を！」 ・企画展示「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」 ・水族企画展示「植物のある暮らしー水生植物と憩いの空間ー」 ・観察会「水辺の貝を調べてみよう」・「びわ湖を船で体験」・「ミドリセンチコガネを探しにいこう」・「夏のスキー場の植物観察会」 琵琶湖博物館の施設紹介 琵琶湖博物館の催し物案内 ・企画展示「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」 ・水族企画展示「植物のある暮らしー水生植物と憩いの空間ー」 ・観察会「水辺の貝を調べてみよう」・「ミドリセンチコガネを探しにいこう」・「夏のスキー場の植物観察会」 ・企画展の連続講座「植物の不思議・なんでやろう」 ・夏休み自由研究講座 ・博物館講座「回転実験室で水槽実験を！」	いっとく No.25 6月号 滋賀プラス1（県広報誌）vol.62 電車&ウォーク 日帰りハンディガイド（JR西日本）＜夏＞ れいんぼう（県立安曇川文芸会館湖西文化情報誌） 7月号

月	記事テーマ	掲載雑誌名等	月	記事テーマ	掲載雑誌名等
7	<ul style="list-style-type: none"> ・生き物飼い方講座 ・企画展連続講座 「のびる・ひらく・ひろがる 植物が動くとき」(全3回) ・博物館講座「水生生物の撮影の実際」(全2回) <p>企画展示「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水族企画展示「植物のある暮らし -水生植物と憩いの空間-」の案内 <p>琵琶湖博物館の施設紹介</p> <p>琵琶湖博物館の紹介</p> <p>夏休み自由研究講座案内</p> <p>琵琶湖博物館の紹介</p> <p>夏休み自由研究講座案内</p> <p>琵琶湖博物館の紹介</p> <p>琵琶湖博物館の紹介</p> <p>琵琶湖博物館の催し物案内</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夏休み自由研究講座 ・博物館講座「回転実験室で水槽実験を！」 ・観察会「水辺の貝を調べてみよう」・「びわ湖を船で体験」・「ミドリセンチコガネを探しにいこう」・「夏のスキー場の植物観察会」 <p>体験学習の日プログラムの案内</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「紙すきをしよう」・「草木染をしよう」・「木の実で遊ぼう」 <p>観察会「びわ湖を船で体験」の案内</p> <p>第13回全国ボランティアフェスティバルびわこ案内</p> <p>琵琶湖博物館の施設紹介</p> <p>琵琶湖博物館の施設と企画展示「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」の紹介</p> <p>企画展示「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」</p> <p>水族企画展示「植物のある暮らし -水生植物と憩いの空間-」の案内</p>	<p>れいかる<夏号> vol.33</p> <p>Clife (くらしと中日)</p> <p>大人組 Kansai vol.2</p> <p>YOU通信 vol.88</p> <p>理科教室 No.595</p> <p>モーニングくさつ vol.28 No.7</p> <p>びわこクルーズ<夏号> (ASA)ぶんぶん 第156号</p> <p>NPO法人CASN</p> <p>遊び・体験ワクワク情報誌 18号</p> <p>にゅーすもりやま No.371</p> <p>広報くさつ No. 893</p> <p>Conomity 第2号</p> <p>近江妙蓮もりやまの旅</p> <p>PORTAL (ポータル) no.036</p>	7	<p>琵琶湖博物館の催し物案内</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ギャラリー展示「糸を紡いで布を織る -民具の復元・再現・体験-」 ・「体験学習の日」プログラム「レインスティックをつくらう」 <p>琵琶湖博物館の催し物案内</p> <ul style="list-style-type: none"> ・企画展示「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」 ・水族企画展示「植物のある暮らし -水生植物と憩いの空間-」 ・企画展連続講座「のびる・ひらく・ひろがる 植物が動くとき」(全3回) <p>琵琶湖博物館の案内</p>	<p>日経サイエンス 393号</p> <p>博物館研究 No.434</p> <p>琵琶湖線に乗って (JR西日本)</p>
	<p>琵琶湖博物館の紹介</p> <p>琵琶湖博物館の紹介</p> <p>琵琶湖博物館の催し物案内</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夏休み自由研究講座 ・博物館講座「回転実験室で水槽実験を！」 ・観察会「水辺の貝を調べてみよう」・「びわ湖を船で体験」・「ミドリセンチコガネを探しにいこう」・「夏のスキー場の植物観察会」 <p>体験学習の日プログラムの案内</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「紙すきをしよう」・「草木染をしよう」・「木の実で遊ぼう」 <p>観察会「びわ湖を船で体験」の案内</p> <p>第13回全国ボランティアフェスティバルびわこ案内</p> <p>琵琶湖博物館の施設紹介</p> <p>琵琶湖博物館の施設と企画展示「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」の紹介</p> <p>企画展示「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」</p> <p>水族企画展示「植物のある暮らし -水生植物と憩いの空間-」の案内</p>	<p>びわこクルーズ<夏号> (ASA)ぶんぶん 第156号</p> <p>NPO法人CASN</p> <p>遊び・体験ワクワク情報誌 18号</p> <p>にゅーすもりやま No.371</p> <p>広報くさつ No. 893</p> <p>Conomity 第2号</p> <p>近江妙蓮もりやまの旅</p> <p>PORTAL (ポータル) no.036</p>	8	<p>写真資料提供 『アユ』と琵琶湖博物館の案内</p> <p>琵琶湖博物館の催し物案内</p> <ul style="list-style-type: none"> ・企画展示「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」 ・水族企画展示「植物のある暮らし -水生植物と憩いの空間-」 ・企画展の連続講座「植物の不思議・なんでやろう」 <p>施設だより「水族飼育員と話そう」・「月曜体験コンサート」</p> <p>琵琶湖博物館の施設紹介</p> <p>「環境の歴史と人間」草津市民交流プラザ 宮本真二主任学芸員の講演会</p> <p>琵琶湖博物館学芸員募集</p> <p>琵琶湖&川の魚</p> <p>琵琶湖博物館の催し物案内</p> <ul style="list-style-type: none"> ・企画展示「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」 ・水族企画展示「植物のある暮らし -水生植物と憩いの空間-」 ・博物館講座「水生生物の撮影の実際」(全2回) ・「体験学習の日」プログラム「紙すきをしよう」 	<p>Pado No.006 8月号</p> <p>日経サイエンス 394号</p> <p>滋賀プラス1 (県広報誌) vol.63</p> <p>ステーション 190号</p> <p>モーニングくさつ vol.25 No.8</p> <p>Science vol.305 No.5686</p> <p>平成16年度版 わたしたちの滋賀県</p> <p>博物館研究 No.435</p>

月	記事テーマ	掲載雑誌名等	月	記事テーマ	掲載雑誌名等
8	琵琶湖博物館の催し物案内 ・水族企画展示「植物のある暮らし -水生植物と憩いの空間-」 ・「回転実験室で水槽実験を！」	子供の科学 第67巻 第8号	10	・観察会「秋の棚田の観察会」・「ビワマス採卵現場を見学してみませんか」・「琵琶湖のヨシを観察してみよう」・「秋の里山探検」 ・「はしかけ」講座 ・平成16年度 琵琶湖博物館研究発表会（湖西地域）『水辺移行帯』	
9	「体験学習の日」プログラム「紙すきをしよう」の案内 琵琶湖博物館の催し物案内 ・企画展示「のびる・ひらく・ひろがる -植物がうごくとき-」 ・水族企画展示「植物のある暮らし -水生植物と憩いの空間-」 ・企画展連続講座「のびる・ひらく・ひろがる -植物が動くとき-」（全3回） 琵琶湖博物館の紹介	にゅーすもりやま No.373 日経サイエンス 395号 オレンジページ 第20巻 第17号		琵琶湖博物館の催し ・企画展示「のびる・ひらく・ひろがる -植物がうごくとき-」 ・「体験学習の日」プログラム「草木染をしよう」・「木の実で遊ぼう」・「餅つきをしよう」・「博物館でスゴロクをしよう」 施設だより 観察会「秋の棚田の観察会」・「ビワマス採卵現場を見学してみませんか」・「琵琶湖のヨシを観察してみよう」	れいかる＜秋号＞ vol.34 滋賀プラス1（県広報誌） vol.65
	琵琶湖博物館の催し物案内 ・企画展示「のびる・ひらく・ひろがる -植物がうごくとき-」 ・水族企画展示「植物のある暮らし -水生植物と憩いの空間-」 ・観察会「化石観察会」・「秋の棚田の観察会」・「ビワマス採卵現場を見学してみませんか」	れいんぼう（県立安曇川文芸会館湖西文化情報誌） 9月号		琵琶湖博物館の催し物案内 ・企画展示「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」 ・水族企画展示「植物のある暮らし -水生植物と憩いの空間-」 ・博物館講座「水生生物の撮影の実際」（全2回） ・観察会「化石観察会」 ・「体験学習の日」プログラム「紙すきをしよう」	日経サイエンス 396号
	企画展示「のびる・ひらく・ひろがる -植物がうごくとき-」の案内 ・水族企画展示「植物のある暮らし -水生植物と憩いの空間-」	全科協ニュース vol.34		琵琶湖博物館の催し物案内 ・企画展示「のびる・ひらく・ひろがる -植物がうごくとき-」 ・「体験学習の日」プログラム「草木染をしよう」 ・観察会「秋の棚田の観察会」 ・「ビワマス採卵現場を見学してみませんか」・「琵琶湖のヨシを観察してみよう」・「秋の里山探検」 ・「体験学習の日」プログラム「木の実で遊ぼう」・「プランクトンの模型をつくろう」	NEEDS（県立草津文芸会館文化情報誌）10月号
	琵琶湖博物館の催し物案内 ・企画展示「のびる・ひらく・ひろがる -植物がうごくとき-」 ・観察会「秋の棚田の観察会」 「ビワマス採卵現場を見学してみませんか」 ・「体験学習の日」プログラム「草木染をしよう」	博物館研究 No.436		観察会「化石観察会」の案内	中学受験 進学リーダー 第16巻 10号
	博物館講座「水生生物の撮影の実際」の案内	子供の科学 第67巻		琵琶湖博物館の紹介	GLOBE No. 39
10	企画展示「のびる・ひらく・ひろがる -植物がうごくとき-」の案内 琵琶湖博物館の催し物案内 ・「体験学習の日」プログラム「草木染をしよう」・「木の実で遊ぼう」	第9号広報くさつ No.879 びいめーる vol.40		「体験学習の日」プログラム「草木染をしよう」の案内	にゅーすもりやま No.376

月	記事テーマ	掲載雑誌名等	月	記事テーマ	掲載雑誌名等
10	<p>体験学習プログラム「プランクTONの模型をつくろう」の案内</p> <p>琵琶湖博物館で“はしかげさん”活躍中</p> <p>琵琶湖博物館の紹介</p> <p>琵琶湖博物館の施設紹介</p> <p>琵琶湖博物館の施設紹介</p> <p>琵琶湖博物館の紹介</p> <p>琵琶湖博物館の催し物案内 ・企画展示「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」 ・観察会「化石観察会」</p>	<p>ウーマンライフ vol.5</p> <p>滋賀リビング 1058号</p> <p>日帰り紀行 秋冬 (JTB西日本)</p> <p>Conomity (高速道路周辺エリアレジャーガイド) No.11</p> <p>電車&ウォーク 日帰りハンディガイド (JR西日本) <秋></p> <p>愛知トヨタ情報誌 F U N 第7号</p> <p>子供の科学 第67巻 第10号</p>	11	<p>写真資料提供 『アユ』と琵琶湖博物館の案内</p> <p>琵琶湖博物館の催し物案内 ・ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しよう -プランクTONの不思議-」 ・研究発表会「博物館は学びの場となりうるのか」 ・観察会「下物の水鳥を観察してみよう -野外観察と水鳥のお話」 ・「体験学習の日」プログラム「餅つきをしよう」</p> <p>琵琶湖博物館の催し物案内 ・企画展示「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」 ・観察会「秋の里山探検」</p> <p>琵琶湖博物館の催し物案内 ・企画展示「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」 ・「体験学習の日」プログラム「草木染めをしよう」 ・観察会「秋の棚田の観察会」 ・「ビワマス採卵現場を見学してみませんか」・「琵琶湖のヨシを観察してみよう」</p>	<p>Pado No.009 11月号</p> <p>博物館研究 No.438</p> <p>子供の科学 第67巻 第11号</p> <p>日経サイエンス 397号</p>
11	<p>施設だより ・体験学習プログラム「プランクTONの模型をつくろう」 ・「体験学習の日」プログラム「木の実で遊ぼう」 ・平成16年度 琵琶湖博物館研究発表会 (湖西地域) 『水辺移行帯』</p> <p>観察会「秋の里山探検」・「真冬の昆虫採集」の案内</p> <p>「体験学習の日」プログラムの案内 ・「スゴクを楽しもう」・「縄文コースターをつくろう」・「化石のレプリカをつくろう」</p> <p>琵琶湖博物館の催し物案内 ・企画展示「のびる・ひらく・ひろがる -植物がうごくとき-」 ・ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しよう -プランクTONの不思議-」 ・観察会「秋の里山探検」「真冬の昆虫採集」「下物の水鳥を観察してみよう」 ・体験学習プログラム「プランクTONの模型をつくろう」 ・「体験学習の日」プログラム「木の実で遊ぼう」・「餅つきをしよう」 ・平成16年度 琵琶湖博物館研究発表会 (湖西地域) 『水辺移行帯』・『博物館は学びの場となりうるのか』</p>	<p>滋賀プラス1 (県広報誌) vol.66</p> <p>にゅーすもりやま No.377</p> <p>遊び・体験ワクワク情報誌 19号</p> <p>れいんぼう (県立安曇川文芸会館湖西文化情報誌) 11月号</p>	12	<p>施設だより ・研究発表会「博物館は学びの場となりうるのか」 ・「体験学習の日」プログラム「餅つきをしよう」 ・観察会「下物の水鳥を観察してみよう -野外観察と水鳥のお話」</p> <p>「体験学習の日」プログラム「餅つきをしよう」</p> <p>ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しよう -プランクTONの不思議-」の案内</p> <p>琵琶湖博物館の紹介</p> <p>写真資料提供 『タイリクバラタナゴ』と琵琶湖博物館の案内</p> <p>琵琶湖博物館の施設紹介</p> <p>ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しよう -プランクTONの不思議-」の案内</p>	<p>滋賀プラス1 (県広報誌) vol.67</p> <p>にゅーすもりやま No.379</p> <p>NEEDS (県立草津文芸会館文化情報誌) 12月号</p> <p>Conomity (高速道路周辺エリアレジャーガイド) No.13</p> <p>Pado No.010 12月号</p> <p>電車&ウォーク 日帰りハンディガイド (JR西日本) <冬></p> <p>滋賀旅人 (県イベント情報誌) <冬号></p>

月	記事テーマ	掲載雑誌名等	月	記事テーマ	掲載雑誌名等
12	<p>イベント情報 「ミクロの世界を探検しよう -プランクトンの不思議-」</p> <p>「やさしい川、こわい川とまるごとのかかわりを」 -子どもと川・水の「距離」を縮めるには- 琵琶湖博物館研究顧問 嘉田由紀子京都精華大教授の話</p> <p>琵琶湖博物館の催し物案内</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しよう -プランクトンの不思議-」 ・博物館講座「淡水魚類学専門講座」連続講座「琵琶湖博物館の自己紹介」 ・観察会「冬の里山の観察会」 ・「体験学習の日」プログラム「博物館でスゴロクを楽しもう」 <p>「プランクトンの模型をつくらう」・「真冬の昆虫採集」の案内</p> <p>琵琶湖博物館の催し物案内</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究発表会「水辺移行帯」 ・観察会「秋の里山探検」・「真冬の昆虫採集」 ・企画展示「のびる・ひろく・ひろがる -植物がうごくとき-」 ・体験学習プログラム「プランクトンの模型をつくらう」 ・「木の実で遊ぼう」 ・「はしかけ講座」 	<p>PORTAL (ポータル) no.040</p> <p>河川文化 第28号</p> <p>博物館研究 No.439</p> <p>子供の科学 第67巻 第12号</p> <p>日経サイエンス 398号</p>	1	<p>写真資料提供 『ワカサギ』</p> <p>“琵琶湖の現在・過去・未来を五感で学ぼう” 琵琶湖博物館の紹介</p> <p>“湖西の風に吹かれて” 「ピワコダス」と「丸子船」について 戸田孝主任学芸員の話</p> <p>琵琶湖博物館の催し物案内</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しよう -プランクトンの不思議-」 ・「体験学習の日」プログラム「縄文コースターをつくらう」 <p>琵琶湖博物館の催し物案内</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しよう -プランクトンの不思議-」 ・「体験学習の日」プログラム「博物館でスゴロクを楽しもう」 <p>琵琶湖博物館の催し物案内</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しよう -プランクトンの不思議-」 ・「体験学習の日」プログラム「餅つきをしよう」 ・研究発表会「博物館は学びの場となりうるのか」 ・観察会「下物の水鳥を観察してみよう -野外観察と水鳥のお話」 	<p>2291Kakami vol. 2</p> <p>レインボークラブ 冬号 vol. 26</p> <p>わっと 冬号 No.619</p> <p>博物館研究 No.440</p> <p>子供の科学 第68巻 第1号</p> <p>日経サイエンス 399号</p>
1	<p>琵琶湖博物館の施設紹介</p> <p>写真資料提供 『ギギ』と琵琶湖博物館の案内</p> <p>“とっておき！おでかけ情報” 琵琶湖博物館と催し物案内</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しよう」 ・連続講座「琵琶湖博物館の自己紹介 博物館の使い方・楽しみ方」 <p>写真資料提供 『トンネル水槽』</p> <p>「体験学習の日」プログラム「博物館でスゴロクを楽しもう」</p> <p>世界の自然保護基金ジャパンとブリヂストンが共同で「びわ湖生命の水プロジェクト」開始 常任理事の川那部浩哉館長のコメント</p>	<p>関西ファミリー・ウォーカー<冬号> (増刊号)</p> <p>Pado No.011 1月号</p> <p>滋賀プラス1 (県広報誌) vol.68 1月号</p> <p>うおーたんのこどもプラスワン 1月号</p> <p>にゅーすもりやま No.381</p> <p>PORTAL (ポータル) no.041</p>	2	<p>琵琶湖博物館の施設紹介</p> <p>ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しよう -プランクトンの不思議-」の案内</p> <p>“館内でたのしもう” ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しよう」の案内</p> <p>施設だより 「縄文コースターをつくらう」・「水族展示の舞台裏」</p> <p>写真資料提供 『オイカワ』と琵琶湖博物館の案内</p> <p>“滋賀のユニバーサルデザイン事始め” 琵琶湖博物館の施設や展示の取り組み 芳賀裕樹主任学芸員の話</p> <p>“滋賀のユニバーサルデザイン事始め” 琵琶湖博物館の施設や展示の取り組み 芳賀裕樹主任学芸員の話</p>	<p>てくてく歩き (22)「琵琶湖近江路」</p> <p>わーずわーず No.1</p> <p>いっとく No.33 2月号</p> <p>滋賀プラス1 (県広報誌) vol.69 2月号</p> <p>Pado No.012 2月号</p> <p>リビング滋賀 1072号</p> <p>こがも通信 第158号</p>

月	記事テーマ	掲載雑誌名等	月	記事テーマ	掲載雑誌名等
2	琵琶湖博物館「はしかけ」 “魚好き集まれ！琵琶湖お魚ネットワーク交流会”の案内 琵琶湖博物館の催し物案内 ・「琵琶湖お魚ネットワーク交流会」・「縄文コースターをつくろう」・「水族展示の舞台裏」・「化石のレプリカをつくろう」・「川虫探検」 ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しようープランクトンの不思議ー」の案内 琵琶湖博物館の催し物案内 ・ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しようープランクトンの不思議ー」 ・博物館講座「淡水魚類学専門講座」 ・観察会「冬の里山の観察会」 「体験学習の日」プログラム 「博物館でスゴクを楽しもう」 ・連続講座「琵琶湖博物館の自己紹介 博物館の使い方・楽しみ方」 鼎談「市民とともに創る博物館」(1) 布谷知夫上席総括学芸員 ・ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しようープランクトンの不思議ー」の案内 ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しようープランクトンの不思議ー」の案内 写真資料提供 『ハリヨ』と琵琶湖博物館の案内	モーニングくさつ vol.26 No.2 びいめーる vol.42 子供の科学 第68巻 第2号 日経サイエンス 400号 博物館研究 No.441 NEEDS (県立草津文芸会館文化情報誌) 2月号 Pado No.013 3月号	3	琵琶湖博物館の施設紹介 施設だより 「化石のレプリカをつくろう」・「川虫探検」 「体験学習の日」プログラム 「化石のレプリカをつくろう」 ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しようープランクトンの不思議ー」の案内 琵琶湖博物館の催し物案内 ・ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しようープランクトンの不思議ー」 ・「淡海の川ー水害、そして川とともに生きるー」 ・観察会「水族展示の舞台裏」 ・「川虫探検」・「タンポポと野草の観察会」 ・「体験学習の日」プログラム 「化石のレプリカをつくろう」 琵琶湖博物館の催し物案内 ・ギャラリー展示「淡海の川ー水害、そして川とともに生きるー」 ・観察会「琵琶湖のプランクトンを見よう」 ・琵琶湖わくわく探検隊「春の草花でしおりをつくろう」 ・「オサムシの模型を作ろう」 ・「世界の楽器をつくろう」 琵琶湖博物館の催し物案内 ・ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しようープランクトンの不思議ー」 ・「淡海の川ー水害、そして川とともに生きるー」 ・琵琶湖わくわく探検隊「春の草花でしおりをつくろう」 ・観察会「タンポポと野草の観察会」 ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しようープランクトンの不思議ー」の案内 琵琶湖博物館の紹介	こどもと遊ぼう 春・夏号(関西版) 滋賀プラス1 (県広報誌) vol.70 3月号 にゅーすもりやま No.384 全科協ニュース vol.35 れいんぼう (県立安曇川文芸会館湖西文化情報誌) 3月号 遊び・体験ワクワク情報誌 20号 博物館研究 No.442 家庭教育ニュースレター 家族の絆 春号 (西宮市教育委員会) 文藝春秋 3月特別号
3	ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しようープランクトンの不思議ー」の案内 琵琶湖博物館の催し物案内 ・ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しようープランクトンの不思議ー」 ・観察会「水族展示の舞台裏」 琵琶湖博物館の催し物案内 ・ギャラリー展示「ミクロの世界を探検しようープランクトンの不思議ー」 ・「体験学習の日」プログラム 「縄文コースターをつくろう」 ・観察会「水族展示の舞台裏」	わーずわーす No.2 子供の科学 第68巻 第3号 日経サイエンス 401号			

5 テレビ放映・ラジオ放送記録

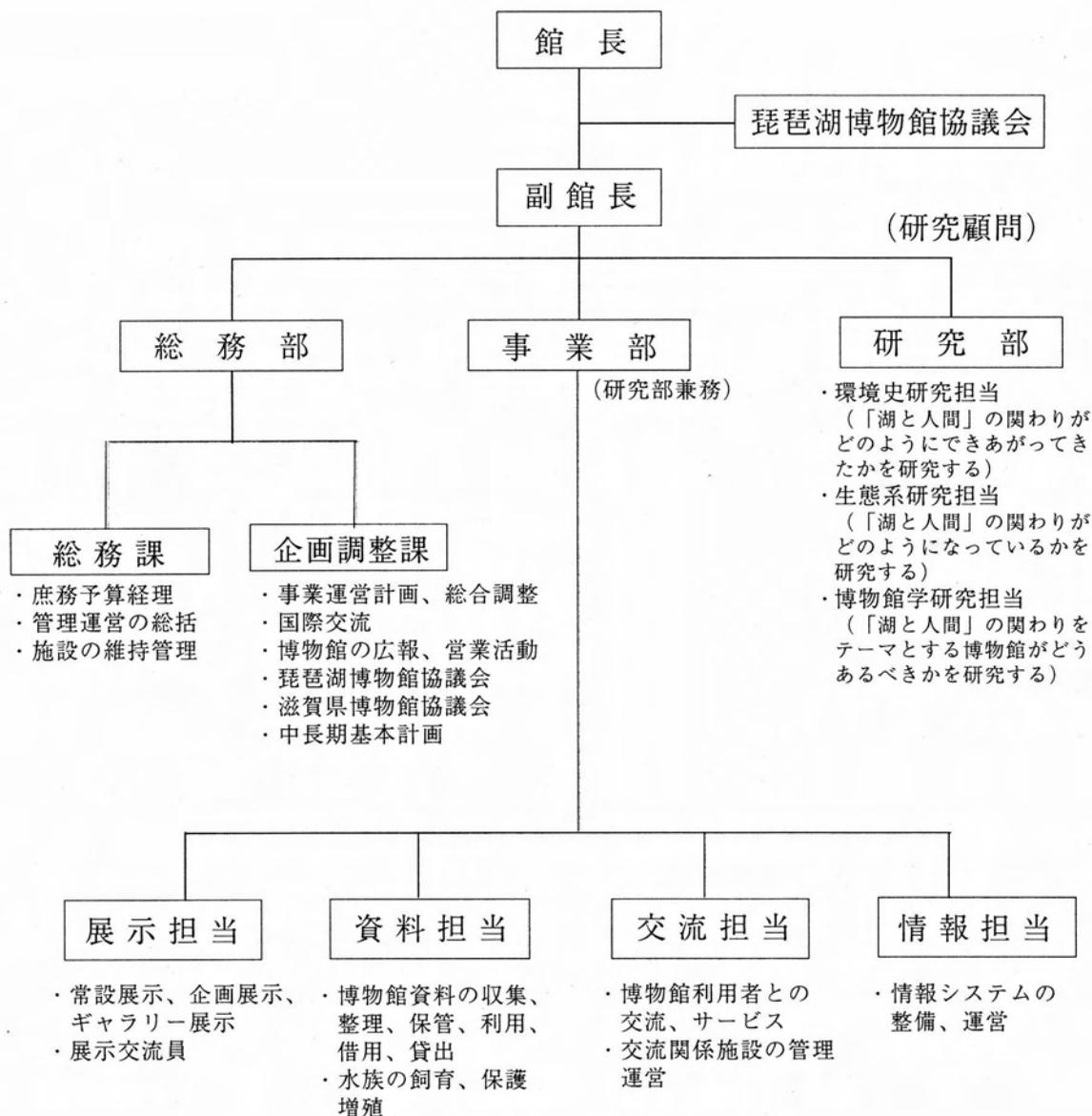
放送日	番組名	内 容	媒 体	
4	2	県政テレビ 夕刊プラスワン	ギャラリー展示	びわ湖放送
	2	ウィークリーファイルギフト	カワウ	岐阜放送
	4	うぉーたんのこどもプラスワン	博物館紹介	びわ湖放送
	7	レイクサイドモーニング	はしかけ制度紹介	F M滋賀
	7	THE ワイド	カミツキガメに関連して水族展示の撮影	日本テレビ
	11	経済発見	琵琶湖をめぐる環境問題の変遷と昔の庶民の暮らしぶり	テレビ大阪
	19	BBCニュース	魚の映像	びわ湖放送
	21	滋賀プラスワンインフォメーション	催し案内	F M滋賀
	30	知っとこ滋賀	ギャラリー展示	KBSラジオ
	30		ギャラリー展示	滋賀ケーブルネットワーク
			水族トピック展示 ホンモロコの稚魚について	滋賀ケーブルネットワーク
5	5	Lake Side Morning77 平和堂 MY DAILY LIFE	地域科学館連携支援事業「伯母川探検隊-地域の人とつくる伯母川博物館」	F M滋賀
	7	関西ニュースいちばん おうみ発610	ギャラリー展示	NHK大津
	12	びびっとびわ湖	田んぼ体験教室	びわ湖放送
	21	BBCニュース	来館者減と対応	びわ湖放送
	22	板東英二のGOODスマイル 新発見!ニッポンの家	富江家、昭和史展示品	テレビ大阪
	28	県政テレビ 夕刊プラスワン	横須賀市立大楠中学校の体験学習について	びわ湖放送
	29	PROTO ZIP-CITY STREET	博物館紹介	エフエム名古屋
	29	ドライビング情報	琵琶湖博物館の紹介	エフエム名古屋
6	4	BBCニュース		びわ湖放送
	6	所さんの目がテン	琵琶湖特集として琵琶湖の現状(ブルーゲル)	読売テレビ
		お元気ですか!市民のみなさん	水源見学バスの旅	吹田ケーブルテレビジョン
7	2	News ゆう	外来種新法とびわこ	朝日放送
	15	News ゆう	カワウ	朝日放送
8	2	かんさいニュース一番	夏休み月曜開館イベント コンサート・水族飼育員と話そう	NHK大津
	3	涼しい顔して夏を乗り切ろう! -エコスタイルのすすめ-	トンネル水槽	びわ湖放送
	5	県政夕刊プラスワン	企画展・博物館全体	びわ湖放送
	12	BBCニュース	ニッポンバラタナゴ稚魚	びわ湖放送
	13	関西ニュースいちばん おうみ発610	ニッポンバラタナゴ稚魚	NHK大津
	20	得ダネ!滋賀だより	琵琶湖博物館を紹介	KBS京都
	24	県政夕刊プラスワン	ニッポンバラタナゴ	びわ湖放送

放送日	番組名	内 容	媒 体	
10	5	Heartful Lake ーみんなの節水宣言ー	琵琶湖の自然史・貴重さ	KBS京都
	12	村上祐子のラジオかまい隊!	ビワコオオナマズの生態	KBS京都
	11	ニュース10	北海道ナウマンゾウ関連	NHK
11	29		ヨシに付着している微小生物の生態について	NHK
	30	とってもインサイト	ブラックバス問題	毎日放送
12	3	滋賀プラスワン インフォメーション	催し案内	FM滋賀
	7	びびっとびわ湖&TV+1	琵琶湖に冬やってくる水鳥の種類	びわ湖放送
	23	びわ湖放送	プランクトンのギャラリー展	びわ湖放送
1	17	(21:00 の番組の中で使う)	「サワガニ」の映像	読売テレビ
2	10	関西ニュースいちばんおうみ発610	プランクトンのギャラリー展	NHK大津
		かんさいニュース一番	プランクトンのギャラリー展	NHK大津
		関西ニュースいちばんおうみ発610	「琵琶湖における蟹気楼報告会」の内容について	NHK大津
		Dの嵐	南北半球の渦の向きについて	日本テレビ
	18	生活ほっとモーニング・週末は本格派	伊賀焼の材料の土について	NHK総合

Ⅲ 組織および運営

1 組織

○滋賀県立琵琶湖博物館



職員構成 (2004年4月1日現在)

区分	館長(非常勤)	行政職	研究職	教育職	小計	嘱託等	合計
人数(名)	1	12	28	2	43	15	58

2 滋賀県立琵琶湖博物館協議会

第1回

開催日時 2004年11月4日(木) 13:30~16:30

場 所 琵琶湖博物館セミナー室

第2回

開催日時 2005年3月16日(水) 13:30~16:30

場 所 琵琶湖博物館セミナー室

第4期委員

(任期：2002年9月1日~2004年8月31日)

氏名	区分	現職(2002年9月現在)
大町 一仁	学校教育	草津市立玉川小学校 教諭
澤 裕子	学校教育	高島町立高島中学校 教諭
西尾久美子	社会教育	エコ村ネットワーク 副会長
佐藤 祐子	社会教育	全国旅館生活衛生同業組合連合会青年部 経営者育成委員
荻野 和彦	学識者	滋賀県立大学環境科学部 教授
西野 嘉章	学識者	東京大学総合研究博物館 教授
内田 紘臣	学識者	串本海中公園センター 館長
染川 香澄	学識者	ハンズ・オン・プランニング 代表
岡村 恵子	学識者	毎日新聞大津支局 記者
横山 俊夫	学識者	京都大学大学院地球環境学堂 三才学林長、 (両任) 人文科学研究所 教授
西野麻知子	学識者	滋賀県琵琶湖研究所 総括研究員
木上 秀保	学識者	滋賀県脊椎損傷者協会 副会長
ブライアン ウィリアムズ	学識者	風景画家
藤丸 厚史	学識者	公募委員
山本真知子	学識者	公募委員

第5期委員

(任期：2004年9月1日~2006年8月31日)

氏名	区分	現職(2004年9月現在)
伊部 加代	学校教育	びわ町立びわ南小学校 教諭
長瀬 良文	学校教育	東近江市立五個荘中学校 教諭
西尾久美子	社会教育	エコ村ネットワーク 副理事長
佐藤 祐子	社会教育	全国旅館生活衛生同業組合連合会青年部
永田 俊	学識者	京都大学生態学研究センター 教授
篠原 徹	学識者	国立歴史民俗博物館民俗研究部 教授
内田 紘臣	学識者	串本海中公園センター 館長

村井 良子	学 識 者	(有)プランニング・ラボ 代表取締役
岡村 恵子	学 識 者	毎日新聞社大津支局 記者
横山 俊夫	学 識 者	京都大学大学院地球環境学堂 三才学林長、 同大人文学研究所 教授 両任
西野麻知子	学 識 者	滋賀県立琵琶湖研究所 総括研究員
木上 秀保	学 識 者	滋賀県脊髄損傷者協会 副会長
ブライアン ウィリアムズ	学 識 者	風景画家
沼井 哲男	学 識 者	公募委員
福田 正	学 識 者	公募委員

3 企画・計画

平成14年12月に策定した琵琶湖博物館中長期目標『地域だれでも・どこでも博物館』の実現をめざし、博物館の運営方針としてその具体的な取り組み方策および必要な環境の整備について明らかにするため、琵琶湖博物館中長期基本計画案および展示交流空間の更新整備に関する計画案の検討を行った。

検討にあたっては、平成15年4月に設置した館長を含めた検討チームの会議を月2回（15年度：21回、16年度：25回）行い、議事概要はその都度職員全員に提供し、また、学芸員全員による会議で説明し、意見交換を行った。このように全員参加により計画を作成したことで、中長期目標実現に向けた取り組みを博物館職員全員が共通課題として認識することができた。

また、平成16年度は、博物館運営・評価の専門家との意見交換を行い、助言をいただき、さらに、地域の博物館利用者に計画案に対する意見を聞くなどにより、計画の内容、構成等が洗練され、かつ分かりやすいものとなった。

これらの取り組みおよび琵琶湖博物館協議会での審議をふまえ、平成17年3月に、「琵琶湖博物館中長期基本計画 『地域だれでも・どこでも博物館』を実現するために」および「琵琶湖博物館展示交流空間の更新整備に関する計画」を策定した。

4 職 員

- 館 長 川那部 浩 哉
- 副 館 長 金 森 保 明 (～H16.12.31)
- 上 原 正 男 (H17. 1. 1～)
- 上 席 総 括 学 芸 員 布 谷 知 夫 (H16.12. 1～)

総 務 部

- 部 長 上 原 正 男

◇ 総務課

- 課長(兼) 上 原 正 男
- 課長補佐 白 井 莊一郎
- 主 幹 久 保 一 吉
- 同 奥 野 昭 子
- 主任主事 田 中 順 子
- 同 西 田 千 恵 子
- 主 事 井 上 裕 士

◇ 企画調整課

- 課長(兼) 用 田 政 晴
- 課長補佐 杉 野 和 彦
- (兼) 杉 谷 博 隆
- (兼) マーク・ジョセフ・グライガー
- (兼) 孝 橋 賢 一
- (兼) 松 田 征 也
- (兼) 芳 賀 裕 樹
- (兼) 亀 田 佳 代 子
- (兼) 里 口 保 文
- (兼) ロビン・ジェームス・スミス
- (H16.12. 1～)

事 業 部

- 部長(兼) 中 島 経 夫

◇ 展示担当

- G.L.(兼) 牧 野 久 実
- (兼) 布 谷 知 夫
- (兼) 武 部 強
- (兼) 金 子 修 一
- (兼) 中 井 克 樹
- (兼) 八 尋 克 郎
- (兼) 芦 谷 美 奈 子
- (兼) 榭 永 一 宏

◇ 交流担当(交流センター)

- G.L.(兼) 牧 野 厚 史
- (兼) 前 畑 政 善
- 主査(併任) 谷 口 雅 之
- 主査(併任) 西 垣 亨
- (兼) 草 加 伸 吾
- (兼) 楠 岡 泰

◇ 資料担当

G.L. (兼) 秋山 廣光
 (兼) 桑原 雅之
 (兼) 山川 千代美
 (兼) 橋本 道範
 (兼) 大塚 泰介

◇ 情報担当 (情報センター)

G.L. (兼) 戸田 孝
 (兼) 矢野 晋吾
 (兼) 宮本 真二
 (兼) 中藤 容子

研究部

○部長 (兼) 高橋 啓一
 研究顧問 嘉田 由紀子
 総括学芸員 布谷 知夫 (~H16.11.30)
 総括学芸員 中島 経夫

◇ 環境史研究領域

G.L. 総括学芸員 高橋 啓一
 S.G.L. 主任学芸員 里口 保文
 専門学芸員 用田 政晴
 主任学芸員 牧野 久実
 同 山川 千代美
 同 橋本 道範
 学芸員 宮本 真二
 同 榭 永一 宏

◇ 博物館学研究領域

G.L. 専門学芸員 マーク・ジョセフ・グライガー
 S.G.L. 主任学芸員 八尋 克郎
 専門学芸員 秋山 廣光
 主任学芸員 戸田 孝
 主任学芸員 芦谷 美奈子
 学芸員 中藤 容子
 (兼) 谷口 雅之
 (兼) 西垣 亨

◇ 生態系研究領域

G.L. 総括学芸員 前畑 政善
 S.G.L. 主任学芸員 亀田 佳代子
 専門員(兼) 杉谷 博隆
 主任主査(兼) 武部 強
 主査(兼) 金子 修一
 主査 孝橋 賢一
 主任学芸員 草加 伸吾
 同 楠岡 泰
 同 中井 克樹
 同 松田 征也
 同 桑原 雅之
 同 牧野 厚史
 同 芳賀 裕樹
 同 矢野 晋吾
 学芸員 大塚 泰介
 学芸技師 ロビン・ジェームス・スミス
 (H16.12.1 ~)

注) G.L.はグループリーダー、S.G.L. はサブグループリーダーを示す。

臨時的任用職員・嘱託員

杉江三佐枝	総務事務	大川 聡	微小生物標本整理 (H16.4.12～)
田中 真弓	同 (H16.4.16～10.15)	國分 政子	歴史民俗資料整理
小菅由有子	館長秘書	太田 佳恵	同
鎌田美智子	同	杉江鉄之介	実習補助・団体利用受付
磯野なつ子	ディスカバリールーム運営	北川 峰男	屋外展示運営
松尾 知	同 (～H16.4)	青木 伸子	交流事業
堀田 桃子	同 (H16.5～)	天野 好美	メディアラボ業務機器保守管理
大澤 勉	展示物の製作・維持補修	中西美智子	図書情報利用室運営・図書資料整理
小泉 誠	地学標本整理		

県職員以外の職員等およびフィールドレポーター・はしかけ登録者

◇ 特別研究員

高橋鉄美、大原健一、藤田裕子、野嶋宏二、黄 貞燕

◇ 研究補助

打越崇子、大橋正敏、大久保その子、大島輝美、大野貞雄、甲斐朋子、鎌内宏光、菊池さとみ、北川直子、北村明子、木村茂子、熊谷悦子、白井幸子、柴田陽一、瀬川也寸子、田尾稲子、高田千都子、高橋和征、谷川真紀、辻川智代、坪井美智子、中井大介、中山法子、花田美佐子、服部尚子、平野文子、細川真理子、八尋由佳、山中裕子、山本亜紀

◇ 図書資料整理・図書情報利用室運営

奥田学美、後藤嘉治子、野口比佐江

◇ 情報システム管理

佐本 泉、津田厚弘

◇ 資料整理保存維持管理業務員

石田未基、上原千春、太田 学、黒田耕平、佐々木 剛、辻 美穂、出口武洋、西川佳子、山本真彩子、若狭善弘

◇ 公開業務員

東 奈津子、草野利香、駒井由美、小松紘之、下久彩路、下村美香子、仁 歩、谷口昌子、戸田真由子、中島 愛、中村和代、中村優介、春本恭子、堀江鉄夫、兵頭あゆみ、前田知子、水嶋孝行、村瀬敏子、室田潔枝

◇ 水族飼育員

右川洋一、岡田 隆、岡田勇馬、岡本博仁、佐藤智之、柴山弘史、関 慎太郎、
長田智生、布施幸江、藤井泰正、丸尾有美、安永美幸、山田康幸、吉川真一郎

◇ 展示交流員

斉藤晶久、木下真一、愛須美由起、芦田弘美、荒井紀子、池畑慎吾、石川寛子、
石川留美、井出範子、犬塚菊美、今泉美保、今泉圭恵、岩見 勉、大川篤子、
大林博子、大山綾子、大山智子、奥村恵子、折中康子、金森美和、釜本敦子、
北川喜美榮、北田昌子、木村美枝、北村美香、木戸美知留、近藤秀憲、近藤摩子、
近藤由美子、斉藤文子、坂井純子、佐藤 朋、澤井秀之、清水聡子、杉本和子、
田村芳子、土井博子、中江美知子、中村とく子、浪江伊都子、西尾文里、西脇実代、
西山順子、橋本富栄、林 克子、広谷ちひろ、福井明美、本田幸子、松岡治子、
村城早織、村田洋子、森永紗江子、柳原徳子、山本孝子、山元真里、弓削宣子、
吉岡 令、吉田治美

◇ 常設展示補修

緒方久美

◇ 企画展示・ギャラリー展示運営

貝増千賀子、菊池さとみ、坂本 卓、白井弘子、坪井美智子、中井大介、新部国男、
藤原正路、吉井利典

◇ 警備員

赤澤正弘、安藤廣行、一井秀男、奥村義典、久保 均、坂井和夫、島本真人、
谷 清三、林田繁治、宮城光夫、和田秀隆

◇ 清掃員

勝島道子、北川智子、滝 勇男、中井寿美子、平井千代子、堀井加代

◇ 設備管理員

北川 宏、黒川 勲、近藤武夫、酒井芳樹、瀬川 満、曾我元弘、高橋忠和、
竹内和雄、田中聰徳、土居都義、萩原昌弘、廣瀬正尚、福井 勇、伏見庄司、
松原 茂、吉浦 修

◇ ミュージアムレストラン

飯田昌子、伊藤雅美、井上ゆき子、井上良子、入江美雪、岡田真弓美、奥野香代子、
奥村法子、岸野浩子、北川真悠、駒井知代、佐々木友江、芝田明美、清水令子、
下園美栄子、千足ひろ子、日野美奈子、平井芳章、堀川勝義

◇ ミュージアムショップ

宇那木千佳、中島千賀子、中谷由紀子、長崎宏昭、森 薫、山本泰子

◇ フィールドレポーター

青井陽子、東 篤幸、井門静夫、井上弘司、伊吹達郎、岩根健治、江尻清子、大橋義孝、奥村 勤、小利池享良、勝見政之、門脇きみ子、椛島昭紘、椛島奈美子、北川幸雄、北川孝美、北側忠次、京美季男、久保穂子、口分田政博、小林隆夫、小林光子、小原寿子、阪口 進、杉江ミサ子、梶本さつき、高田正一、高田節子、武田 繁、土田正文、中後佐知子、中西 健、西野 薫、東野重信、平井政一、古谷善彦、堀野善博、本田典子、前田雅子、村上博史、森 擴之、安井加奈恵、山崎千晶、渡辺克彦、渡辺秀美、渡邊康子

◇ はしかけ

青山喜博、秋山茂也、芦田弘美、荒井紀子、有田重彦、飯田俊宏、池田克子、池田彩名枝、石川寛子、石川留美、井花保奈美、井花弥生、今橋克寿、上原由喜美、鶴飼裕子、鶴飼雅樹、梅景義高、江頭 崇、江頭知恵、遠藤吉三、大崎淳子、大澤 舞、大住純子、大住光生、大谷敏子、大原怜奈、尾形 勇、奥村恵津子、甲斐朋子、片山好彦、金山 耕、金山正之、金山美佐子、金山玲子、亀田洋典、鴨田真依子、木瀬昭子、北側忠次、北村明子、北村史朗、北村美香、木下多津江、木村義弘、國正さより、倉田忠彦、倉田英恵、桑垣 瑞、小竹洋平、後藤真吾、小西春次、小林悟郎、小林蒼馬、小林隆夫、小原寿子、齋藤真琴、齋藤眞由美、酒井啓子、笹井まち子、佐々木信幸、佐々木則子、佐々木行忠、佐藤義信、佐橋保司、澤村武雄、嶋村のぞみ、清水聡子、鈴木誉士、鈴木みつ子、瀬尾好英、瀬川也寸子、高島典子、高田昌彦、竹内正吾、竹内芳子、武田 繁、武田広志、竹谷満弘、多鹿啓之、多鹿悠太、立石文代、谷口貴也、谷元峰男、玉藤典一、田村雅裕、田室圭一、辻 勝彦、辻 健志、辻 美穂、辻川智代、津田國史、手良村昭子、手良村知功、手良村知央、富岡親憲、内藤健太、中井大介、中川 修、中川雅博、中川光榮、永野麻也子、中村和代、中山法子、奈良富美子、南場房枝、西村義隆、橋田栄一郎、橋田理絵、走辺 宏、走辺春子、橋本昭也、橋本峯治、長谷川倫人、原島和雄、人見和代、肥山陽子、平尾 武、広谷ちひろ、福田尚人、福田真耶、藤野あぐり、藤野未音、藤野美由紀、古谷善彦、別所かおる、別所宏二、前田雅子、松川郁子、松田祐美、松田由枝、松本 勉、水戸涼乃、水戸基博、水戸涼介、南 和美、宮本哲覚、村上五十三、村上靖昭、森田光治、森永紗江子、安井加奈恵、安原陽子、柳原徳子、矢原 功、山中裕子、山本 篤、鎗野健太郎、行本宏子、横田彰子、吉井 隆、吉野千栄子、米田秀之、渡邊 一郎、渡邊佐和子、渡邊康子

5 予 算

2004年（平成16年）度歳入状況 (円)

科 目	決 算 額
使用料及び手数料	175,123,474
財 産 収 入	1,667,060
諸 収 入	112,073
合 計	176,902,607

2004年（平成16年）度歳出状況 (円)

事 業 名	事 業 内 容	決 算 額
管 理 運 営 費	施設維持費、烏丸半島整備費、事務費	314,615,399
調査資料収集事業費	研究費、研究備品、資料収集製作、資料整理保管、水族飼育	227,860,432
展 示 事 業 費	企画展示、常設展示、展示維持管理、展示用印刷物	175,063,432
情報交流事業費	情報システム管理、データ入力、図書整備、交流事業開催、フィールドレポーター	62,367,890
	合 計	779,907,153

IV 平成16年度をふり返って

1 琵琶湖博物館中長期基本計画の策定

平成16年度は、中長期的な運営指針やその具体的な取り組み方針および必要な環境の整備について検討し、2つの基本計画を策定した。

(1) 琵琶湖博物館中長期基本計画

博物館の使命や理念、琵琶湖博物館らしさをあらためて認識した上で、職員の全員参加により検討を行い、今後の博物館活動の基本方針、推進手順、具体化の方策等を明らかにすることができた。次年度以降は、この計画の具体化に向けて博物館活動を行っていく。特に平成17年度は、中長期目標実現のための第一段階の最終年度であり、博物館活動の基礎機能の確立をはかるため、「資料が活用できる博物館」および「研究を進めて活かせる博物館」の機能強化に向け、計画の具体化を進めていく。

(2) 琵琶湖博物館展示交流空間の更新整備に関する計画

財政的に非常に厳しい状況であるため、計画をすぐに実行することは困難と思われるが、博物館職員が共通の認識をもち、行動指針として今後の展示交流空間更新整備にかかる考え方、方向および整備内容をまとめることができた。

今後は、計画を行動指針として、常設展示や「(仮称) 集う・使う・創る新空間」の整備内容、運営方法等についてさらに具体化を図り、博物館利用者の多様なニーズに対応したユニバーサルデザイン推進に取り組んでいく。

2 平成16年度博物館活動の総括

(1) 研究部

ア 組織・運営

平成16年度から研究部長、生態系研究領域担当、博物館学研究領域担当などのリーダーが替わり新たな体制でスタートした。また、12月には欠員であった国際湖沼学の学芸員を採用することができた。その結果、研究部には環境史、生態系、博物館学の3つの研究担当に34名の職員が所属し、事業部及び総務部の業務と兼務している。

研究部の計画の立案・推進は、研究部代表者会議を開催して行っている。この会は、第2金曜日と第4金曜日の午後、各研究領域のグループリーダーとサブグループリーダーおよび総括学芸員以上で21回開催した。昨年度よりも明確に問題を提案し、議論を進めることができた。ここで話し合われた問題は、研究部の計画の立案および事業の推進を図るため、学芸会議での討議や承認を得た上で事業

調整会議に諮られた。

イ 研究・調査活動

平成16年度の研究は、平成15年度に行われた研究審査会に総合研究2件、共同研究16件、申請専門研究3件、専門研究31件の申請があったが、共同研究で4件の不採用、申請専門研究で1件の辞退があり、結局、総合研究2件、共同研究12件、申請専門研究2件、専門研究31件を行った。開館以来の総合研究や共同研究などの件数をみると、近年、研究件数が減少している傾向にある。これは、審査会への申請件数そのものが減少していたり、総合研究や共同研究のような大きなテーマを行う総合的研究能力が9年間で十分に育ってこなかったことに問題があるように思われる。特に総合研究においては、博物館学研究系の総合研究が終了し、来年度は総合研究が1本になることもあり、生態学研究系や博物館学研究系の研究を課題とした総合研究を早急に立ち上げる必要がある。

このほか、外部の助成による研究を8人の学芸職員が14件行った。そのほか1人の学芸職員が科研費の出版助成を受けた。

ウ 成果の発信

学術的な成果の発信としては、学術論文30件、専門分野の著作53件が、また、一般向けの著作としては、新聞への原稿も含め136件を行った。その他、学会・研究会・講演会での発表は162件を行った。これらは昨年度とほぼ同様な活動量といえる。館内事業のうち、企画展示やギャラリー展示などは展示活動の中で総括される。その他、館内事業としては昨年と同様に研究発表会、連続講座（全7回）、研究セミナー、特別研究セミナーを開催した。なお、毎月1回開催される研究セミナーへの学芸職員の参加率は年間平均67.9%であり、個々の研究を向上させるためにも、より多くの学芸職員が参加する必要がある。

エ 研究交流

琵琶湖博物館の研究の質を高めていくために、外部研究者との交流を活発化することは重要である。このような場として、学会、研究会、講演会などがあるが、それらに参加する頻度は学芸職員によって偏りがあることから改善が必要である。また、当博物館には特別研究員制度があるが、これに基づいて5名の外部研究員が琵琶湖博物館の施設を利用して研究を行い、またセミナーで発表を行った。その他、6名の外部研究者が施設利用手続きを経て、琵琶湖博物館のDNA分析室、生態進化実験室、無菌操作室、人工環境室、電子顕微鏡室などの施設を利用した。

以上、琵琶湖博物館中長期基本計画の第一段階の終了を翌年に控えて、研究に関わる第一段階の目標である「最新の情報収集、学術論文の好評による研究の質の向上」「研究交流や共同研究の推進琵琶湖地域の研究成果の公表」「地域との研究協力関係の構築」などを実現できるよう、来年度には具体的目標を設定して活動したい。

(2) 事業部

ア 交流・サービス活動

体験学習プログラムの充実や「はしかけ」、「フィールドレポーター」の活動充実を中心に交流・サービス事業を進めてきた。その結果、「はしかけ」への登録人数は増加（204名から294名）し、フィールドレポーターは横ばいである（139名から146名）。

平成16年度の大きな成果としては、まず第一に、「はしかけ」のグループからの提案を受けて体験学習事業の改組を決定したことである。平成17年度には始動するが、はしかけさんの参加によるユニークな活動の発展が、今後期待される。次に、新たな「はしかけ」のグループが立ち上がりはじめたことであり、平成17年度には本格的な活動がはじまる。また、フィールドレポーターでは5回の調査を実施し、それぞれの調査結果をまとめるとともに、それらの成果の一部は、展示も行っている。

課題としては、「はしかけ」の人数が増加したため、これまでのような館からのニュースレターの発送だけではなく、話し合いの場をどのように設けるのかを検討していく必要がある。平成17年度には、はしかけの登録と同時に交流会を設け、ゆるやかに話し合いの場づくりを進めていく予定である。観察会・講座については、類似事業の増加や地元・研究部との連携強化もあって整理すべき段階を迎えている。

イ 情報発信活動

中長期基本計画の個別計画の1つである「柔軟な運営組織」を先取りする形で、本年度当初より二次資料（具体的には図書映像資料）を一次資料ともども「資料整備活動」の一環として取扱い、従来「情報活動」としてきた活動のうちの残り部分に相当する「情報発信活動」を独立した活動として進めることになった。

そして本年度は、この活動に必要な基礎データの1つである「質問回答情報」が未整理のまま蓄積されて続けている状況を解消することに力を注いだ。その結果、過去情報を館内で職員が参照するのに適した形に整備することができた。今後の課題としては、新規情報を継続的に整備し続けるとともに、この情報を基礎に一般公開可能な情報を整備することがある。

一方、いまや電子情報発信の要となっているWWWサイトについて、「調べごとには便利だが、初めての利用者には敷居が高い」という当館の状況を改善するべく、大規模な更新を計画したが、実現には至らず、今後の課題となっている。

「情報発信活動」を独立させた結果、情報センターが組織として不自然なまでに少人数となる不都合が生じたので、これを暫定的に「事業部」の枠内で解決する方法として、来年度は交流センターに統合することが決定している。この状況を利用して、特に質問回答情報の取扱いについて、他の交流活動との密接な連携を図っていきたい。

ウ 資料整備活動

中長期基本計画の実現に向け、より一層の資料整備の推進と利用に向けての体制作りを推進している。収蔵資料数は総数70万点を超え、登録資料数は365,034点となったが、未登録の資料も未だ数多

く存在する。より多くの資料を効率的に登録し、収蔵資料を利用可能な状態に整理していくことが今後の課題である。また、登録資料は、利用の便宜を考慮し、順次インターネット上で検索できるようにしている。平成16年度は、脊椎動物の3分類（両生・爬虫類、鳥類、哺乳類）のデータベースを作成し公開準備中であり、民具データベースの公開作業にも着手した。民具データベースについては、画像データを加えて公開することが課題となっている。

資料の防虫防黴対策の一環として使用されてきた燻蒸ガスの国際的な使用規制を受け、燻蒸設備を代替ガス仕様に改修した。あわせて、二酸化炭素燻蒸や冷凍燻蒸など、資料にあわせた適切かつ効果的な方法も試行している。また、収蔵庫の定期的清掃を徹底するなど、資料有害虫のIPM対応に向け一歩前進した。収蔵庫の温湿度管理が的確に行えるよう、連続的にモニタリングできるシステムの構築も行っており、収蔵資料の適切な保存に向けた取り組みを一層強化した。

水族資料に関しては、希少淡水魚の保護増殖について一層の努力を行ってきた。30種もの淡水魚の繁殖を手がけている館は、(社)日本動物園水族館協会加盟園館としては最多である。平成16年度は、新たにデメモロコを繁殖対象魚種とし、繁殖に成功した。また、地域的な遺伝形質の変異などの調査研究のため、他館との連絡を取り合い、資料標本の収集や繁殖魚類の分譲、交換、受贈なども行っている。さらに、希少水生昆虫の保護増殖も行っており、平成16年度はクロゲンゴロウを加えるなど、必要な取り組みを行った。

エ 展示活動

常設展示では、展示交流空間の更新に向けて、老朽化した情報機器類の全体的な見直しを行い、同じ展示効果を他の機種でも同様の展示効果が実現できるものについては速やかに更新するとともに、情報機器類を使わずに展示効果が期待できるものについては、別の手法に変更した。また、内容が時代にあわなくなったものについても随時更新を行った。

企画展示では、ハンズオンの手法を多用した「のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき」を開催し、五感を使って植物の生態を学ぶ機会として来館者の好評を博した。また、ギャラリー展示「糸を紡いで布を織る」および「ミクロの世界を探検しよう」では、はしかけ活動の成果を展示の基礎とすることで、地域のひとびとの活動を支援し、交流の幅を広げる「集う」「使う」「創る」展示を具体化することができた。

(3) 総務部

ア 来館者の状況と広報

琵琶湖博物館の来館者数は、開館翌年の平成9年度には100万人に迫る来館者を記録したが、その後は逡減を示し、平成16年度は44万人台となった。来館者減の主なもの、観光団体客と個人客であり、その要因として猛暑や台風、地震などの気候・自然災害が大きく影響したと考えられる。

当館の中長期目標では、多くの人びとが集い、博物館を利用し、そして新たな展開にむけて行動してもらおうことを目標としているが、このためには、利用しやすい環境づくりとともに、広報活動の充実と強化が必要である。これまでの広報活動では、ターゲットを絞りきれず、効果的な広報手段も十

分に検討されない状態であった面も否定できない。

こうした現状から、平成16年度2月に広報・経営戦略を策定すべく検討チームを設置し、広報・経営戦略の検討に着手した。平成17年度以降は広報・経営戦略検討チームを中心として、現状の課題を整理しつつ効果的・効率的な広報活動の展開と、それをささえる運営基盤の確立により、多くの方に博物館を利用してもらうための持続的な努力をしていきたい。

イ 来館者アンケートの結果

年に3回実施しているアンケートの調査結果は、毎回ほぼ同じ傾向を示し、きわめて安定したデータであることが平成16年度についてもいえる。満足度については、博物館に来て「非常に満足した」と「満足した」を合わせると概ね70%以上を占め、特に第3回（平成17年3月）の調査では76.8%とこれまでにない高率であった。ギャラリー展示が好評であったことが要因とも考えられる。今後、琵琶湖博物館中長期基本計画の第一段階の目標値である「年3回平均75%」の達成に向けて、アンケート結果にあらわれる不満点の改善に迅速に対応するとともに、魅力的な企画展示、ギャラリー展示の開催などを行うことが必要である。

ウ 施設の整備

来館者、特に学校団体の方からの要望が多く、開館時からの懸案事項であった雨天時の昼食・集合場所の整備を平成17年度事業として予算化することができた。事業施行に当たっては、昼食・集合の場所としての機能だけでなく、野外での観覧会などの多目的な利活用も検討していきたい。

また、車いす使用者駐車場を増設し、あわせて屋根を設置することや、障害者用トイレの一部をオストメイト対応トイレに改善するなど、いくつかのユニバーサルデザイン化事業も推進していく必要がある。事業施行に当たっては、計画段階から様々な利用者の意見を聴取し事業に反映していきたい。

エ 来館者サービスの向上

来館者サービス向上の一環として、平成16年4月から新たに、購入後1年間、常設展示と企画展示を何回でも観覧できる年間パスポートの販売を始め、平成16年度1年間で671人の方が購入し、延べ2,102回の利用があった。当館の来館者はリピーターが多く、利用者ニーズに応えることができるとともに、来館者の定着化による利用促進が図れた。

今後もより一層の利用促進を図るため、近隣の観光施設や交通機関等との連携を検討していきたい。

オ 国際交流活動

平成16年度は、JICAの「博物館集中コース」研修を国立民俗学博物館との共催で実施し、10名の研修生を受け入れた。JICAの研修はこれまで国立民俗学博物館が実施していた「博物館技術コース」に協力するかたちであったが、そのかわりをさらに充実して、海外からの研修生との関係の強化を図ることができた。

視察については47件、約530人が博物館を訪れ、韓国、中国などのアジア地域をはじめ、世界各地

から来館している。

研究・展示の関係では、平成14年に研究交流の同意書を締結している中国科学院水生生物研究所（湖南省武漢市）との共同研究の一環として、平成16年11月に同研究所を訪れ、淡水魚類の生息環境調査と採集を実施した。この際持ち帰ったタナゴ類、クセノキプリス類、アブラミス類は、水族展示室において一般公開している。

国際交流活動については、今後ともJICAの研修や視察による来館が将来にわたる関係構築につながるきっかけとなるように努めていきたい。また、平成18、19年度は総合研究「東アジアの中の琵琶湖」の成果を展示する企画展示の開催、平成20年度には、フランスの国立自然史博物館と、当館を含む日本の自然史等博物館5館による日仏共同企画展「フェアブル100年展」の開催など、海外の博物館、関係機関とのさらなる関係強化による国際的な博物館活動の交流を進めていく必要がある。

V 博物館利用のご案内

■開館時間 午前9時30分から午後5時まで（入館は、午後4時30分まで）

■休館日 毎週月曜日（祝日・休日の場合は、翌日休館）

年末年始（12月28日～1月3日）

その他館長が定める日

■観覧料金（常設展）

（2005年4月1日現在）

	個人	団体（20人以上）	年間観覧券	共通券（*）
小学生・中学生	250円	200円	750円	320円
高校生・大学生	400円	320円	1,600円	520円
大人	600円	480円	2,400円	730円

* 草津市立水生植物公園「みずの森」との共通券。団体は取り扱いません

※未就学児、障害のある方、県内居住の65歳以上の方は常設展示の観覧は無料です。（詳細についてはご確認ください。）

※年間観覧券は、購入後1年間、常設展示、企画展示を何回でも観覧できます。

※企画展示はそのつど料金を定めます。（開催期間中）

■交通案内

●JR新幹線「京都駅」「米原駅」からJR琵琶湖線に乗り換え「草津駅」「守山駅」で下車。

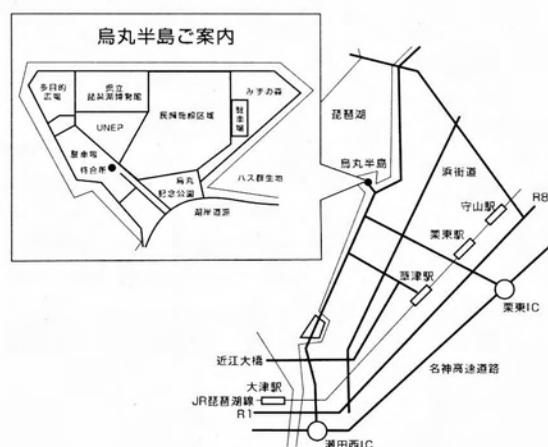
●「草津駅西口」から、近江鉄道バス「烏丸半島」行きで「琵琶湖博物館前」下車、約25分。タクシーで約20分。

●「守山駅西口」からタクシーで約20分。

●車では、名神高速道路「栗東I.C」から国道1号線～栗東志那中線～湖岸道路を経て約25分。または「瀬田西I.C」から湖岸道路を経て約40分

●航路では、琵琶湖汽船シャトルボートで「大津港」、「琵琶湖大橋港」から「草津烏丸半島港」へ（不定期）

* 問い合わせ先：琵琶湖汽船077-524-5000



■駐車料金（2005年4月1日現在）

大型バス	1,700円	マイクロバス	1,100円
普通車	550円	二輪車	200円

* 博物館観覧者が使用する普通車と二輪車は無料扱いとなります。

■問い合わせ

〒525-0001 滋賀県草津市下物町1091番地

滋賀県立琵琶湖博物館

TEL (077) 568-4811 FAX (077) 568-4850

インターネットホームページ <http://www.lbm.go.jp/>

平成17(2005)年度 職員紹介

職員

(2005年4月1日現在)

- 館長 川那部 浩 哉
- 副館長 上原 正 男
- 上席総括学芸員 布谷 知 夫
- 上席総括学芸員 中島 経 夫

総務部

- 部長(事務取扱) 上原 正 男
- ◇ 総務課
 - 課長 白井 莊一郎
 - 主幹 久保 一 吉
 - 同 奥野 昭 子
 - 主査 田中 順 子
 - 主任主事 西田 千恵子
 - 主事 井上 裕 士

企画調整課

- 課長(兼) 松田 征 也
- 課長補佐 杉野 和 彦
- (兼) 孝橋 賢 一
- (兼) 亀田 佳代子
- (兼) 里口 保 文
- (兼) ロビン・ジェームス・スミス

事業部

- 部長(兼) 用田 政 晴
- ◇ 展示担当
 - G.L.(兼) 牧野 久 実
 - (兼) マーク・ジョセフ・グライガー
 - (兼) 武部 強
 - (兼) 草加 伸 吾
 - (兼) 八尋 克 郎
 - (兼) 芳賀 裕 樹
 - (兼) 芦谷 美奈子
 - (兼) 榭 永 一 宏
- ◇ 資料活用担当
 - G.L.(兼) 山廣 光
 - (兼) 桑原 雅 之
 - (兼) 山川 千代美
 - (兼) 矢野 晋 吾
 - (兼) 橋本 道 範
 - (兼) 大塚 泰 介

交流担当(交流センター)

- G.L.(兼) 牧野 厚 史
- S.G.L.(兼) 戸田 孝
- (兼) 前畑 政 善
- (兼) 杉谷 博 隆
- 主査(併任) 谷口 雅 之
- 主査(併任) 中村 公 一
- (兼) 金子 修 一
- (兼) 楠岡 克 泰
- (兼) 中井 真 樹
- (兼) 中宮 本 真
- (兼) 中 藤 容 子

研究部

- 部長(兼) 高橋 啓 一
- 研究顧問 嘉田 由紀子
- ◇ 環境史研究領域
 - G.L.総括学芸員 高橋 啓 一
 - 主任学芸員 牧野 久 実
 - 同 山川 千代美
 - 同 橋本 道 範
 - 同 里口 保 文
 - 学芸員 宮本 真 二
 - 同 榭 永 一 宏
- ◇ 博物館学研究領域
 - G.L.総括学芸員 マーク・ジョセフ・グライガー
 - 総括学芸員 用田 政 晴
 - 専門学芸員 秋山 廣 光
 - 主任学芸員 戸田 孝
 - 同 八尋 克 郎
 - 同 芦谷 美奈子
 - 学芸員 中藤 容 子
 - (兼) 谷口 雅 之
 - (兼) 中村 公 一

生態系研究領域

- G.L. 総括学芸員 前畑 政 善
- 専門員(兼) 杉谷 博 隆
- 専門学芸員 松田 征 也
- 主任主査(兼) 武部 強 一
- 主査(兼) 金子 修 一
- 主査 孝橋 賢 一
- 主任学芸員 草加 伸 吾
- 同 楠岡 克 泰
- 同 中井 克 樹
- 同 桑原 雅 之
- 同 牧野 厚 史
- 同 芳賀 裕 樹
- 同 亀田 佳代子
- 同 矢野 晋 吾
- 同 大塚 泰 介
- 学芸技師 ロビン・ジェームス・スミス

注) G.L.はグループリーダー、S.G.L. はサブグループリーダーを示す。

館長 兼 滋賀県顧問 川那部 浩 哉 (かわなべ ひろや)

略歴 1960年京都大学大学院理学研究科博士課程修了・京都大学理学博士。同年京都大学助手、1961年同講師、1967年同助教授、1977年同教授、1991年同生態学研究センター長を経て、1996年退官。同年4月より現職。

賞罰 1960年朝日奨励賞、1995年カナダ国ゲルフ大学 (U. of Guelph) 名誉理学博士、1996年京都大学名誉教授・日本学士院賞エディンバラ公賞、1997年アメリカ芸術・科学アカデミー (AAAS) 外国人名誉会員・世界科学協会 (IMS) 会員、1999年京都新聞文化学術賞、2001年世界芸術・科学アカデミー (WAAS) 会員、2002年京都府自治功労賞、2003年日本生態学会功労賞・応用生態工学会名誉会員。

役員 日本生態学会元会長、国際生態学連合 (INTECOL) 元副会長・第5回大会会長、応用生態工学会研究会前会長、国際古代湖生物学会 (SIAL) 前会長、国際理論応用陸水学会 (SIL) 生物多様性委員会委員長・前日本代表、生物多様性科学国際研究計画 (DIVERSITAS) 科学委員会前委員・西太平洋アジア地域ネットワーク (DIWPA) 前委員長、日本学術振興会未来開拓学術研究推進事業「アジア地域の環境保全」研究推進委員会前委員長、世界自然保護基金ジャパン (WWFJ) 常任理事、第9回世界湖沼会議企画委員会委員長、第3回世界水フォーラム運営委員会委員、など。

専門分野 生態学

研究テーマ 社会と群集の生態学 文化多様性と生物多様性との歴史的関係

1995年以来、アユの社会構造や川や湖の魚の種間関係を、おもに調べてきたつもり。京都府宇川の魚について50年間毎年調査してきた愚直さを、本人は大いに誇りにしている。また、アフリカ大陸のタンガニカ湖などで、1977年ごろから国際共同研究を進めてきたが、極端なまでに地域主義的な発想を持ち、「当該地域の人々が調査のリード役を果し、さまざまな決定はその地域の人々が行うべきだ」との考えのもと、現地の研究者のアドバイザーの役割に徹することに努めてきた。「生物間の関係の総体」の研究が重要だと、40年以上言い続けてきたところ、近年の生態学の国際的流れはこの方向にかなり近づいており、いささか満足している。「生物の多種共存機構を促進する相互作用機構」すなわち「地球共生系」の共同研究に引き続いての、「生物多様性を促進する生態複合」すなわち「共生生物圏」の共同研究は、国内的には2002年3月に一応終ったが、その国際共同研究はさらに続いている。

琵琶湖博物館に来てからは、従来からの「生物間の関係の総体」を拡張して、「湖と人間の関係の総体の歴史性」を自分なりに考え直しており、「古代湖は生命文化複合体」などと、奇妙な用語を口走ってもいる。

『原色日本淡水魚類図鑑』(1963、76)、『川と湖の魚たち』(1969)、『生物と環境』(1978)、『カラー名鑑日本の淡水魚』(1989、2001)、『生物界における共生と多様性』(1996) など、比較的題名のおとなしい著書もあるが、『偏見の生態学』(1987)、『曖昧の生態学』(1996)、『魚々食記』(2000) など、鬼面人を驚かすような題のものもある。また、私淑していたイギリスの研究者エルトンさんの本を3冊翻訳し、『シリーズ地球共生系』(全6巻)、『共生の生態学』(全8巻)、『ビジュアル科学講座生命の地球』(全13巻)を監修したりもした。近年編集したものには、『古代湖：その文化的・生物的多様性』(1999、英文)、『古代湖：生物多様性・生態・進化』(2000、英文)、『博物館を楽しむ：琵琶湖博物館ものがたり』(2000)、『生物多様性の世界』(2003) などがある。また、『日本の魚類生物学：川那部浩哉に捧げる』(1998、英文) や『川の自然を残したいー川那部浩哉先生とアユ』(2000)などを贈って頂き、光栄に思うと同時にいささか恥ずかしい気もしている。

研究顧問 嘉 田 由紀子 (かだ ゆきこ)

略歴 1975年米国ウィスコンシン大学大学院修士課程修了、1981年京都大学大学院農学研究科博士課

程単位取得、同年琵琶湖研究所入所。1985年農学博士（京都大学）取得、1991年より滋賀県教育委員会事務局文化部文化施設開設準備室、1997年琵琶湖博物館総括学芸員を経て、2000年より現職。2000年より京都精華大学教授。

専門分野 環境社会学、文化人類学

研究テーマ 琵琶湖周辺の水と人のかかわりの環境史、水域資源管理の比較文化論的研究、シロウトサイエンスの方法論的研究

中学校の修学旅行で京都・近江にはれこんだのがこちらに住み着くきっかけになる。大学時代にアフリカ調査、大学院ではアメリカに留学し、途上国の経済発展と社会変動の問題を勉強。アメリカでの修士論文で近江の農村社会研究をとりあげる。昭和56年、琵琶湖研究所に入所。人と琵琶湖のかかわりを文化人類学的に行うことを目的とし、滋賀県内での聞き書きをベースに、県内3000自治会と120水系を対象に環境情報データベースづくりも行う。地域で出会った人たちに教えられながら、水や土地など環境資源管理の智恵とその文化を学ぶ。昭和60年代初頭から、琵琶湖をめぐる歴史や自然、文化を一般にひろく伝達する施設の必要性を強く感じ、当時うごきはじめて琵琶湖博物館づくりに参加。地域の人たちとともに調査や資料づくりを行う参加型の博物館を理想とし、県内各地のフィールドワークを続ける。最近ではアフリカなど海外湖沼との比較文化研究にも取り組み始める。著書に『水と人の環境史』（共編著）、『滋賀県地域環境アトラス』（共編著）、『環境民俗学の試み』（共著）、『私たちのホタル』（1号～7号）（共編著）、『生活世界の環境学』、『水辺遊びの生態学』（共著）、『共感する環境学』など。

上席総括学芸員 布谷 知夫（ぬのたに ともお）

略歴 1974年京都大学大学院農学研究科博士課程中退、農学修士、1974年大阪市立自然史博物館、1991年滋賀県教育委員会事務局文化部文化施設開設準備室を経て、1996年より現職、2004年総合大学院大学博士（文学）取得。

専門分野 博物館学

研究テーマ 利用者の視点からみた博物館 遺跡木材遺物による古環境復元

大学では林学を学び、林縁植生をテーマに研究を行ったが、実際には自分の研究よりも研究室仲間の仕事を手伝って、日本各地の山を見ることができたことのほうが有意義であったような気がする。博士過程に進んですぐに博物館に就職し、学芸員としての仕事を始めたが、博物館の学芸員にたいして、多くの利用者が期待する内容と大学時代に身につけた知識との差は大きく、とまどった覚えがある。

就職した博物館は、利用者との関係においては日本でも最も先進的な試みを行っていることで評価の高い博物館であり、博物館の在り方については貴重な体験ができた。そして博物館の学芸員は専門分野の知識をいかしながら、博物館そのものについてももっと積極的に発言をすべきであると考えようになった。博物館について議論する日本の博物館学は、大学の研究者が中心になっていて、現場の学芸員の声があまりに少ないためである。

琵琶湖博物館開設の仕事を担当するようになってからは、理想とする博物館像に近づけるための努力をしてきたつもりではあるが、まだまだゴールは遠い。

上席総括学芸員 中島 経夫（なかじま つねお）

略歴 1972年東京都立大学理学部化学科卒業、1980年京都大学理学研究科博士課程動物学専攻単位取得、同年日本学術振興会奨励研究員、岐阜歯科大学歯学部、1982年理学博士（京都大学）取得、1990年滋賀県教育委員会事務局文化部文化施設開設準備室を経て、1997年より現職。1997年生態学琵琶湖賞を受賞。

専門分野 魚類形態学

研究テーマ コイ科魚類の咽頭歯の研究

コイ科魚類に特有な咽頭歯の形の美しさに魅されて、研究を始めた。コイ科魚類の仔稚魚の数10ミクロンの小さな歯からコイ科の進化をさぐり、化石のデータと合わせながらユーラシア大陸や日本列島の数千万年の大地の歴史を紐解いている。その一端を「東アジアの化石コイ科魚類の時空分布と古地理学的重要性」に著した。また、小さな咽頭歯は化石としてよく残り、琵琶湖やそこにすむコイ科魚類の生い立ちを語っている。そのささやきから、明らかにされた琵琶湖の環境の移り変わりを「琵琶湖の自然史」(八坂書房)に著した。最近では、遺跡に残された咽頭歯化石から当時の人の活動やそのフィルターを介した古生態系の復元に興味をもち、「縄文時代遺跡から出土したコイ科のクセノキプリス亜科魚類咽頭歯遺体」(地球科学)、「赤野井湾遺跡から出土した絶滅種を含むコイ属咽頭歯遺体」(COPEIA)を著し、歴史時代にも琵琶湖魚類の絶滅したことを明らかにしている。

◇環境史研究領域

総括学芸員 高橋 啓一 (たかはし けいいち)

略歴 1979年日本大学文理学部応用地学科卒業、1979年～1980年京都大学理学部研修員、1980年～1990年日本歯科大学新潟歯学部口腔解剖学教室助手、講師、1990年歯学博士(日本歯科大学)、1990年滋賀県教育委員会事務局文化部文化振興課を経て、1996年より現職、2004年理学博士(日本大学)取得。

専門分野 古脊椎動物学

研究テーマ ゾウ化石を中心とした東アジアの古脊椎動物の変遷

大学入学と同時にに入った野尻湖発掘調査団をきっかけに、幾つかのゾウ化石の発掘を経験し、ゾウ化石の研究を行うようになった。大学に就職してからは、比較解剖学に興味を持ち、人体解剖や歯の形態を学生に教育する傍らで基本的な体制を堅持する軟骨魚類の頭部解剖を実体顕微鏡下で毎日続けた。学位論文は「軟骨魚類の口腔底を支配する顔面神経の解剖学的研究—鼓索神経の相同性について—」。

ゾウ化石の研究を始めたのは、単なる偶然のように思っていたが、実はここに日本の鮮新—更新世という地質時代にみられる日本列島の動物相の特徴があることに気づいた。それは、この時代の脊椎動物化石は、非常にゾウが多いのである。そのために、私は度々ゾウの発掘にめぐりあうことになったのである。いわば、日本列島の動物相がもつ特異性によって、必然的に私の研究対象が決定したのである。

古琵琶湖層群からは、多量の足跡化石や比較的豊富な脊椎動物化石が産出する。脊椎動物化石の産出する地層で、400万年間も連続し、地質学的に詳細に調査された地域は他ではみられない。このようなよいフィールドを活用して、古琵琶湖から産出する脊椎動物化石がどのような意味をもつのか東アジア全体の中で位置づける仕事を現在続けている。

主任学芸員 牧野 久実 (まきの くみ)

略歴 1988年慶応義塾大学大学院文学研究科修士課程修了、文学修士、1989～91年テルアビブ大学考古学研究所留学、同期間日本学術振興会特別研究員、1991年慶応義塾大学大学院博士課程単位取得、1991年国立民族学博物館外来研究員、1992年国立民族学博物館共同研究員、同年滋賀県教育委員会事務局(仮称)琵琶湖博物館開設準備室を経て、1996年より現職。

専門分野 民族学

研究テーマ 湖環境の比較文化史的研究

私は水辺が好きだ。育った神戸では瀬戸内海を、留学先のテルアビブでは地中海を、そして今は琵琶湖を、日々眺めながら暮らしている。オーストラリアの先住民が描く絵に砂漠とオアシスを描いたものがあるが、私の頭の中にもちょうどあのような水辺を中心にした心の地図がある。各地の水辺の文化にはさまざまなものがある。通常の歴史学ではその地域性に目を向けるが、地域性と同時に普遍性にも目を向けていこうとするのが民族考古学の立場である。一見異なるものに潜んでいる同じもの、一見同じも

のに潜んでいる異なるもの、そういった事象を比較研究することで、琵琶湖の文化により深く迫って見たいと思う。

主任学芸員 山 川 千代美 (やまかわ ちよみ)

略歴 1987年北海道教育大学釧路分校中学理科課程卒業、1989年兵庫教育大学修士課程学校教育自然系コース修了、教育学修士、1989年滋賀県教育委員会事務局文化部文化振興課を経て、1996年より現職。

専門分野 古植物学

研究テーマ 新生代における植物化石の研究

私は、新生代の大型植物化石を対象に、過去の植物相を解明し、その変遷や古環境を紐解いていく研究をしている。大学時代、研究室の教授に私の郷里で化石採集をするから、よかったら来てみないかと誘われたのが、きっかけであった。もともと、幼少の頃から植物に接することが好きだったので、訳なくのめり込んだ。また、「博物館大好き子」だったので、博物館へ出入りするようになり、気がつけばこの道を歩んでいた。今後、古琵琶湖層群をはじめ、日本や東アジアにおける新生代の植物群の変遷や古植生、さらに種の移り変わりを形態学的な視点から系統進化を究明していきたいと思っている。

主任学芸員 橋 本 道 範 (はしもと みちのり)

略歴 1993年京都大学大学院文学研究科博士後期課程国史学専攻中退、同年滋賀県教育委員会事務局(仮称)琵琶湖博物館開設準備室を経て、1996年より現職。

専門分野 文献史学

研究テーマ 13世紀における社会経済構造の変動

私の手元にはいま、1963年に撮影された一枚の空中写真がある。現在の写真と見比べてみると、ここ数十年の間に一変した景観に驚かされる。私たちは伝統的なたんぼの姿、日本の農村の姿を見ることができた最後の世代である。

ところで、そうした「伝統的な」たんぼの姿や村の景観は、決して大昔からかわらずあったわけではない。それぞれの時代の人々が、それぞれの自然条件や社会的条件に応じてそのときどきでもっとも望ましい形に変化させてきたのである。それは、どのような変化であったのであろうか。過去の人々の達成と限界を捉える作業は、現在を相対化し、常に未来をみすえるという姿勢を我々に与えてくれるはずだ。

いま私の手元にある空中写真は、犬上川中流域のものである。たんぼの規格化が進み、かつての様子はもはや空中写真や地形図などと実際にその場所で生活していた方々の記憶の中にしか残されていない。今後、それらの方々から聞き取り調査を行い、過去の変化を捉えるための基礎資料としたいと考えている。また、過去の記憶をよびおこすこの調査が、身近な自然や文化の変化を見つめ直してもらうきっかけとなればと願っている。

主任学芸員 里 口 保 文 (さとぐち やすふみ)

略歴 1997年大阪市立大学理学研究科後期博士課程地質学専攻学位取得後修了、理学博士、同年より現職。

専門分野 層序学

研究テーマ 古琵琶湖層群の火山灰層と他地域の鮮新-更新統中の火山灰層との関係

“滋賀県の近くに火山なんか無いのに火山灰をやっているんですか？”この問に対する答えは、“琵琶湖周辺に火山は無いが、火山灰層は多く存在する”である。この事実はあまり一般の人に知られていない。火山灰は火山の爆発的な噴火活動によって広域に拡散する。それが堆積し、地層中に残っている。

その拡散範囲は火山噴火の規模や形態にもよるが、最大級のものになると本州全土を覆うものもある。日本全国どこにでもあるのではないか？と思われるほど火山灰はある。

古琵琶湖層群には、多くの火山灰層が挟まっている。これらはどこから来たのか。また、他の地域に同じ火山灰があるのだろうか？それぞれの火山灰はどんな特徴があるか？それらはいつ、どこで、どのように噴火して、どこまで拡散したのか？自然が残してくれたヒントを頼りにその答えを解明するにはどうすればよいのか、それを考えていきたい。

学芸員 宮本真二 (みやもと しんじ)

略歴 1993年立命館大学文学部地理学科地理学専攻卒業、1996年東京都立大学大学院理学研究科地理学専攻博士課程中退、理学修士、同年5月より現職。

専門分野 微古生物学

研究テーマ 堆積物試料の各種分析（おもに花粉化石）・測定による第四紀の古環境変動の復原
まだ過去を振り返るほど老いていないが、今の研究の原点は幼年期にあったと思う。田舎だったので、美しい自然に囲まれて成長してきた。それが、そもそものきっかけだったと感じている。

おもに堆積物中に含まれている花粉化石の分析から、自然環境の変化と人との関係の歴史を復原するという、研究をやっている。

自然のイメージを色にとると、私は森の緑と答える。その緑は、世界的に急速に減少している。その破壊の一番の原因が、我々人類なのだ。

中東、アフリカ、ヒマラヤ、オーストラリアなど、海の外のフィールドから感じる日本の森は、とても、とても美しい。自然の偉大さを痛感せずにはいられない。

博物館では研究から展示という流れを通じて、自然の偉大さ、大切さ、また恐さも知っていただける活動を行ってゆけたら、と思っている。

学芸員 榊永一宏 (ますなが かずひろ)

略歴 1994年九州大学農学部農学科卒業、2000年九州大学大学院比較社会文化研究科博士後期課程単位取得、同年より現職、2002年九州大学博士（理学）取得。

専門分野 水生昆虫学

研究テーマ 水生昆虫の分類、系統進化、生物地理

小学生の頃からの新種を見つけたいという思いが、昆虫の研究ができる大学を選択させた。なぜ、ハエを研究しているのかと聞かれることがよくある。理由は2つある。一つに小型の昆虫はほとんど研究されておらず新種が多いこと、もうひとつは人に話してもなかなか理解されにくいのだが、アシナガバエは非常に美しいということである。

大学学部時代から現在まで双翅目アシナガバエ科の系統分類学的研究を行ってきた。現在は分子系統学的手法を用いた系統推定も行っている。アシナガバエ科は150属6000種からなる、双翅類のなかでも大きな一群である。本科の成虫は淡水域から海水域まで、様々な水辺環境への進出に成功し、適応放散により進化してきたグループである。大学院時代には海岸の岩礁域に棲むイソアシナガバエの研究に力を入れ、日本中の海岸線をなぞるようにテントを積んだ原付きバイクで走ったことがある。中国大陸の海岸も中国人の大学院生と2人でバスと自動車を利用し、中華料理を楽しみながら、分布調査をした。また日本周辺の離島の調査数も30島に及ぶ。

今後は、滋賀県において双翅目を中心とした水生昆虫相の解明を進めたい。また代表的な世界の古代湖の水生昆虫を収集し、各古代湖における歴史的、地理的、気候的環境を踏まえて、それぞれのもつ動物相の固有性や類似性に関する分類学的・進化学的研究を行いたい。世界の古代湖の生物相の成り立ちの比較研究により、琵琶湖の特殊性や重要性を浮かび上がらせるような研究活動をしたいと考えている。

◇環境史研究領域

総括学芸員 前 畑 政 善 (まえはた まさよし)

略歴 1974年高知大学大学院農学研究科修士課程栽培漁業学専攻中退、1974年滋賀県立琵琶湖文化館を経て、1997年より現職、2002年理学博士(京都大学)取得。

専門分野 水族繁殖学

研究テーマ 日本産ナマズ類の産卵生態

魚類を選んだのは、小さい時から魚を取ったり食べたりするのが大好きだったから。高知大学在学中は、ダムのない大河・四万十川の下流部で、アユの産卵生態や生理を研究していた。もちろんアユはたらふくたべた。1974年4月から1996年の3月まで滋賀県立琵琶湖文化館に勤務し、この間、日本産希少淡水魚の繁殖やブラックバスの食性、それから最近ではピワコオオナマズをはじめイワトコナマズ、ナマズなど日本産ナマズ類3種の繁殖生態・行動等を研究している。特に、ナマズ類の研究のきっかけは、1988年にたまたまピワコオオナマズの産卵を間近に見、ひどく感動したことから始まり、それは現在の研究のテーマともなっている。昔からそうだが、感動しないものに対しては、研究対象としないという性分らしいと本人は考えている。最近では、種の保全、あるいは生態系の保全は地域の人びとの関心なしではありえないと確信するに至っているが、その各論のありかたになやんでいる。

専門員 杉 谷 博 隆 (すぎたに ひろたか)

略歴 1981年京都大学農学部農業工学科卒業、1981年滋賀県職員(農業土木技術吏員)採用、耕地課、水産課、湖西地域振興局田園整備課勤務を経て、2002年4月より現職。

専門分野 農村計画

研究テーマ 住民参加による農村環境保全活動

滋賀県が平成8年度に策定した「みずすまし構想」は、「水・物質循環」「自然との共生」「住民参加」の3つの大きな理念から成り立っている。この構想推進に4年間現場で携わった経験をもとに、農村地域における水質保全・生態系保全といった活動に住民自身が主体的に関わり、そうした活動が地域の魅力の再発見となり、新しい町づくり・村づくりへと発展していくことを願っている。その活動を支援する有効な制度や手法について研究を進めていきたい。

専門学芸員 松 田 征 也 (まつだ まさなり)

略歴 1983年近畿大学農学部水産学科卒業、同年滋賀県立琵琶湖文化館を経て、1996年より現職。

専門分野 底生動物学

研究テーマ 淡水産貝類の滋賀県内における分布状況調査。琵琶湖湖底に生息するピワコミズシタダミ、水田に棲むマルタニシ、移入種のカワヒバリガイの生態調査

滋賀県下にはおよそ60種類の淡水棲貝類が生息しているが、その分布状況および生態については一部の種類を除いてほとんど分かっていない。また、環境変化に伴い淡水棲貝類の中にも絶滅の危機に瀕する種類が見られるようになった。このようなことから、知られないうちにいなくなる種類が一つでもいなくなり、貝類が人間と共存できるような環境を提案できるよう研究を進めたい。

主任主査 武 部 強 (たけべ つよし)

略歴 1983年 舞鶴工業高等専門学校土木科卒業、同年滋賀県職員(土木技術吏員)採用、大津土木事務所、河港課を経て、2004年4月より現職。

専門分野 河川工学

研究テーマ 多自然型川づくりに関する研究

滋賀県職員として、22年目を琵琶湖博物館で迎えることになりました。

これまでは、河川改修や道路改築事業を県の地方機関で直接実施する業務に携わる事が多かったのですが、昨年度は県庁河港課で「河川整備計画」の策定に関する業務に携わっていました。

滋賀県では、今後概ね20年間の具体的な河川の整備の内容を示す「河川整備計画」の策定を進めています。

この計画に、流域の皆さまの生の声を反映させるため、公募によるメンバーから構成する「川づくり会議」を開催し意見や課題を提案して頂き、これを学識経験者等で構成する「淡海の川づくり検討委員会」で議論し、その結果を河川整備計画に反映させるものです。

しかし、近年川づくりに対する住民の意見は、価値観の多様化も相まって多岐にわたっています。これは、川づくり特に「多自然型川づくり」が、河川工学のみならず生物、生態、社会、景観面等、様々な要素を含んでいるからであり、多自然型川づくりを計画するに当たっては、その効果を総合的・客観的・定量的に評価する必要があると考えています。

博物館では、川づくりに対する様々な要望に対し実施事例を検証評価することで、今後活かせるような「多自然型川づくり」の方向性を探ると共に事業効果・影響を客観的に評価できる手法を探っていくと考えてます。

主査 金子 修一 (かねこ しゅういち)

略歴 1988年鳥取大学農学部林学科卒業、同年滋賀県職（林業技術吏員）を経て、2004年より現職。

専門分野 林学

研究テーマ 林木育種

山や公園で木々を見るたびに「不思議だなー」と思います。どうしてこんな樹形をしているのだろうか？

(答：枝の出方が樹形を決める)そして、どうして樹種によって枝の出方が決まっているのだろうか？と、また、同科同属の木を見ても花がよく付くもの・付かぬもの、害虫に強いもの・弱いものなど、いろいろ個体差があり「何でだろー」と頭の中が？で満ちてきます。

そして思うのです、ひょっとして、一つの「不思議＝？」が解明出来れば大きなお金にならないかと。まあこんな夢物語は置いておいて、現実的には、山へ植える苗木の家系特性を調べ解明し、苗木生産種子の改良を行うことにより、災害等に強い山をつくることを目標にしています。

主査 孝 橋 賢一 (こうはし けんいち)

略歴 1990年近畿大学農学部水産学科卒業、1992年三重大学大学院生物資源学研究科修了、同年滋賀県水産試験場、水産課、再度水産試験場を経て、2004年より現職。

専門分野 水族環境学、水産微生物学

研究テーマ エリ網汚損原因糸状藻類の生理・生態について

大学には、理工学部建築学科へ入学したものの、パス（建物の完成イメージ図みたいなもの）の講義で芸術家肌の同級生たちにセンスの違いを見せつけられ、子供の頃から釣りが好きだったということと、ちょうどその頃、近大水産研究所がキンダイ（インガキダイとインダイの交雑種）を作り出したというニュースをテレビで見たという単純な理由で農学部水産学科へ転学部した。

滋賀県に来てからは、重要漁獲対象魚種であるニゴロブナ、アユの資源調査などでは、真夏の炎天下に胴長をはいて湖岸を歩き回り、調査は「体力」ということを実感した。その後水産課で行政を経験し、再び水産試験場で大正15年から連綿と続き、琵琶湖における水質等調査の先駆である琵琶湖定点定期観測や、漁業者からの聞き取り等によって、実際に直面している漁場環境上の問題（農業濁水、北湖のエリ網に大量の藻類が付着し、操業困難にしている等）を抽出し、その現状把握から原因検討まで一連のプロセスを経験した。これらの経験から毎日、琵琶湖に出ている漁業者の「眼」が、いかに鋭いかとい

うことに今更ながら気づかされた。また、それら情報が最も受けやすい位置にある水産関係職場の琵琶湖に対する責任を痛感した。

博物館にいる間も、なるべく多くの時間を琵琶湖に足を運び、漁業者との対話を大切にし、自らも漁業者の「眼」になって琵琶湖を見つめていきたい。

主任学芸員 草 加 伸 吾 (くさか しんご)

略歴 1990年大阪市立大学大学院理学研究科博士課程単位取得、学術修士。同年滋賀県教育委員会事務局文化振興課を経て1996年より現職。

専門分野 森林生態学、森林水文学

研究テーマ 植生の水質調節機能、森林土壌での水質形成過程と伐採前後の変化

「空青し山青し海青し・・・」と歌われた自然豊かな熊野の地に育ち、おいしい水を飲んで育った。山歩きが好きであったことも手伝って、森と水の両方に興味を持つようになった。そして、これまで、森林と水の間を解きほぐす研究を中心に行ってきた。南アルプスの山々を歩き回り、大学時代には、寸又川流域の植生調査・植物相調査などを手がけた。その後、広島江田島では山火事が森林の水や栄養塩類など物質の循環に与える影響を調べ、また貴重な原生林の残る奈良春日山地域では、植生の発達度の違いが水質調節にどのように影響するかなど、主に森林の水質調節機能に関する研究を手がけてきた。現在は琵琶湖の安曇川流域で、森林伐採が環境に及ぼす影響について、伐採前後の水質や土壌の変化などの解明を担当し、あわせて、博物館の環境展示に役立つ新しいデータを得るため、調査を続けている。

これらの研究を通して、人間の森林に対する管理・働きかけが、森林の物質循環や水質調節機能にどのような影響を及ぼすか、水量・水質調節機能の大きい森林とはどのようなものか、また下流域の河川や琵琶湖、海などの水環境に対する負荷の少ない森林管理の方法を探っていきたい。

博物館の展示では環境展示の「水をはぐくむ森林」や「森林、農地、市街地を通る水」、「多雪地の植物」等、野外展示全体のとりまとめと森の育成計画および植栽を担当した。

主任学芸員 楠 岡 泰 (くすおか やすし)

略歴 1985年東京都立大学理学研究科博士課程生物学専攻単位取得、理学博士(東京都立大学)取得、日本学術振興会特別研究員を経て、1991年滋賀県教育委員会事務局文化部文化施設開設準備室、1996年より現職。

専門分野 微生物生態学

研究テーマ 繊毛虫の生態学

物心ついたころから、虫やカエル取りが大好きな少年。横浜市立大学では授業をさぼって大学の裏山をほっつきまわる。チョウと食草の関係について卒業研究をおこなう。筑波大学修士課程では、水生昆虫と付着藻類の関係について研究するつもりが、水中の石をおおっている付着藻類のマットにハゲができていたのをたまたま見つけ、その原因を探っているうちに、アメーバが付着藻類にあたえている影響について研究。博士課程では毎日どぶ川にかよい、原生動物のツリガネムシを個体識別して、その生活史を追っかける。

現在は琵琶湖の繊毛虫と共生藻類について、研究している。

主任学芸員 中 井 克 樹 (なかい かつき)

略歴 1992年京都大学理学研究科博士課程動物学専攻単位取得、日本学術振興会特別研究員(1990?1992年)を経て、1992年滋賀県教育委員会事務局(仮称)琵琶湖博物館開設準備室、1996年理学博士(京都大学)取得、1996年より現職。

専門分野 魚類生態学

研究テーマ 湖沼沿岸域の生態系、外来水生生物の生態、陸生貝類の地理的変異

大阪のベッドタウン、豊中市の団地に生まれ、物心ついたときには捕虫綱を振り回していた。幼稚園の時、南紀白浜の海岸でタカラガイを拾ったことで貝にも興味を持ち始め、小学校低学年以来、だんだんと陸貝に染まっていき、昆虫からは遠ざかる。大学の卒業研究では溪流の水生昆虫、修士1年では比叡山麓のカタツムリの変異を扱う。修士2年にアフリカ・タンガニーカ湖の調査に参加させてもらい、魚類に寄生する甲殻類の生態と、魚類のなわばり行動を潜水調査する。博士課程でもタンガニーカ湖に丸1年潜り続け、魚の繁殖生態を研究する。1990年からは、琵琶湖の北端部でオオクチバスとブルーギルの繁殖生態を調べ始め現在も継続している。勤め始めた1992年に琵琶湖で見つかったカワヒバリガイも、継続して追いつけている。「虫屋」のいなかった博物館準備に関わって、長年眠っていた虫への関心もよみがえり、開館までの3年ほどは、県内の公衆便所にも捕虫網を手に出没した。

主任学芸員 桑原雅之（くわはら まさゆき）

略歴 1982年愛媛大学理学部生物学科卒業、1984年三重大学水産学研究科修士課程中退、同年滋賀県立琵琶湖文化館を経て、1996年より現職。

専門分野 水族生理学

研究テーマ 琵琶湖固有亜種であるピワマスと、琵琶湖流入河川に生息するアマゴとの関係

海に囲まれた長崎県で育ったため、もっぱら海水魚に興味を持っていたが、ひょんなことからサケ科魚類であるイワナとアマゴの関係について卒業研究を行った。それ以来淡水魚（というよりもサケ科魚類）にのめり込み、三重大学修士課程ではアマゴの成長と社会行動の関係について研究を進めていた。しかし、中退して滋賀県に来てからは、琵琶湖の固有亜種とされるピワマスと流入河川に生息するアマゴとの関係、さらにはピワマスの成立機構に興味を持ち、現在はその前段階として、十分に解明されたとは言い難いピワマスの生活史に焦点を当て研究を進めている。

主任学芸員 牧野厚史（まきの あつし）

略歴 1984年関西学院大学経済学部卒業、1990年関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程単位取得退学、関西学院大学社会学研究科研究員を経て、1999年より現職。

専門分野 地域社会学

研究テーマ 環境問題についての地域社会学的研究

最近の環境問題の研究には、生活や生活者ということばがやたらに使われるようになってきた。それはとてもよいことだろうけど、生活という言葉を使うとき、私は少しばかり考えこむことがある。琵琶湖博物館には「湖の環境と人々の暮らし」をテーマとした展示室があり、ごく最近まで琵琶湖の周囲で人々が営んでいた日常生活が紹介されている。この展示室は、琵琶湖博物館の特色をよく表していると同時に、みる人によって評価が分かれる展示室でもある。たとえば、実際の暮らしの中で、展示の世界を経験してきた人々が、展示をみて常識的と判断するのは理由のあることだ。けれども新興住宅地で生まれ、物心ついた頃から、水道の蛇口をひねれば水がでて、トイレは水洗という生活をおくってきた私にとって、展示されている「生活」は、全く経験したことのない未知の世界である。このように、博物館の展示を常識とうけとめる人々の暮らしがある一方で、展示の内容を未知の世界と感ずる人たちの生活がある。それらのことなる暮らしを営んできた人々によって生活世界が成り立っているならば、私たちは、地域環境に生じてくる問題について判断をどのように下していくことになるのだろうか。また私たちの下す判断は、私たち自身の生活を変えていくけれども、それはどのような方向へと向かっているのか。ここに私の基本的な研究テーマがある。

主任学芸員 芳賀裕樹 (はが ひろき)

略歴 1994年名古屋大学理学研究科博士課程大気水圏科学専攻単位取得、同年滋賀県教育委員会事務局(仮称)琵琶湖博物館開設準備室を経て、1996年理学博士(名古屋大学)取得、1996年より現職。

専門分野 陸水化学

研究テーマ 湖水中の生態系と環境の相互作用

私たちの体の中には無数の細胞がいて、それぞれが大切な仕事をしている。私たちが健康な日々を送るためには、各細胞がバランスよく働いていなければならない。なにかの病気になったときには、どのようにバランスが崩れたのかを調べることで、病気の原因や直し方、予防法がわかる。こうしたバランスを研究する分野は、人間を対象にする場合には生理学(代謝学)、そしてその応用の医学ということになる。

「湖沼代謝学」というのは、湖をひとつの生き物に見立て、その中身(生態系)がどのようなバランスで働いているかを調べる研究分野である。内容としては、基礎科学の生理学に近く、病気の直し方よりも、生態系のなり立ちや調節の仕組みを調べることに主眼をおいている。

主任学芸員 亀田佳代子 (かめだ かよこ)

略歴 1996年京都大学大学院理学研究科博士後期課程動物学専攻修了、博士(理学)取得、京都大学生態学研究センター研修員を経て、同年12月より現職。

専門分野 鳥類学

研究テーマ 生態系における鳥類の役割に関する研究

特に鳥だけが好きだったわけではないが、子供の頃から野生動物や自然について興味があった。その中で鳥を研究対象にしている理由は何かといわれると、ひとつは鳥の「飛ぶ」という能力にある。もちろん全ての鳥が飛べるわけではないが、飛翔能力を得たことで渡りなど長距離移動が可能になったり、さまざまな生息環境を利用して生活することができるようになった。たとえば、琵琶湖を訪れるガンやカモの仲間は、湖だけでなく陸上のたんぼでえさをとったりヨシ帯で休憩したりしている。春になれば日本を離れてロシアにまで渡り、そこで繁殖を行う。こうした鳥の移動が、水域と陸域、繁殖地と越冬地の環境にどのような影響を及ぼしているのか。またここまで広範囲でなくても、湖で魚を食べ森林で営巣しフンを落とすカワウは、水域から陸域への物質移動にどのくらい関与しているのだろうか。こうした鳥のダイナミックな動きは、生態系や他生物になんらかの影響を及ぼしていることは確かだ。また逆に、食物条件や他生物などの環境の違いによって、鳥の側も柔軟に反応する。大学院時代に研究したキジバトではビジョンミルクという物質を分泌し、雛の食物とすることで繁殖期間が延長し、1年で何回も繁殖することがわかっている。つまり雛を育てるために必要な食物があれば、ハトでなくても何回も繁殖したり繁殖期間が延びる可能性があるわけである。このように、鳥と環境との相互作用において鳥類の役割とは何なのか、少しでも明らかにすることができればと考えている。

滋賀県あるいは琵琶湖は、たくさんの面白い特徴を持っていながらまだまだそれが十分に生かされていない。博物館が県内各地の人のネットワークを作ったり、世界と琵琶湖をつなぐパイプ役をつとめることで、広く世界に情報発信していけたら、というもの大それた夢の一つである。

主任学芸員 矢野晋吾 (やの しんご)

略歴 1988年早稲田大学政治経済学部経済学科卒業、日経マグローヒル社(現・日経BP社)入社、経済・経営雑誌、建築雑誌の記者を歴任、1993年同社退社、1995年早稲田大学大学院人間科学研究科(生命科学専攻・地域環境論講座)修士課程修了、2000年早稲田大学人間科学研究科博士後期課程修了、同年博士(人間科学・早稲田大学)取得、2000年より現職。

専門分野 環境社会学

研究テーマ 地域（主として農・山・漁村）社会における生活と自然環境の関連についての社会学的研究

幼い頃、私の育った東京・練馬は武蔵野の雑木林（平地でもヤマと呼ぶ農用林）に囲まれ、ミヤマクワガタが捕れた。しかし、その林はことごとくマンションになっていった。周りの大人は「経済が発展した」とか「近代化して便利になった」と言ったが、私には大切なものが、どんどん失われていったとしか思えなかった。そんな疑問から学部は経済に進むが、人間が見えない“科学”に大きな違和感を感じ、民俗学のサークルに入り村に通い始める。村の生活を通して、自分の生きた「高度経済成長期」と、それを支える論理である「市場」を考える必要性を痛感する。マスコミの世界に入ってから企業経営者（特にベンチャービジネス）に取材する日々を送りながら、日本企業は経済学の生まれた欧米とは異質の合理性で動いている現実を目の当たりにする。その合理性とは、「家」や「村」にみられる行動論理であった。家・村は、今でこそマイナスのイメージが強いが、本来はその地域の人々が、生活空間である自然環境（人為的なものを含めて）をうまく利用しながら日常生活を送るために長時間をかけて作り上げた仕組みである。それをもう一度考えることが現代、そして将来の日本社会を考える上で重要だということを変えて理解した。その後、日本社会を知るために、農・山・漁村に滞在し、そこで生活する人々と共に時間と体験を共有しながら、人間社会と自然との関係について教えていただいている。

主任学芸員 大塚 泰介（おおつか たいすけ）

略歴 1998年京都大学大学院農学研究科博士課程熱帯農学専攻修了、博士（農学）取得、島根大学汽水域研究センター非常勤研究員（講師）を経て、2000年より現職。

専門分野 陸上生態系学

研究テーマ 付着珪藻の分布

魚を研究しようとして水産学科に入ったのに、気がついたら「珪藻」などというマイナーな生物を研究していた。川にはいるとよく、石に付いたヌルヌルに足をとられるが、あのヌルヌル（水垢）の主な成分が珪藻である。もっとも、珪藻がマイナーなのは大半の人間の認識においての話である。実際には水気のある場所ならばどこにでもいて、水域で光合成をする生物としては最も重要なものの一つである。種類も多く、少なくとも万の単位だと言われている。

しかしこの珪藻、どこに、どんな種類が、どれくらいいるのか、ほとんど解っていない。研究している人も結構多いのだが、何せ種類と生息場所が著しく多様なので、とても調べきれないのである。そこで私も、この問題に取り組むことにした。水田、水たまり、動物の体表など、まだ珪藻がほとんど調べられていない場所が、すぐ近くにたくさんある。多分、一生かかっても研究のネタが尽きることはないだろう。

移り気なので、10年後に何をやっているかは自分でも見当がつかない。今のところ、付着珪藻の群落を、統計手法を用いて記述することに精を出している。

学芸技師 ロビン ジェームス スミス (Robin James Smith)

略歴 1999年英国レスター大学地質学部卒業、古生物学博士取得。2000年から 2002年日本学術振興会特別研究員として金沢大学、2002年から2003年英国学士院研究員として英国グリニッチ大学、2003年から2004年英国学士院研究員として英国自然史博物館、2004年COE研究員として金沢大学にて研究に従事。2004年12月より現職。

専門分野 国際湖沼学

研究テーマ カイミジンコ (Ostracods) の分類と発達

私はカイミジンコ（ちょうつがいの背中を持つ微小な甲殻類）の分類と、発達、生態と進化について

研究しています。レスター大学（イギリス）の博士論文では、有名なブラジル北東部のサンタナで見つかった世界で最も保存状態のいい化石のカイミジンコを研究しました。その化石は1億年前のものでしたが、まだその殻の中に触角等の一部を残していました（めったにないことです）。それによって現存するカイミジンコと直接比較することができました。大学院のあとも現存するカイミジンコの研究を続け、特にどのように成長するかについて研究しました。異なるグループにおける発達の違いを研究することによって、あるグループが他のグループとどのように関連しているか、さらにその進化がみえてきます。日本に来てからは淡水カイミジンコの分類について研究を始めました。日本ではカイミジンコはとても多様かつ豊富ですが、たくさんの種が名前を持たず、記述もされていません。カイミジンコは気候学や公害学など様々な分野でとても有益ですが、その可能性が完全に解明されるためにはまず名前をつけ記述をすることが不可欠です。琵琶湖博物館で研究を始めてからは、琵琶湖のカイミジンコについても研究しています。すでに新種をたくさん見つけ、琵琶湖はとても興味深い研究対象であることが分かってきました。

◇博物館学研究領域

総括学芸員 マーク ジョセフ グライガー (Mark J. Grygier)

略歴 1984年米国カリフォルニア大学サンディエゴ校スクリップス海洋学研究所海洋生物学博士取得。コペンハーゲン大学及びワシントンD.C.のスミソニアン研究所国立自然史博物館研究員、1988年から90年、1992年から93年、1996年から97年琉球大学研究員。日本学術振興会特別研究員として京都大学瀬戸臨海実験所、團国際生物科学基金を得、広島大学研究員。この間オーストラリア、ロシア、フランス、米国、オーストリアの博物館及び大学で短期研究、スミソニアン研究所国立自然史博物館では独立研究。1997年より現職。

専門分野 生物多様性学

研究テーマ 甲殻類分類学、魚類寄生虫調査、田んぼにおけるエビの生態発生学、海洋寄生虫

大学院の論文には囊胸類の分類学、比較形態学、幼生の生育を扱った。このグループの研究は現在も続けている。コペンハーゲンでは“y 幼生”の研究に着手し、瀬戸臨海実験所では、著名な甲殻類研究学者、故伊藤立則博士の研究課題を引き続いて研究した。沖縄の瀬底島では珊瑚礁寄生虫を研究、又多様な甲殻類グループの幼生生育を比較研究した。広島大学では主としてカイアシ類モンストリラ目の研究に専念、スミソニアン研究所では棘皮動物の寄生性の研究を中心に行った。

大学院では囊胸類をテーマに選んだ。今まで知らなかった分野だったからだ。13歳から海洋生物学や無脊椎動物学の教科書を読んでいたが、これに関しては未知であったため、研究に値するフィールドであると思い、これを選んだ。その後、甲殻類の系統学に関する多くの疑問が徐々に解明出来始めたことから、将来は同じようにまだ解明されていない無脊椎動物に焦点を当ててみようと思った。この内の多くが寄生虫であることを強調したことが、日本で研究を始めるきっかけとなった。1997年までは海洋動物だけを研究対象としてきたが、淡水の琵琶湖や水田ではほぼ同じテーマで未知の分類群に取り組み、系統学的な謎を解明して行きたい。特に、カイエビという甲殻類に興味を持っている。

総括学芸員 用田 政 晴 (ようだ まさはる)

略歴 1979年岡山大学法文学専攻科史学専攻考古学コース修了、岡山県総務部県史編纂室、滋賀県教育委員会文化財保護課、琵琶湖博物館開設準備室を経て、1996年より現職。

専門分野 考古学

研究テーマ 古代国家成立前史

遺跡は文化財であり、国民共有の財産であるといわれている。永く後世に伝えることは、人類の義務

でさえあるといわれている。では、何のために残し、伝えようとするのか。将来の研究のため、歴史学習の素材として活用するため？

私ははじめて古墳の上に立った時、土器のかけらを手にした時、城跡の石垣に触れた時、いい知れぬ思いがこみあげてきた記憶がある。人は、生まれながらにして、時間をさかのぼって感動をおぼえる能力を潜在的に備え、また、その権利ももっている。これは歴史環境享有権、あるいは文化環境甘受権と言いかえられるかも知れない。

私は、こうした感動を、みんなが受けられる世界を残しておきたいと考えている（琵琶湖博物館C展示室『考古学徒からみた歴史環境』より）。

専門学芸員 秋山 廣光（あきやま ひろみつ）

略歴 1974年日本大学農獣医学部水産学科卒業、同年滋賀県立琵琶湖文化館を経て、1996年より現職。

専門分野 水族病理学

研究テーマ ズナガニゴイの繁殖行動、ギギの発音機構

子供の頃は無類の虫好き。でも、どういう訳か、標本にするのが嫌で、飼育観察するのみ。しばらくして、魚を飼育し始め、昆虫の飼育では難しかった環境を作り出すことが容易であることに魅せられる。以後魚一辺倒の人生を歩むことになる。しかし、一人で飼育をしたり、研究したりするのではなく、魚に対する想いを少しでも多くの人に伝え、魚大好き人間を増やしたいと念じている。琵琶湖文化館時代に、水族部門で撮り貯めた写真映像資料（主に35mmフィルム）の整理を行い、写真活用が十分にできるようにした。百聞は一見に如かず、の例えのように実物から得られる知識は必要十分なものであるが、映像資料からも聞いたり読んだりすることより実物にずっと近い知識が得られる。蓄積された写真資料は多岐にわたり、6万点を超える資料数に達していた。完全な整理にはまだ時間を要するものの、今後撮影してゆく映像とともに、琵琶湖博物館の貴重な資料となるだろう。写真撮影とその整理・利用は、博物館の重要な業務と考えるが、私自身の興味は生態学や行動学にあり、現在は魚の産卵行動や声の研究を行っている。

主任学芸員 戸田 孝（とだ たかし）

略歴 1991年京都大学理学研究科博士課程地球物理学専攻単位取得、同年科学技術庁防災科学技術研究所特別研究員（非常勤）、1992年理学博士（京都大学）取得、同年滋賀県教育委員会事務局（仮称）琵琶湖博物館準備室を経て、1996年より現職。

専門分野 地球物理学

研究テーマ 人工衛星や航空機からの観測による琵琶湖の流動の実態解明

「地球物理って何ですか。」と、聞かれたら「気象庁の仕事にかかわる基礎研究全て」だと答えることにしている。大気の動きはもちろん、海水や雨水の動き、地震の発生などについて、その原因まで含めて探求する学問である。私の専門は、その中でも海や湖などの「大きな水たまり」の中の水の動きを調べることだ。この水の動きを、人工衛星や飛行機などで遠くから観測する「リモートセンシング」という方法で調べるのを得意としている。琵琶湖博物館へ来るまでは、黒潮の暖かい水がどのように沿岸へやってくるのかを、人工衛星のデータで調べていた。琵琶湖博物館では、同じような方法で、琵琶湖の水の流れの細かいところを調べていこうと思っている。リモートセンシングを使うと、広い範囲の細かい情報を一度に観測することができる。つまり、一度の観測で大量のデータが得られる。リモートセンシングでは、この大量の観測データをどうやって効率的に処理するかが重要になる。そこで、コンピュータの使い方も並行して研究していたら、ずいぶん詳しくなってしまった。こういう縁で、琵琶湖博物館では、情報システムの整備も担当させていただき、最近では「博物館情報論」も研究テーマに加えている。

主任学芸員 八尋 克郎 (やひろ かつろう)

略歴 1994年九州大学大学院農学研究科博士後期課程昆虫学専攻修了、博士(農学)取得。九州大学農学部研究生、国際協力事業団派遣職員を経て、1996年より現職。

専門分野 陸上昆虫学

研究のテーマ オサムシ上科甲虫の系統分類学的研究および生態学的研究

大学に入ってから現在まで、オサムシ上科甲虫の、形の不思議さや生態のおもしろさにひかれて研究を行ってきた。漫画家の手塚治虫が、ペンネームをこの虫にちなんでつけたことを知る人は以外に多い。オサムシは他の昆虫にはあまりない“飛べない”という大きな特徴を持っている。そのため、地方色豊かな方言と同じように、同じ種でも地域ごとに違いが見られる。地域特性の代弁者であるオサムシから、日本あるいは世界の中で琵琶湖とその集水域がどのような地域なのかを考えてみたい。そして、オサムシがどのような過程で現在の分布に至ったのかを明らかにしたい。

琵琶湖とその集水域はその豊かな自然環境から、オサムシのほかにも実に多くの種の昆虫類が生息している。しかしながら、何がどこに生息しているのかという基礎的な事さえほとんど解明されていない。琵琶湖とその集水域の昆虫相を地域に住む一般の人達や専門家と一緒に調べて明らかにしていきたい。

琵琶湖周辺には古琵琶湖層群をはじめ昆虫化石も多く出てくる。他の分野の研究者とも連携し、博物館でしかできないような研究を行い、展示、交流、資料整備、情報事業などの博物館活動に展開させたい。

主任学芸員 芦谷 美奈子 (あしや みなこ)

略歴 1990年千葉大学理学研究科修士課程生態学専攻修了、理学修士、同年滋賀県教育委員会事務局文化部文化施設開設準備室を経て、1996年より現職。

専門分野 水生植物学

研究テーマ 水生植物の繁殖と成長の研究

水生植物の生態学が専門。沈水植物の繁殖生態の研究の一環として、イバラモを対象とした調査を行っているほか、沿岸帯の種類組成やその役割についても調べている。最近では、水中だけではなく水辺の植物にも興味が広がりつつあり、特にヨシ(およびヨシ帯)の生態系に人の利用がどのように絡み合っているかについても、そのうち調べたいと考えている。生物の研究以外には、博物館の教育活動や触れる展示手法と利用者のメッセージの受け取り方について、実践的な取り組みも含めて調べてきた。

事業部では、長年ディスカバリールームの計画と運営に関わってきたが、平成12年度から情報センターで図書の仕事を担当、平成15年度半ばよりは平成16年度企画展担当として専念した。いずれの仕事においても、利用者の方々にとって博物館という場が、利用しやすく、楽しく知的刺激にあふれた場所にしたと考えている。

学芸員 中藤 容子 (なかとう ようこ)

略歴 1996年京都大学大学院文学研究科修士課程地理学専攻修了、文学修士、同年5月より現職。

専門分野 民俗学

研究テーマ 琵琶湖水系における伝統的な資源利用とその変化

長い学生生活に終止符をうち、琵琶湖博物館開館の年、民俗学部門担当の学芸員となる。大学では文学部の地理学研究室に籍をおき、日本の地域社会に見られる社会集団と空間との関係を解明すべく、学部時代は村落を、修士課程時代は都市を駆けめぐった。近代化した生活様式の裏側でなおムラ的な社会集団が残っていることに非常に興味を覚えたのである。

学芸員となってからは、近江の祭を見てまわったり、観察会の広報ポスターをつくったり、生活実験工房の田んぼの田植えをしたり、収蔵庫にこもって民具資料の整理をしたりと慌ただしい。これらの民

具たちを研究の材料として、これから少しずつ彼らが語ってくれる物語を紹介していきたいと思っている。

主査（教員） 谷 口 雅 之（たにぐち まさし）

略歴 1986年滋賀大学教育学部地学研究室卒業。滋賀県公立小学校教員を経て、2003年より現職。

専門分野 教育学

研究テーマ 博物館と学校とのよりよい連携の在り方

子どもの頃から家族でよく琵琶湖へ出かけた。そして、日本一大きな湖「琵琶湖」を故郷にもっていることが、いつの間にか私の自慢となった。また、自然科学が好きで、特に地球（空・天気）や宇宙に興味を持っていた。大学では地学研究室に入り、地球物理学を専攻した。そして、船で琵琶湖に出たの水温や湖流の観測、湖岸での風の観測などを通して、琵琶湖の大きさからおこる「湖陸風」に関心を持ち、滋賀県と近隣府県のアメダスのデータから「湖陸風」について研究した。大学を卒業してからも、風を感じるたびに、琵琶湖のことが頭に思い浮かぶ。また、宇宙に関しても興味を持ち続け、天体観望会にも定期的に参加している。

教師として、人として、子どもたちにいつも五感をいっぱい使って生活して欲しいと願い、子ども自身の気づきや考えを大切にしてきた。

そこで、琵琶湖博物館でも子ども達が五感をフルに使い、自ら考えることができる体験学習プログラムを開発していきたいと考えている。そして、私自身も五感をみがき、「湖と人間」を見つめていきたい。

主査（教員） 中 村 公 一（なかむら こういち）

略歴 1988年滋賀大学教育学部理科教育研究室卒業、滋賀県公立中学校教員、在職中2001年滋賀大学大学院教育学研究科理科教育専修修了、教育学修士、2005年より現職。

専門分野 教育学（中学生対象）

研究テーマ 琵琶湖博物館を利用した学習プログラムの開発

京都生まれ京都育ちだが、子どもの頃から琵琶湖へ遊びに来ていた。滋賀大学に入学した縁で、滋賀県教員になる。

教員としての経験上、おぼろげながら子どもに認知的な葛藤を起こすと理解が深まるのでは、と思っ
てはいたが、何の裏づけもない経験論であった。教員11年目に現職大学院生として再び、滋賀大学理科
教育研究室で学び、認知心理学や授業評価の方法を知り、知識を構成する子どもの学びに興味をもつよ
うになる。博物館は子どもが概念転換をする機会にあふれているところである。どういう「しかけ」が
子どもの学びにとって有効か、考えていきたい。

琵琶湖博物館 年報 9号

平成17年(2005年)12月 発行

編集・発行 滋賀県立琵琶湖博物館
〒525-0001 滋賀県草津市下物町1091
電話 077-568-4811

印刷 株式会社スマイ印刷工業

©滋賀県立琵琶湖博物館 2005

Printed in Japan

R100 この冊子は古紙配合率100%の再生紙を使用しています。

